

富田清友遺跡

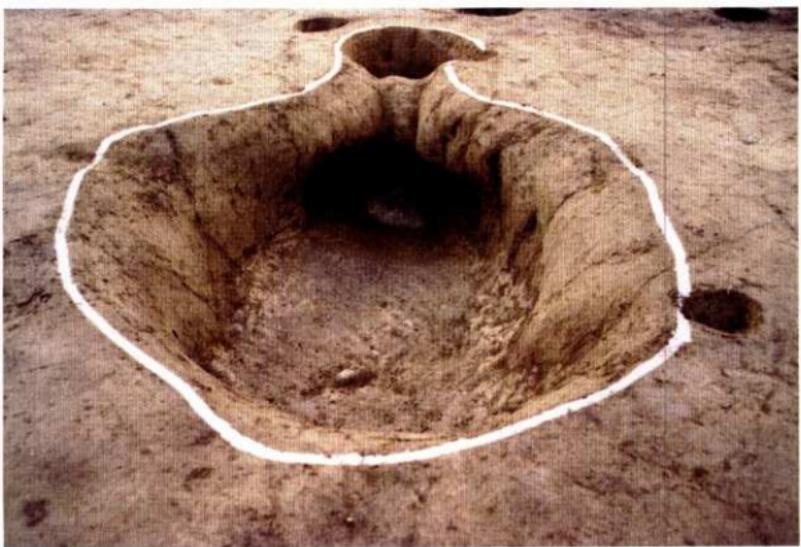
2002

財團法人 岐阜県文化財保護センター

とみ だ きよ とも い せき
富 田 清 友 遺 跡

2 0 0 2

財団法人 岐阜県文化財保護センター



E102煙道付炉穴



E102出土繩文土器

序

美濃加茂市は、古くから木曽川水運の港町として、また古代から近世に至るまで主要街道の駅家・宿場町として栄えてきました。現在も、岐阜・名古屋・東濃・飛騨を結ぶ要の地となっており鉄道や国道などの幹線交通路が集まっています。今回実施した富田清友遺跡の調査は、東海環状自動車道（関～美濃加茂）の建設に伴うものであり、この道路の建設によりさらに名古屋市を中心とした周辺都市との機能分担がより効果的にすすめられると考えられます。

遺跡の所在する美濃加茂市下米田町は、木曽川と飛騨川に挟まれ、豊かな自然に恵まれた場所で、縄文時代から近世に至るまでの多くの遺跡が残っている地域です。今回の調査では、縄文時代早期の竪穴住居跡2軒、煙道付炉穴6基を初め、弥生時代から中世に至るまでの数多くの遺構が見つかりました。特に、縄文時代早期の竪穴住居跡や煙道付炉穴の発見は、県内でも類例の少ない貴重な遺構で、煙道付炉穴の1基は縄文時代の様子と変わらないまま確認されました。遺構からは数多くの押型文土器や石器が出土しました。今後、周辺地域との関わりが解明されていくことと思いますが、本報告書が当地の歴史研究の一助となるとともに埋蔵文化財に対する多くの方々の認識を深めるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 服 部 卓 郎

例　　言

- 1 本書は美濃加茂市下米田町に所在する富田清友遺跡（岐阜県遺跡番号21211-09261）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は東海環状自動車道（関～美濃加茂）建設に伴うもので、建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）から岐阜県が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成12年度に実施し、村瀬泰啓が担当した。
- 4 本書の執筆は以下のとおりである。

第4章 第7節…松岡千年

第5章 第1節…山形秀樹

その他、編集…村瀬

- 5 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 6 空中写真測量は株式会社ジーアイエス中部に委託して行った。
- 7 放射性炭素測定と木製品の樹種同定は、(株)パレオ・ラボに委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成について、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略・五十音順)。
奥義次、可見光生、田村陽一、八賀晋、藤村俊、矢野健一、吉田英敏、渡辺博人、
美濃加茂市教育委員会、美濃加茂市都市計画課
- 9 本文中の方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。
- 10 土および土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄 1998 『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)による。
- 11 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

- 1 出土遺物の実測図の縮尺は土器は1/3、石器は2/3・1/2・1/3、柱根は1/4を原則とし、遺物の法量に合わせて実測を行った。
- 2 遺構実測図の縮尺は1/40を基本とする。
- 3 出土遺物の層位については包含層出土の遺物については基本層序に従いⅠ層、Ⅱ層、Ⅲ層…と記し、遺構内出土の遺物については各遺構毎に上層から01層、02層、03層…と記した。
- 4 遺構名は原則として発掘調査時のものを用いた。また、報告書掲載の遺構については遺構の種類ごとに下記の略号を用いた。

SB………豊穴住居跡	SF ……煙道付炉穴	SK ……上坑
P ……ピット	ST ……豊穴状遺構	SH ……掘立柱建物跡
SE………井戸状遺構	SM ……盛土状遺構	

- 5 遺物番号は今回の調査で出土した土器を1番から順に付した。また、調査区周辺の表面採集の土器については191番から順に付した。石器は201番から順に付した。また、柱根については301番から順に付した。なお、石器については遺物取り上げ時の番号も合わせて明記した。

- 6 石器の法量計測については次の器具を使用した。

- ・長さ・幅・厚さ……カーボンファイバーノギスDIALS (TAJIMA製)
- ・質量 ～600g : LIBROR I EL600 (SHIMADZU製 秤量600g)
600g～6,000g : LIBROR EL6000 (SHIMADZU製 秤量6,000g)
6kg～20kg : SD20 (Yamato製秤量20kg)
20kg～ : ヘルスマーター (TANITA製秤量120kg)
- ・折損などにより、完形でない場合の法量については()で示した。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	2
第3節 遺跡と遺物の公開・広報	2
第4節 遺物・調査記録の整理作業	5
第5節 調査体制	5
第2章 遺跡の立地と環境	6
第1節 遺跡周辺の立地・環境	6
第2節 周辺の遺跡	7
第3章 基本層序と遺構・遺物の概要	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構の概要	9
第3節 遺物の概要	21
第4節 時期区分	27
第4章 遺構と遺物	28
第1節 縄文時代の遺構と遺物	28
第2節 弥生時代の遺構と遺物	55
第3節 古墳時代の遺構と遺物	57
第4節 中世の遺構と遺物	60
第5節 試掘調査出土の柱根	88
第6節 包含層の遺物	89
第7節 表面採集の遺物	92
第5章 自然科学分析	94
第1節 放射性炭素年代測定	94
第6章 まとめと考察	96
参考文献	
図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1	第5図 各調査区の土層図	10
第2図 グリッド設定および地形測量図	3	第6図 A区遺構配置図	11
第3図 美濃加茂市の河岸段丘の分布図	6	第7図 B区遺構配置図	13
第4図 主な周辺の遺跡	8	第8図 C区遺構配置図	15

第9図	D区遺構配置図	17
第10図	E区遺構配置図	19
第11図	出土土器の割合	22
第12図	各地區出土遺物の割合	22
第13図	出土石器の石材組成	25
第14図	磨石の法量分布図	26
第15図	石器羽石材組成	27
第16図	縄文時代の遺構位置図	28
第17図	E100-SB1柱穴実測図	29
第18図	E100実測図	30
第19図	E100出土縄文土器分布図	31
第20図	E100出土縄文土器実測図	32
第21図	E100出土石器分布図・E100出土石器実測図(1)	33
第22図	E100出土石器実測図(2)	34
第23図	E120実測図・E120出土縄文土器分布図、 E120出土石器分布図	36
第24図	E120出土遺物実測図	37
第25図	E101実測図	39
第26図	E101出土縄文土器分布図	42
第27図	E101出土縄文土器実測図(1)	43
第28図	E101出土縄文土器実測図(2)	44
第29図	E101出土縄文土器実測図(3)	45
第30図	E101出土縄文土器実測図(4)・E101出土石器 分布図・E101出土石器実測図(1)	46
第31図	E101出土石器実測図(2)	47
第32図	E101出土石器実測図(3)	48
第33図	E102実測図	50
第34図	E102出土縄文土器実測図・E102出土縄文土 器分布図	51
第35図	E102出土石器実測図(1)	52
第36図	E102出土石器分布図・E102出土石器実測図 (2)	53
第37図	E112出土石器実測図	53
第38図	E103・E112・E144実測図	55
第39図	E142実測図・E142出土遺物実測図	56
第40図	B10実測図・B10出土遺物実測図	57
第41図	C216実測図・C216出土遺物実測図	59
第42図	B28実測図・B28出土遺物実測図	61
第43図	E141実測図	62
第44図	C141出土遺物実測図	63
第45図	C224実測図	64
第46図	C224出土遺物実測図	65
第47図	C225実測図	66
第48図	C225出土遺物実測図	67
第49図	SH1実測図・SH1出土柱根実測図、 SH1出土遺物実測図	69
第50図	SH2実測図・SH2出土柱根実測図	71
第51図	C8実測図・C8出土遺物	73
第52図	中世土坑実測図	75
第53図	C29・D17出土遺物実測図	76
第54図	D17実測図	79
第55図	中世ピット実測図	81
第56図	柱根実測図	82
第57図	ピット出土遺物実測図	85
第58図	試掘トレーン内ピット実測図・柱根実測図	89
第59図	包含層出土石器実測図	90
第60図	包含層出土土器実測図	91
第61図	表面採集の遺物	93
第62図	聚穴居跡の屋根の高さ推定図	97
第63図	E区の剥片石器の石材組成	99
第64図	石器の石材組成の比較	99

表 目 次

第1表	各地区出土遺物一覧表	22
第2表	出土石器石材集計表	25
第3表	V期の各地区的遺構数	60
第4表	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	95
第5表	E区剥片石器石材組成集計表	99
第6表	石器の石材組成比較表	99
第7表	遺構計測表(1)	102
第8表	遺構計測表(2)	103
第9表	遺構計測表(3)	104
第10表	遺構計測表(4)	105
第11表	遺構計測表(5)	106
第12表	遺構計測表(6)	107
第13表	遺構計測表(7)	108
第14表	遺構計測表(8)	109
第15表	出土土器観察表(1)	110
第16表	出土土器観察表(2)	111
第17表	出土土器観察表(3)	112
第18表	出土石器計測表(1)	113
第19表	出土石器計測表(2)	114
第20表	柱根計測表	114

写真図版目次

図版 1 富田清友遺跡周辺	図版 9
図版 2	9-1 B10完掘状況（東より）
2-1 調査区全景（東より）	9-2 C216完掘状況（北より）
2-2 調査区全景（西より）	9-3 B28完掘状況（北より）
図版 3	9-4 B28竹製品出土状況（東より）
3-1 A区完掘状況（西より）	9-5 C141完掘状況（北より）
3-2 B区完掘状況（北より）	9-6 C224完掘状況（北より）
3-3 D区完掘状況（南より）	9-7 C225完掘状況（北より）
図版 4	9-8 C区北東部完掘状況（北より）
4-1 C区完掘状況（北より）	図版10
4-2 E区完掘状況（南より）	10-1 C8検出状況（南より）
図版 5	10-2 D17後出状況（南より）
5-1 C区南西部完掘状況（東より）	10-3 A20検出状況（北より）
5-2 E100完掘状況（東より）	10-4 A24完掘状況（西より）
5-3 E100土層断面東西ベルト	10-5 E69検出状況（北より）
5-4 E143完掘状況（東より）	10-6 C147柱根（東より）
5-5 作業風景	10-7 C115柱根（東より）
図版 6	10-8 B3柱根（東より）
6-1 E120完掘状況（南より）	図版11
6-2 E100-SF1完掘状況（東より）	11-1 E100・E120出土縄文土器
6-3 E101完掘状況（東より）	11-2 E101出土縄文土器（1）
6-4 E101-SF2完掘状況（東より）	図版12 E101出土縄文土器（2）
6-5 E101-SF3完掘状況（東より）	図版13 E101出土縄文土器（3）・E102出土縄文土器
6-6 E101-SF4完掘状況（東より）	図版14 磨石A類
6-7 E101-SF5完掘状況（北より）	図版15
6-8 E4-1 E101遺物出土状況	15-1 磨石A類
図版 7	15-2 磨石B類
7-1 E102完掘状況（東より）	図版16 剥片石器類・白玉
7-2 E102焚き口付近（東より）	図版17
7-3 E102煙道部（東より）	17-1 扇平砥石・打製石斧
7-4 E102台石出土状況	17-2 砧器
図版 8	17-3 E101出土台石
8-1 E102遺物出土状況（南より）	17-4 E102出土台石
8-2 作業風景	17-5 E100出土台石
8-3 E145検出状況（東より）	図版18 弥生時代以降の遺物（1）
8-4 作業風景	図版19 弥生時代以降の遺物（2）
8-5 E117断ち割り（西より）	図版20 弥生時代以降の遺物（3）
8-6 E119断ち割り（西より）	図版21 弥生時代以降の遺物（4）
8-7 E142完掘状況（北より）	図版22 弥生時代以降の遺物（5）
8-8 E142遺物出土状況	図版23 ピット出土柱根・表面採集の遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

富田清友遺跡は、美濃加茂市下米田町の字富田、清友に位置する遺跡である。遺跡の所在する美濃加茂市は岐阜県のはば中央部南端に位置し、名古屋市の衛星都市的な性格を持つ地域である。名古屋市とその周辺諸都市の機能分担がより効果的に進められ、現在都市部にみられる交通混雑が解消されることを目的として、東海環状自動車道の建設が予定された。

建設工事の実施に先立ち、建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）から岐阜県が委託を受け、財團法人岐阜県文化財保護センターが平成11年度試掘確認調査を実施した。調査は5月12日から9月30日まで行った。建設予定地内の23,000m²に対して、トレンチ掘削により、造構・遺物の有無とその概要について検討を行った。調査面積は調査対象区域の約5%に当たる1,200m²である。調査の結果、縄文時代から中世までの造構が広範囲にわたる遺跡であることを確認し、遺跡発見の通知を提出した。遺跡名は富田清友遺跡（岐阜県遺跡番号21211-09261）とすることが定められた。富田清友遺跡の本発掘調査については、建設省中部地方建設局（現国土交通省中部地方整備局）及び岐阜県教育委員会との協議の結果、造構が検出されると判断された1,480m²を対象として、平成12年度に実施することとなった。



第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000)

第2節 発掘調査の経過と方法

本遺跡における調査は東海環状自動車道の高架部分に当たり、調査区は5本の橋脚部に分かれている。そのため、調査区を便宜上東側からA区～E区に区分した。また、座標北を基準として5m×5mのグリッドを設定し、遺跡の範囲と開発区域の端を考慮して、東から西に向かってA～BJのアルファベット、北から南に向かって1～30の算用数字を付し北東角の杭番号により呼称した。

発掘調査は平成12年7月4日より開始し、平成12年11月22日まで行った。

表土掘削は全ての地区で重機を用いて行った。試掘確認調査によってC区が最も遺構密度が高いと予想されたため、まずははじめにC区から表土掘削を行い、その後D区、B区、A区、E区の順で行った。

各地区の中世以前の包含層の厚さはほとんど15cm以下で、中には現代の搅乱坑や近世以降の水田耕作などにより包含層が消滅している箇所もみられた。この包含層を慎重に人力で掘削し、遺構面まで掘り下げを行った。遺構検出作業では、遺構の平面形の確認及び遺構相互の前後関係を確認し、縮尺50分の1で略測図を作成した。

遺構掘削は、竪穴住居跡や竪穴状遺構、煙道付炉穴、大土坑（大小は1mを基準とし、土坑と呼称する）など長軸が1mを越えるものについては土層観察用ベルトを残しつつ、遺構の底まで掘り下げ、埋没状況を記録した後、ベルトを除去し完掘した。これに対して、小土坑（本報告書ではピットと呼称する）など長軸が1m未満のものについては半截を行い、柱痕跡の有無や埋没状況を記録した後、残りを掘り下げた。なお、井戸状遺構のように掘削の深さが1mを越えるものや柱根が確認できたものについては、空中写真測量実施後、重機を用いて遺構の断ち割り調査を行った。また、住居跡などの中のピットについては、その後の断面の記録をとるため住居跡の主軸や並びを意識して半截し、記録した後完掘した。

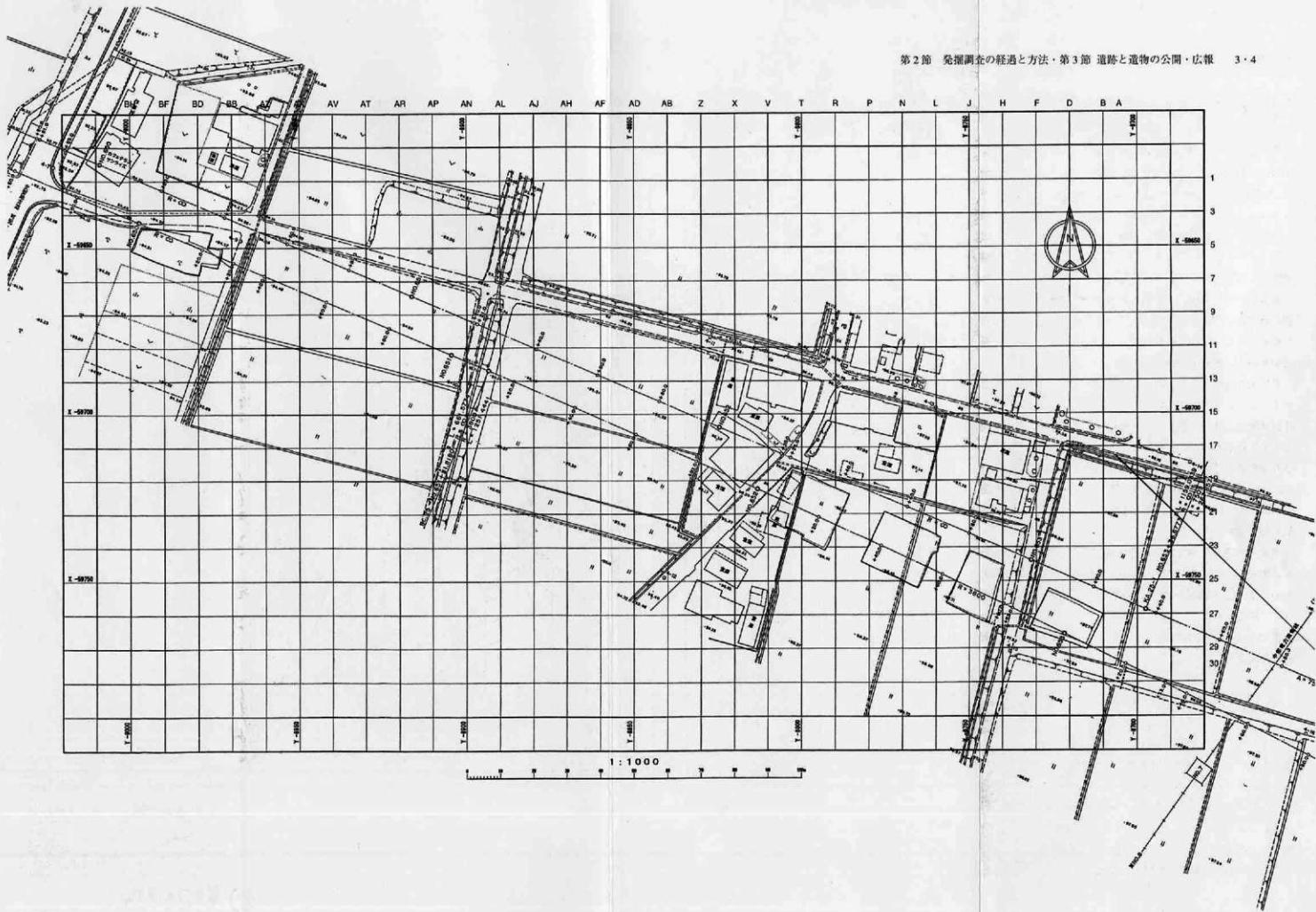
遺構の実測については、11月8日調査区全体を縮尺50分の1で空中写真測量を行った。また、より詳細を期すため縮尺20分の1で手測り実測を行い、遺構の観察結果を記録した。遺物の取り上げについては、包含層の段階では、層位とグリッド名の記録を原則とし、遺構検出後はトータルステーションの遺物システムを用いて取り上げた。

縄文時代の遺構の中で確認された炭化物については、位置を記録した後、自然科学分析（放射線炭素年代測定）を行った。

第3節 遺跡と遺物の公開・広報

平成12年11月4日に現地説明会を開催し、260名の参加をみた。また、平成13年7月14日に行われた「岐阜県新発見考古速報」において作成された平成12年度の発掘調査事例で遺跡の概要を紹介した。また、平成13年11月17日～12月16日間に開催した発掘速報展「いにしえの美濃と飛騨」において主要な遺物の展示と解説を行った。





第2図 グリッド設定および地形測量図

第4節 遺物・調査記録の整理作業

平成12年度、遺物の第1次整理を行い、平成13年度はそれを基に、出土遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の基本的な流れは、以下の通りである。

遺物の洗浄→土器の硬化剤処理→遺物の注記→土器の接合→遺物の実測・観察表の作成→

造構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→図版作成→遺物データベースの作成→

遺物と実測図の収納・保管

なお、本報告書の本文の執筆は上記の作業と並行して行った。

第5節 調査体制

本発掘調査から整理作業に至る調査体制は以下のとおりである。

調査部長 高橋幸仁（平成12年度）、武藤貞昭（平成13年度）

調査部次長 武藤貞昭（平成12年度）、片桐隆彦（平成13年度）

調査担当課長 柏植卓伸（平成12年度）、高木徳彦（平成13年度）

担当調査員 村瀬泰啓（平成12～13年度）

発掘作業従事者 小川鍔、尾関悦子、加納和好、須田良子、吉田明広

整理作業従事者 大塚道子、小木曾美智、高田桂子、丹羽香



調査前（A～D区）東より



調査前（E区）東より



作業風景



実測・測量作業風景

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡周辺の立地・環境

富田清友遺跡は美濃加茂市下米田町則光字富田、字清友に所在し、同市南東部に位置する。

美濃加茂市付近の地形は、北部の山地、中央部の丘陵地、そして南部の木曾川・飛騨川の河岸段丘の平坦面に大きく分けることができる。北部の伊深地区や三和地区の山地は美濃帯の那比・上麻生および金山ユニットに属する中古生層（主にチャート・砂岩・珪質泥岩など）からなり、標高は300～500mである。中央部の蜂屋地区や山之上地区に広がる丘陵地は主に蜂屋層と呼ばれる新第三紀中新世の火山堆積物（溶岩・火山碎屑岩・凝灰質砂岩など）からなり丘陵部の南端部では、同じく新第三紀中新世の中村層（疊岩・凝灰質砂岩・シルト岩など）や新第三紀鮮新世の土岐砂疊層（疊・砂など）が局所的に分布する。南部の平坦面は第四紀更新世以降に形成された木曾川・飛騨川の河岸段丘面であり、市街地を含む低位段丘面、西部の加茂野地区周辺の中位段丘面、上野地区周辺の高位段丘面に区分されている。

富田清友遺跡は、第四紀更新世以降の飛騨川の堆積、侵食活動によって形成された河岸段丘群の低位段丘上（A区の標高：97.67～97.81m、B区：96.50～96.88m、C区：96.27～96.77m、D区：96.32～98.74m、E区94.41～94.70m）にあたり、最下層の疊層上には飛騨川からの堆積層（水磨された径25cm～50cmの凹縫）が確認できる。飛騨川に近づくにつれて南西方向に段丘面は低くなっている。細かく5段に分類されている。富田清友遺跡はこの段丘の最も高い面に位置している。

この段丘面は乏水地域となっており、以前から農業用水の確保のため池が作られている。なお、昭和25～29年にかけて、飛騨川から揚水し、この地域を灌漑する米田用水の建設工事が行われたことや昭和46～49年にかけての圃場整備事業などによって水の供給が確保され、ため池は機能を失い消滅してきている。



第3図 美濃加茂市の河岸段丘の分布図

第2節 周辺の遺跡

富田清友遺跡周辺は多くの遺跡が分布している。それらは飛騨川・木曽川流域の河岸段丘上およびその周辺の台地上や山すそに位置するものが多い。以下本遺跡が所在する低位段丘上の遺跡を中心にお概観したい。

旧石器時代の遺跡は、低位段丘上では確認されていない。しかし、木曽川左岸の可見市宮之脇遺跡ではナイフ形石器などの出土が報告されている。

縄文時代の遺跡として為岡遺跡、則光遺跡、野籠遺跡、牧野小山遺跡、中富遺跡、二ツ塚遺跡などが挙げられる。そのうち低位段丘上で本遺跡のような早期の遺構が確認された遺跡は、今のところない。ただし、牧野小山遺跡は主体となる時期が中期後半であるが早期から晩期までの各時期の遺物が出土している。

弥生時代の遺跡としては、野籠遺跡、尾崎遺跡、為岡遺跡などが挙げられる。野籠遺跡からは遠賀川式の壺形土器が出土している。尾崎遺跡からは、磨製石庖丁などが出土している。為岡遺跡からは14基の方形周溝墓が確認されているが、そのうち10基は弥生時代のものである。

古墳時代の遺跡としては、尾崎遺跡、牧野小山遺跡、今遺跡、針田遺跡などで集落跡が検出されている。また、本遺跡の西側に所在する稲荷塚古墳は、この地区の中核的な存在であると考えられており、この地区を基盤とした豪族の存在が推測される。

古代の遺跡としては、針田遺跡、牧野小山遺跡などが挙げられる。本遺跡の西側に隣接する針田遺跡では、この時期の竪穴住居跡が49軒確認されたほか、1,000基を越えるピットも確認されており、飛騨川から本遺跡に至る地域一帯が、集落域であったことがわかる。

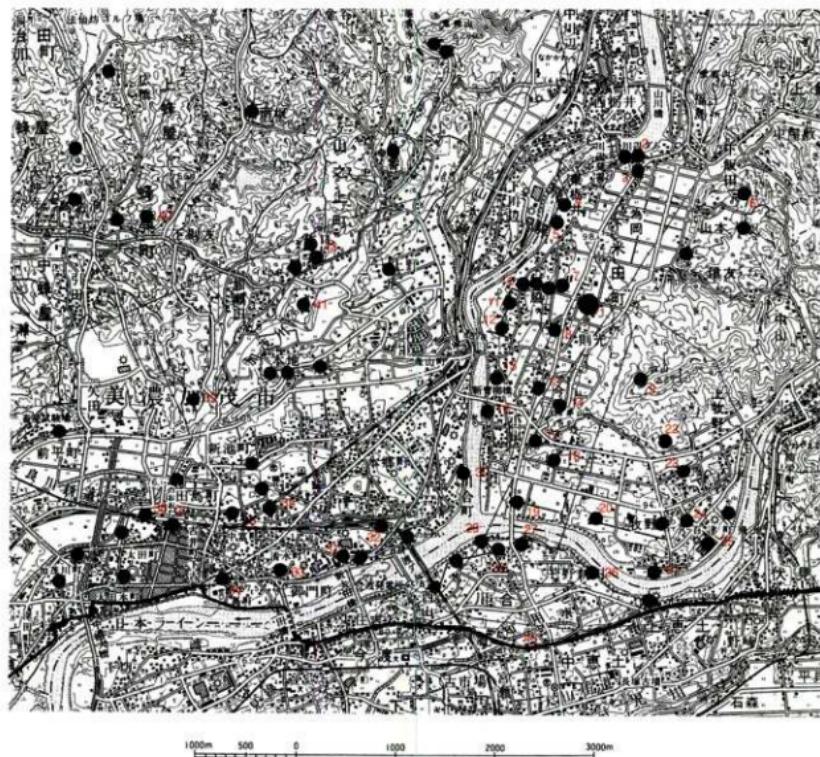
中世以降の遺跡では、佐口遺跡、木ノ下遺跡、大坪遺跡など最近になり調査事例が増加しつつある。佐口遺跡や木ノ下遺跡では、石組み遺構が検出されている。構造が似通っており、近接する遺跡であることからその関連性が注目されている。そのほか佐口遺跡では、2基の素掘り井戸や掘立柱建物群の柱穴と考えられるピット群が検出されている。大坪遺跡では、多数の白瓷系陶器や古瀬戸のほか、輸入陶磁も出土し、この時期の多数の柱穴群が確認されている。しかし、古代以前に比べて中世以降の発掘調査事例は少なく今後の調査が期待される。



佐口遺跡現地説明会の様子



野籠遺跡現地説明会の様子



- | | | |
|--------------|-------------|----------|
| 1 富田清友遺跡 | 16 小山親音北遺跡 | 31 野雀遺跡 |
| 2 天満宮遺跡 | 17 週間1~2号古墳 | 32 川合西遺跡 |
| 3 為岡遺跡 | 18 下牧野古墳 | 33 塚弓古墳 |
| 4 光徳寺北遺跡 | 19 牧野小山遺跡 | 34 神明堂古墳 |
| 5 光徳寺古墳 | 20 岐大農場遺跡 | 35 裏追間遺跡 |
| 6 山木遺跡 | 21 花之下遺跡 | 36 中富遺跡 |
| 7 稲荷塚古墳 | 22 白山古墳 | 37 後田遺跡 |
| 8 刑光遺跡 | 23 火塚古墳 | 38 井口遺跡 |
| 9 白山山頂1~2号古墳 | 24 小貝戸遺跡 | 39 尾崎遺跡 |
| 10 鉤田遺跡 | 25 神明道跡 | 40 大坪遺跡 |
| 11 中屋敷古墳 | 26 東野遺跡 | 41 木ノ下道跡 |
| 12 深渡遺跡 | 27 川合遺跡 | 42 佐口遺跡 |
| 13 今遺跡 | 28 川合古墳群 | 43 中山道 |
| 14 坂下1~2号古墳 | 29 宮之脇遺跡 | |
| 15 長福遺跡 | 30 川合東遺跡 | |

第4図 主な周辺の遺跡

第3章 基本層序と遺構・遺物の概要

第1節 基本層序

本遺跡の基本層序は大きくI～V層に分層した。

I層：調査前の地表を覆う表土で、第1次圃場整備事業（明治末～大正2年）および第2次圃場整備事業（昭和46～49年）に伴う整地土・現代耕作土を一括した。調査区の全面に広がり、E区のような耕地整理を受けていないところでは10cm程度浅いが、2度にわたる耕地整理を行っている。A～D区では整地上が入り、20～50cmの厚さとなっている。

II層：圃場整備前の耕作土層であり、近世の遺物を多く包含することから近世に形成された層と判断した。現在の水田耕作がなされている地区では、近世水田耕作土である。水と耕作の影響で粘性が強く土色は褐灰色である。水田耕作が行われていない地区では褐色である。E区で20cm程度の厚さ、A～D区にかけては5～20cmの厚さである。

III層：古墳時代から中世にかけての遺物を包含する層である。厚さはE区では15cm程度安定して堆積しているがA～D区では耕作による踏み込みによって安定せず、5～15cm程度の厚さである。粘性があり、土色は暗褐色～黒褐色である。

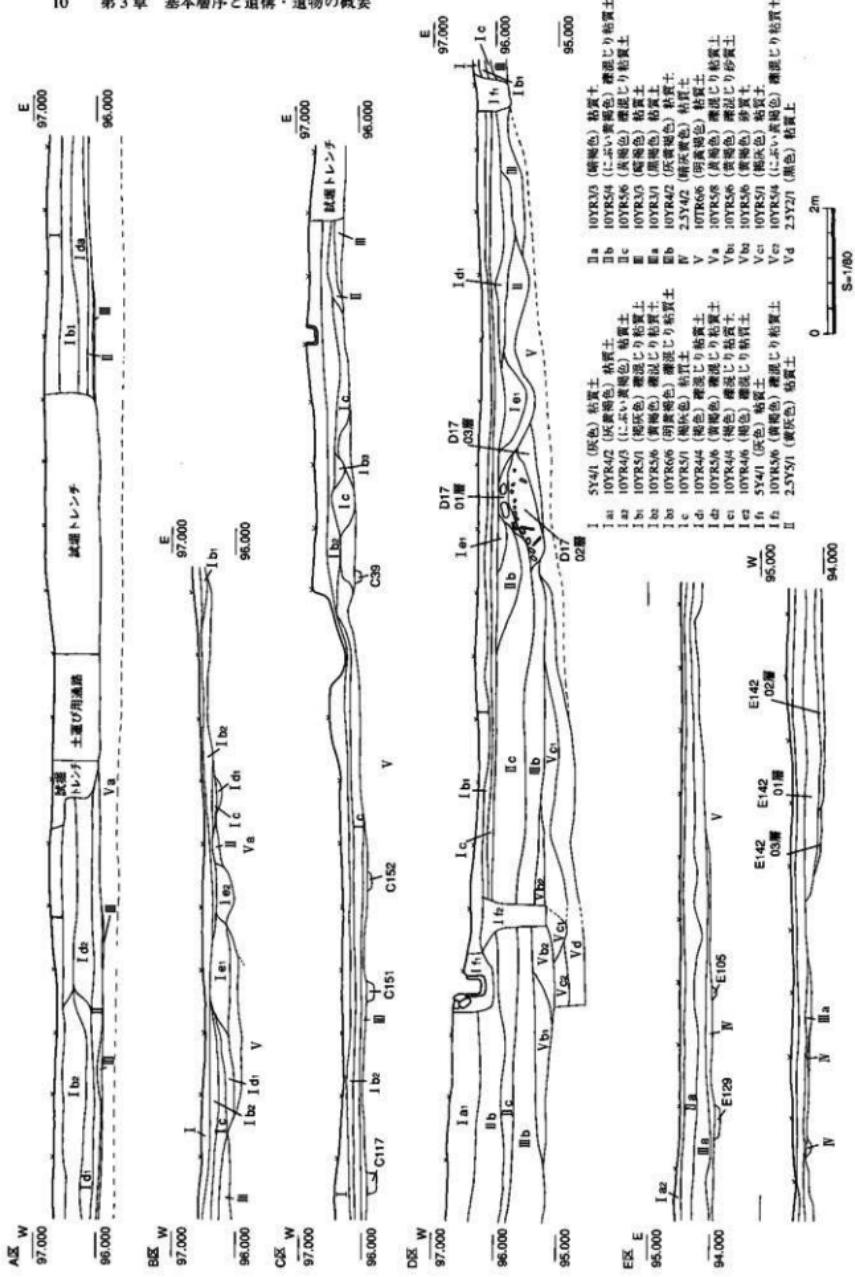
IV層：縄文時代の遺物を包含する層である。E区の東側のみに堆積しており10cm程度の厚さである。粘性が強く、I～III層に比べしまりがあり、土色は暗灰黄色である。

V層：段丘堆積物の堆積層である。3～25cmの円礫を所々含んでいる。粘性が強く、しまりがある。土色は明黄褐色である。遺物を含まず地山と考えられる。

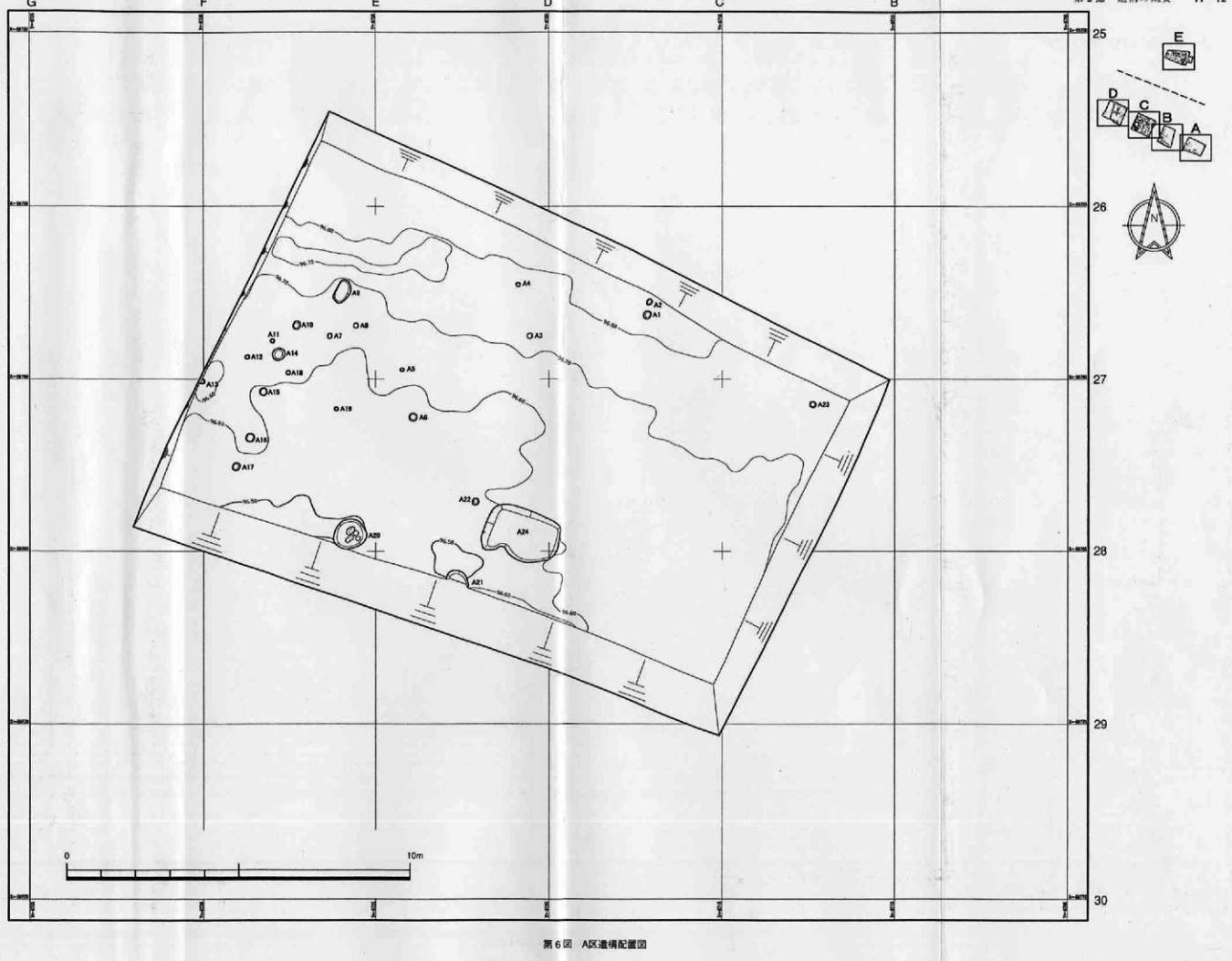
第2節 遺構の概要

今回の調査で確認した遺構面は1面で、検出した遺構はV層上面から掘り込まれている。従って縄文時代から中世まで、各時期の遺構が存在していると考えられているが、層位的に区別することが困難であるため、時期判定については出土遺物や遺構の切り合い関係を考慮して行なった。そのため、帰属の不明な遺構も存在する。遺構の略号については凡例や第1章で記したとおり、遺構の調査時に検出順に番号を付けた。なお、調査の結果遺構でないものについては番号詰めを行っているため、時期や地区が順序だてられているとは限らない。

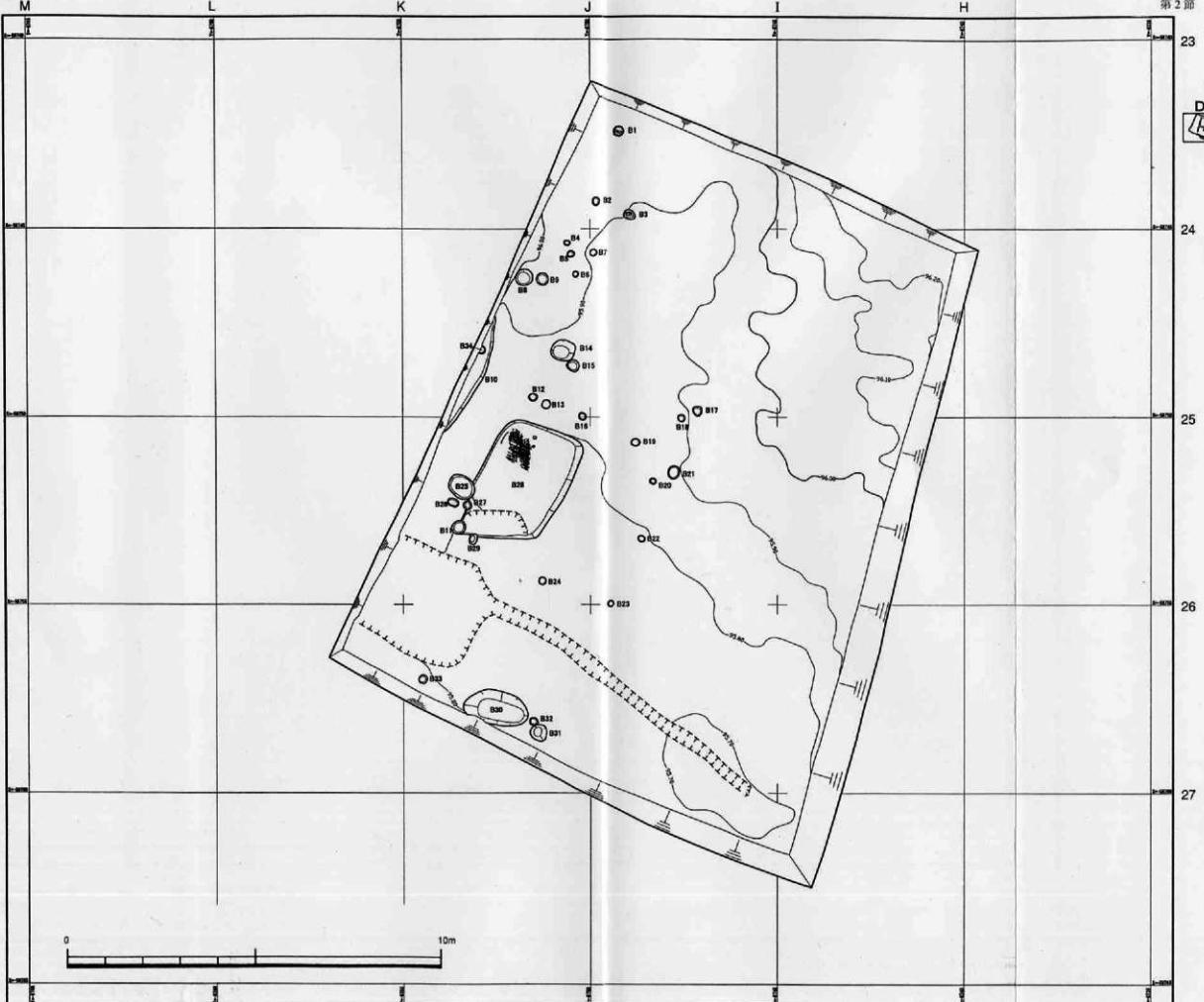
今回の調査で確認された遺構の時期は、縄文時代早期・弥生時代後期・古墳時代・中世の4時期に分けて考えることができる。



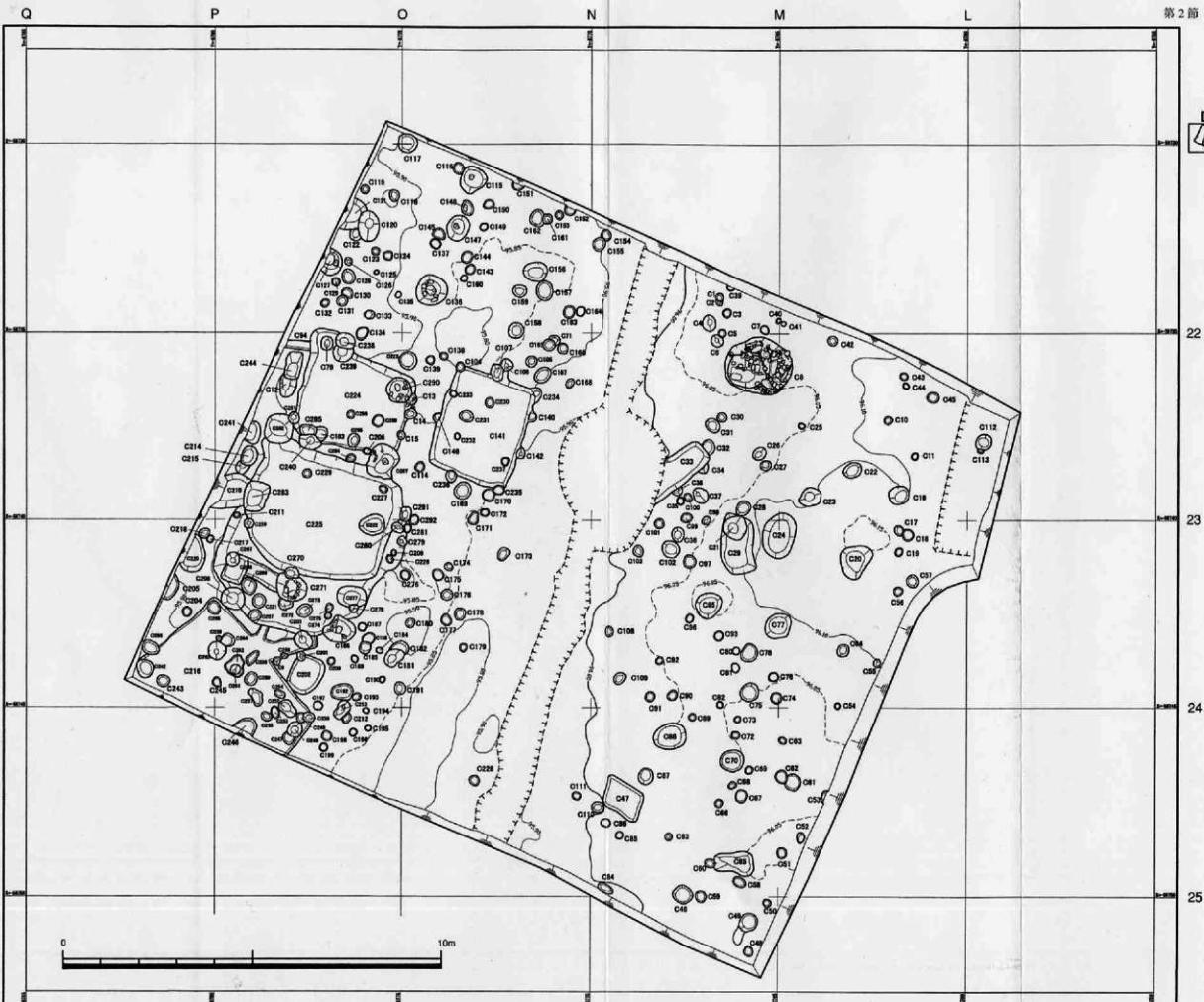
第5図 各調査区の土層図



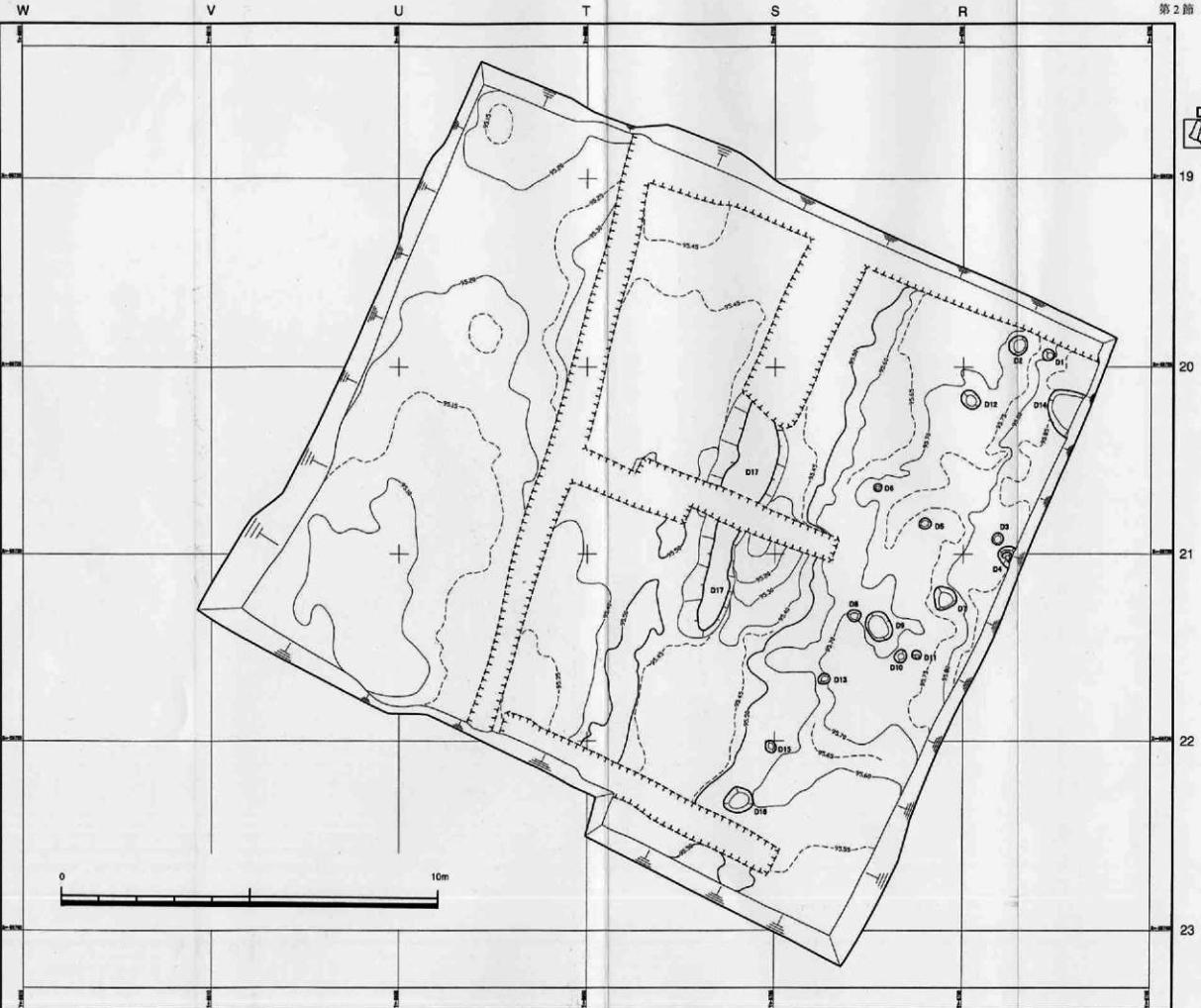
第6図 A区造構配置図



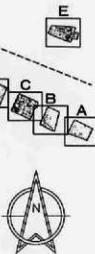
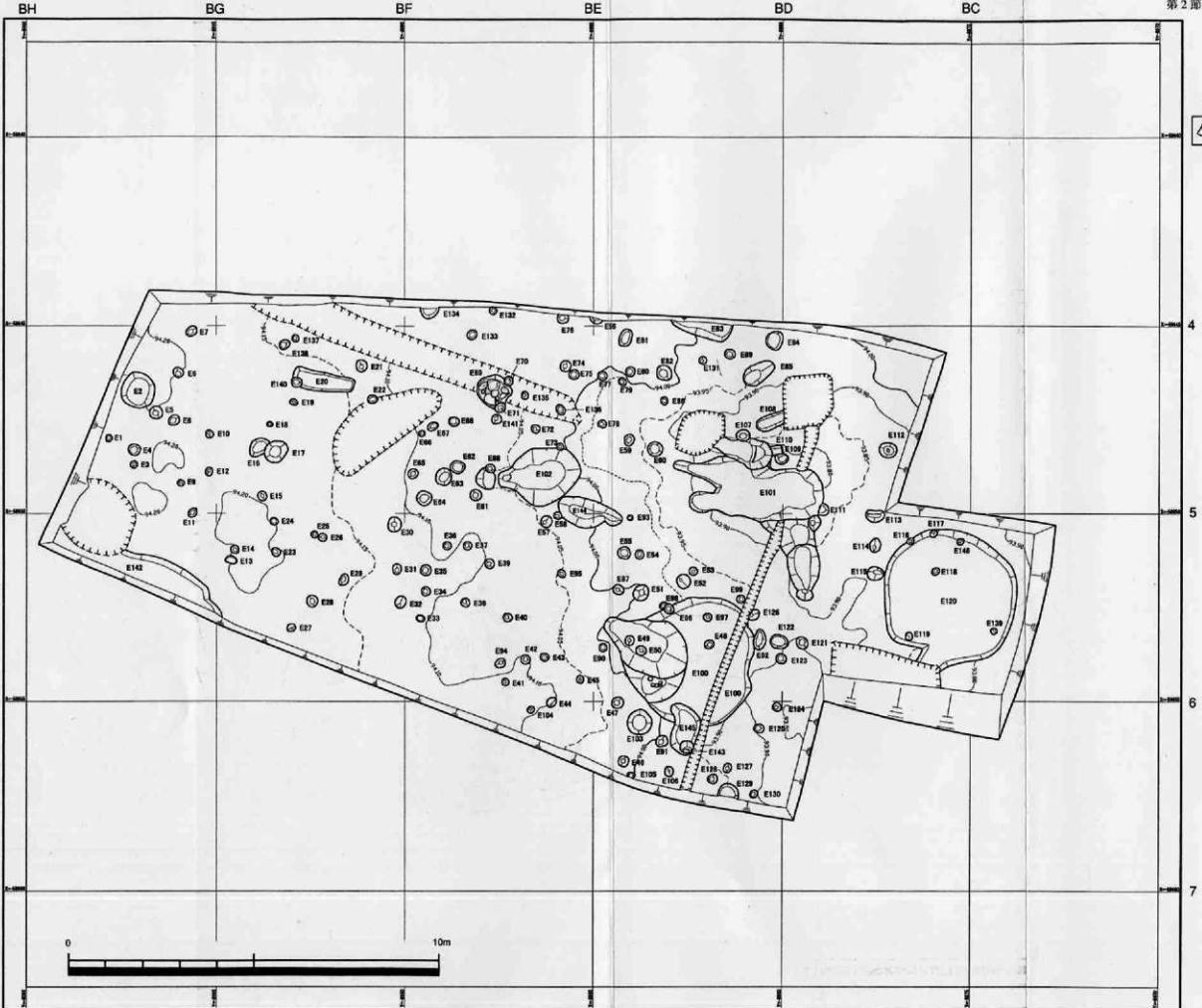
第7図 B区造構配置図



第8図 C区道構配図



第9図 D区遺構配置図



第10図 E区諸機配置図

A地区で検出した遺構は24基である。遺物の出土は少ないものの、埋土の土質などから中世の遺構と考えられる。ピット22基、土坑2基である。検出されたピットのうちA10・A11・A12・A13やA10・A14・A15・A16・A17のように一部直線上に並ぶ構列状の遺構である可能性のあるピットがみられる。但しピット間の距離が一定でないため、個々の掘り込みとして捉えた。

B地区で検出した遺構は34基である。遺物の出土は少ないものの、埋土の土質や遺構の形から古墳時代および中世の遺構と考えられる。古墳時代の遺構は1基検出した。遺構の大部分が調査区外へ広がっているものの竪穴住居跡と考えられる。中世の遺構は竹製品が出上した竪穴状遺構1基、ピットおよび土坑30基が確認された。ピットの中で2基には柱根が残り、樹種同定を行なった。B区の遺構は調査区の西側に偏りがみられる。

C地区で検出した遺構は、今回の調査の中で最も多く292基である。古墳時代の遺構1基と中世の遺構291基である。このうち中世の遺構には出土遺物がなく、埋土からの判断となるものも多く含まれている。古墳時代の遺構は煙道部のある竪穴住居跡で調査区の南側に遺構の広がりがみられる。中世の遺構は竪穴状遺構3基、井戸状遺構1基、掘立柱建物跡2軒などである。竪穴状遺構は、いずれも正方形または長方形の形状である。掘立柱建物跡2軒は、柱根が残るピットも確認された。若干軸方向がずらされて建てられているが、ほぼ同じ方向に建てられている。なお、柱が西側あるいは北側に伸びる可能性が高く、規模は不明である。確認された柱根は腐食が進んでいるものが多いが、樹種同定の結果、様々な種類の雜木が使われている。井戸状遺構は調査区の中央やや北側で確認され、中世の遺物が良好な状態で出土した。井戸は上面には川原石が擂鉢状に敷かれ、下層は素堀りで垂直に掘り込まれていた。

D地区で検出した遺構は、17基である。中世のピットおよび盛土状遺構で、盛土からは古墳時代から近世までの遺物が出土した。D地区の西側には自然流路がありその境として作られていたと考えられる。

E地区で検出した遺構は146基である。縄文時代、弥生時代、中世の遺構が確認された。特に縄文時代の遺構は、一部中世のピットとの切り合い関係があるのみであった。縄文時代の遺構からは、2基の竪穴住居跡、6基の煙道付炉穴や3基の土坑が検出された。竪穴住居跡のうち、1基は竪穴住居跡を利用して煙道付炉穴が作られている。また、4つの煙道付炉穴が切り合った状態で検出された。そのうち3基は西側に煙出しを持ち1基のみ南側に煙出しを持つ。三重県の鴻ノ木遺跡などのように古い煙道付炉穴を利用して新しい煙道付炉穴が作られている。また、1基は単独で作られている。周辺に土坑もみられ、2基の遺構の関連性が推測される。弥生時代の遺構は、南側の調査区外へも広がりをみせており、形状は不明であるが、竪穴状の遺構となっている。北側の一部も擾乱土坑に切られている。中世の遺構は多くがピットと土坑で、そのうちの1基は石が積まれていた。この1基は中世墓の可能性が考えられる。

第3節 遺物の概要

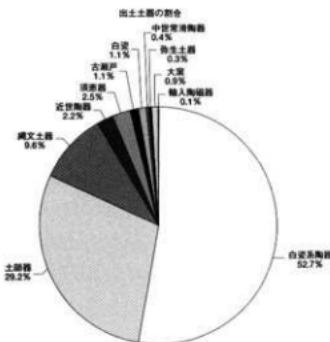
今回の調査で出土した遺物は、1,872点である。その大半が細かく破碎された小片である。土器類は、縄文時代早期の深鉢から、弥生時代後期の鉢・高杯、古墳時代から古代にかけての土師器・須恵

器・白壺、中世の白壺系陶器・古瀬戸・大窯、近世の連房など広範な時期に及んでいる。石器類では、縄文時代の石鏃や石錐などの剥片石器類や磨石、砥石、打製石斧、台石などの礫石器類が出土している。また、中世の砥石も3点出土した。そのほか、包含層から白玉が1点出土した。

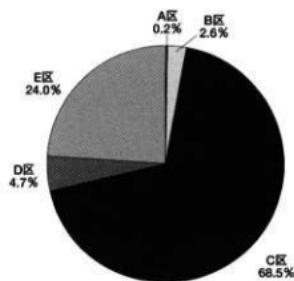
遺物の出土状況をみると、遺構内から出土した遺物が1,780点（95.1%）と非常に高い割合を示す。それに比べて、包含層や排土、搅乱などの遺構外出土の遺物は92点（4.9%）である。これは一つには包含層の上面までかなり削平を受けていることも関係している。

遺物の時期を以下の図のように分類した。これによれば中世以降の遺物の割合が最も多く白壺系陶器799点（52.7%）古瀬戸16点（1.1%）中世常滑陶器6点（0.4%）、大窯14点（0.9%）である。そのほか縄文時代の遺物が145点（9.6%）であり、本遺跡の主要な時期は縄文時代と中世である。なお、白壺系陶器に次いで、数量では土師器が443点（29.2%）と多いが、細片が多く、古墳時代に属するものから古代・中世にわたるもののが含まれており、その中で時期が特定できるものは非常に少ない状況である。

また、地区別にみると約70%の遺物がC区から、また約25%の遺物がE区から出土し、遺跡の中心は2地区に分かれている。しかも、縄文土器はE区のみで出土していることから、A～D区の調査区の中では遺構の中心がC区にあり、縄文の遺跡がE区に存在するといえる。



第11図 出土土器の割合



第12図 各地区出土遺物の割合

第1表 各地区出土遺物一覧表

	土 器		石 器		合 計
	遺構内	包含層	遺構内	包含層	
A区	4	0	0	0	4
B区	43	4	2	0	49
C区	1,219	12	43	8	1,282
D区	28	50	1	9	88
E区	151	6	289	3	449
合計	1,445	72	335	20	1,872

このほかE区から搬入磚が100点出土した。

1 土器類

縄文土器

出土した縄文土器はその多くが、大川a式古段階の土器に似た押型文土器である。出土遺物は145点で、遺構数も少ないため、遺物の個体識別を行った。その結果、以下に示す個体を確認した。

E100の遺物

個体名	特徴
E100-A	長方形が市松状に回転施文される押型文土器。住居跡より出土。
E100-B	楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。住居跡より出土。
E100-C	口縁部が外反し、楕円文と山形文が回転施文される押型文土器。
E100-D	口唇部に長方形が回転施文され外面には刺突が施される押型文土器。
E100-E	長方形が市松状に回転施文される押型文土器。
E100-F	長方形が市松状に回転施文される押型文土器。
E100-G	楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。
E100-H	小粒の楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。
E100-I	長方形が格子目状に回転施文される押型文土器。

E101の遺物

個体名	特徴
E101-A	口縁部が外反し頸部に刺突文胸部に長方形が回転施文される押型文土器。
E101-B	胸部上方に長方形、下方に山形が回転施文される押型文土器。
E101-C	口縁部が外反し頸部に刺突、胸部に長方形が回転施文される押型文土器。
E101-D	口縁部が外反し頸部斜め方向、胸部楕円文が回転施文される押型文土器。
E101-E	口縁部が外反し、胸部に楕円文が回転施文される押型文土器。
E101-F	長方形が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-G	楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-H	楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-I	長方形が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-J	長方形が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-K	胸部に楕円文と山形文が回転施文される押型文土器。
E101-L	楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-M	楕円文が市松状に回転施文される押型文土器。
E101-N	口縁部がわずかに外反し楕円文が膨らむ形で回転施文される押型文土器。
E101-O	口縁部がやや外反する表裏縄文土器。

E102の遺物

個体名	特徴
E102-A	口縁部が外反し頸部に刺突文脇部に褚円文が回転施文される押型土器。
E102-B	撫糸文(?)の土器。

E120の遺物

個体名	特徴
E120-A	褚円文が市松状に回転施文される押型土器。
E120-B	長方形が市松状に回転施文される押型土器。
E120-C	山形文が回転施文される押型土器。

なお、縄文土器ではあるが、文様が不鮮明であったり、土器表面が剥離し、個体識別ができないものもあり、個体数はもう少し多い可能性もある。

弥生土器

E142の堅穴状遺構で条痕文系の鉢や壺が出土した。弥生時代後期の遺物である。また、包含層から中期に属する壺の口縁部が1点出土した。遺物数は4点と少ない。

須恵器

B10やC216の堅穴住居跡のほか、若干包含層から出土している。壺・坏身・坏蓋・無蓋高坏・横瓶が出土している。遺物数は39点と少ない。

土師器

C216の堅穴住居跡から壺や壺が出土している。C224の堅穴状遺構から内耳鍋や土師器皿の小片が出土している。また、C218からはS字壺が出土している。そのほか時期が不明の小片も多く出土している。遺物数は443点である。

白瓷

C8の井戸状遺構やC216の堅穴住居跡などから出土している。瓶や盤、碗などが出上している。遺物量は14点と少ない。

白瓷系陶器

C141やC224、C225などの堅穴状遺構やピットから多くの遺物が出土している。藤沢編年による第5型式以降の遺物が出土している。小片が多く接合できないものが多いが、薄手の第8型式以降のものが多い。碗・小皿・鉢が出土している。北部系に混じり若干南部系のものも出土している。

遺物数は799点と土器類の中で最も多く全体の52.7%を占める。

古瀬戸

C141やC225などの堅穴状遺構や包含層から出土している。中期以降のものが多い。鉢目付大皿や縁軸小皿、注口、茶入れ、香炉などが出土している。遺物数は16点である。

大窯

C224やC225の堅穴状遺構や包含層から出土している。擂鉢や碗などが出土している。遺物数は14点と少ない。

中世常滑陶器

C8の井戸状遺構やD17の盛土状遺構などから甕が出土している。遺物数は6点である。

近世陶磁器

包含層の上層などから瀬戸美濃連房窯の碗や鉢などが出土している。遺物数は35点である。

輸入陶磁器

青磁および白磁の碗が1点ずつ出土した。いずれも小片である。

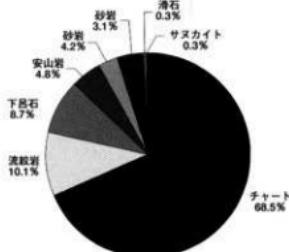
2 石器類

今回の調査では455点が出土した。出土石器（搬入礫100点を除く）の石材組成は第13図、第2表のとおりである。

石器を大きく剥片石器類と礫石器類、搬入礫に大別した。なお、搬入礫の中には礫石器の磨石に似た形状で使用痕は確認できないものの、意図的に持ち込まれていることから石器類の範疇として、参考資料として石器別石材組成を第15図に記した。455点の石器のうち、100点が搬入礫である。

剥片石器類

縄文時代早期の堅穴住居跡や煙道付炉穴などから多くの剥片石器が出土している。そのうち製品は非常に少なくほとんどがフレイクまたはチップである。製品としては石鎌5点、楔形石器2点、石錐1点、サイドスクレイバー4点、RF（調整剥離をされた剥片）2点、UF（微細な剥離痕のある剥片）1点である。チャートの割合が高い。



第13図 出土石器の石材組成

第2表 出土石器石材集計表

石材	数量(点)	質量(g重)
チャート	243	2382.7
流紋岩	36	85270.5
下呂石	31	110.8
安山岩	17	8712.9
砂岩	11	4914.0
泥灰岩	15	1080.2
滑石	1	0.04
サスカイト	1	1.9
合計	355	102473.04

礫石器類

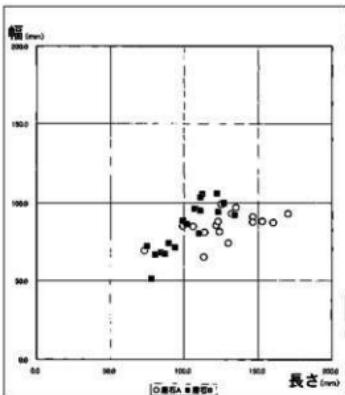
縄文時代早期の堅穴住居跡や煙道付炉穴などから多くの礫石器が出土している。磨石、礫器、扁平砥石、台石・石皿、打製石斧である。

磨石

礫石器類の中で最も多く出土し、磨面の位置により分類を行った。なお、A類とB類の両面が磨られているものは、A類に含めた。

磨石A類 いわゆる「特殊磨石」と呼ばれているもので長軸の側縁部に磨面を持つもの

磨石B類 磨の最も平坦部分を磨面としているもの長さと幅の関係をグラフ化したのが第14図である。A類は幅7~9cmのものを多く使い、長さは10~17cmとばらつきがみられる。一方B類は長さに比例して幅も増えるというグラフでは一直線上に並ぶ傾向がうかがえる。



第14図 磨石の法量分布図

礫器

1点のみE120の堅穴住居跡から出土した。石材は砂岩である。

扁平砥石

縄文時代早期に特徴的な砥石で恵那郡坂下町の柵の湖遺跡で多く出土している。E101から4点、E102から1点出土した。

台石・石皿

磨石とセットで使われていると思われ、石の表面が非常に平滑となっている。敲打痕の残るものもみられる。9点が出土した。なお、今回の調査で出土した礫石器の観察から表面の様子を基に分類を行った。

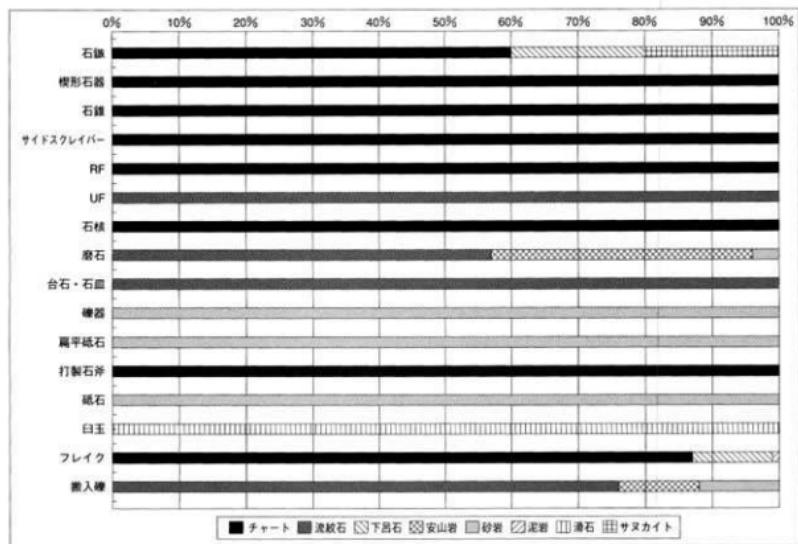
打製石斧

縄文遺構の集中するE区からは確認されず、全てA~D区の出土である。13点出土したが、いずれも折損している。

搬入礫

縄文の遺構の中で、明らかに持ち込まれたものでしかも、使用痕が確認できないものを搬入礫とした。全て川原石で、石材は大半が漫飛流紋岩である。100点出土した。石が重なって出土しているも

のや、一部並ぶようにもみられる石がみられたが、集石遺構と言えるほどの集中をみせたものは確認されなかった。



第15図 石器別石材組成

第4節 時期区分

今回の調査で確認された遺構の時期は、縄文時代早期・弥生時代後期・古墳時代・中世の4時期に分けて考えることができる。これを踏まえ、記述の便宜上Ⅰ期からⅤ期に大きく区分する。

縄文時代をⅠ期とする。時期幅が極めて広いが、明確な遺構は早期に限られており、遺物も早期のものが大部分であることから、小時期区分は行わなかった。

弥生時代をⅡ期とする。この時期は、後期の遺構が検出されているほか、包含層から中期の遺物も1点出土していることから合わせてⅡ期とした。

古墳時代をⅢ期とする。この時期は古墳時代中期の遺構が検出されている。また、遺構内や包含層から古墳時代前期から後期に関する遺物も少量出土していることからⅢ期として区分した。

古代をⅣ期とする。この時期の明確な遺構は確認されていないが、遺構内や包含層からこの時期の遺物が少量出土している。

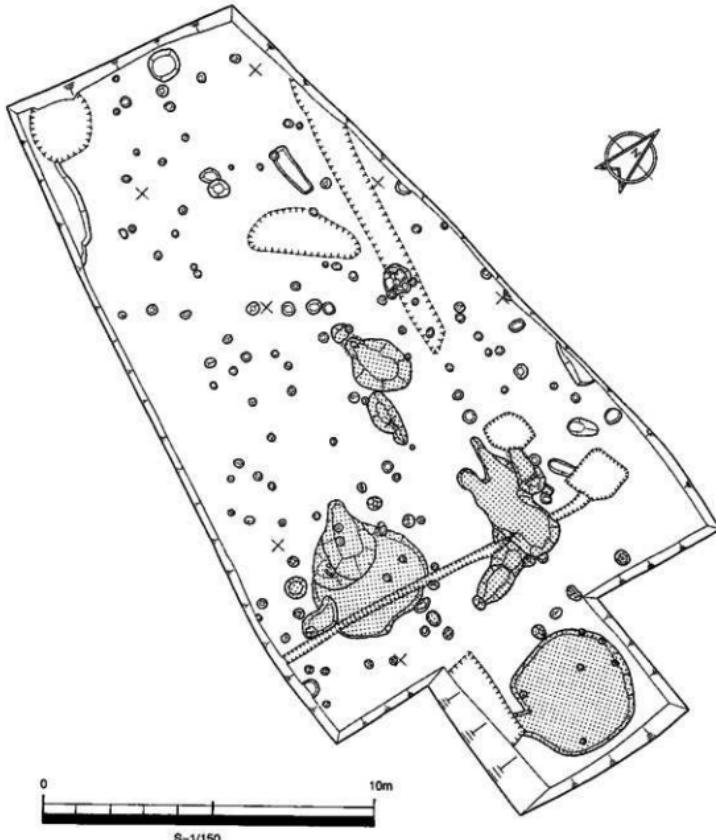
中世以降をⅤ期とする。この時期の遺構は中世の竪穴状遺構や、掘立柱建物跡などである。遺構内からこの時期の遺物が多く確認されている。

第4章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

本節では、E区に展開する縄文時代の堅穴住居跡・煙道付炉穴を中心とする遺構について記述する。I期の遺構は堅穴住居跡2軒、煙道付炉穴6基、土坑4基、ピット27基の合計39遺構である。

E区の調査区のうち、東側に集中して確認された。この調査区付近は西側で段丘面の境があり、高位段丘面の縁の部分である。東側がわずかに低くなってしまっており、そこでI期の遺構（第16図の網かけ部分）は確認された。



第16図 縄文時代の遺構位置図

(1) 堪穴住居跡

第1号住居跡(E100-SB1)(図17~22、図版5・11)

遺構

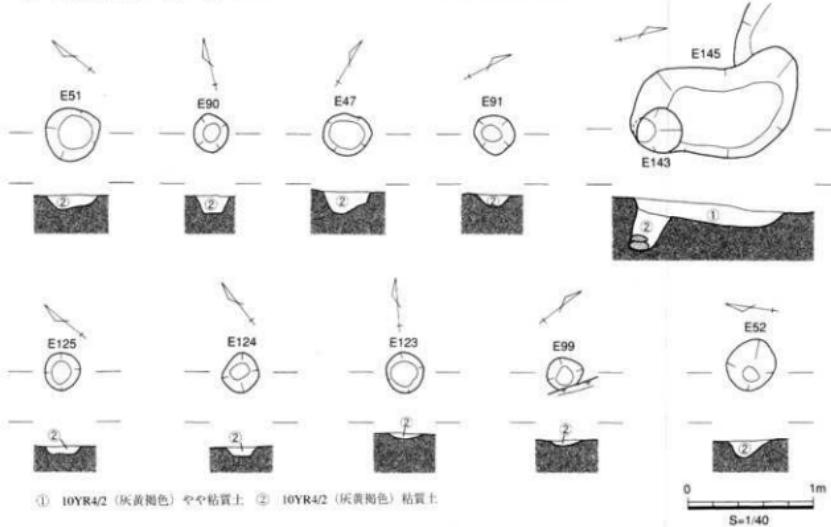
E区の5BD~6BD区に位置する。西側でE100-SF1に切られ、また、調査区の排水用に作った溝により東側が一部切られている。東西両端で遺存状態がやや悪いが、平面形は円形に近いと考えられる。南北が3.6m、検出面からの深さは0.08m程度である。主軸方向はN-63.5°-Wで、壁面の立ち上がりは緩く皿状にくぼみ、底面は平坦である。周溝や貯蔵穴など住居内の施設は確認できなかったが、皿状のくぼみの外側に径0.30~0.40mの円形または楕円形のビット(E51、E90、E47、E91、E143、E124、E123、E99、E52)が検出された。くぼみを囲むような配置となっている。確認されたビットの中にはE51・E47・E143のように明らかに内傾しているものもみられ、放射状に柱を建てていたことが推測される。三つのビットの傾きは59°・59°・57°である。埋土は単層でややしまりのある灰黄褐色粘質土で、所々5mm程度の炭化物を含んでいる。

E143は6BD区に位置する平面形が円形の遺構で、直径は0.36m、検出面からの深さは0.34mでE145に切られている。ビットの最下層には、二つの基礎が据えられていた。

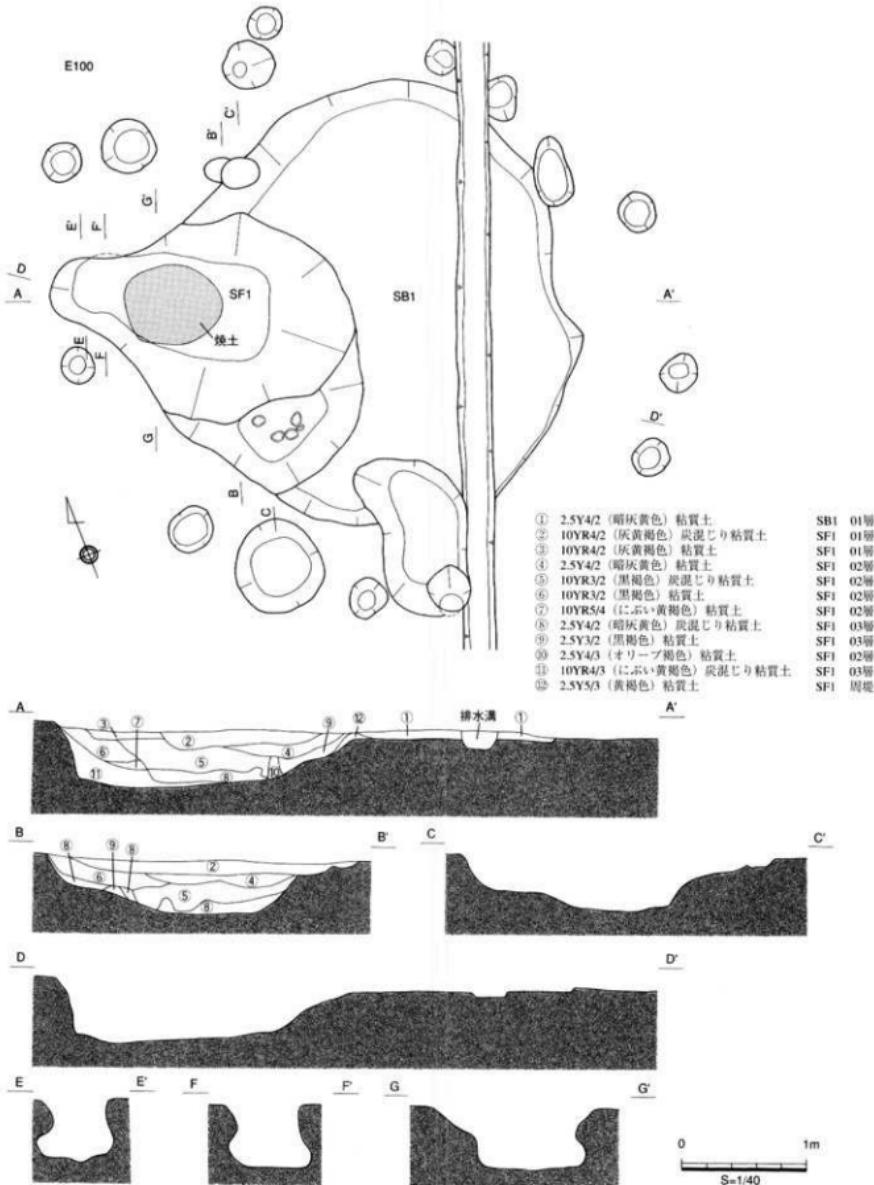
SF1との切り合い関係は、遺構検出時には、明瞭でなく、煙道部の主軸に沿って土層断面観察用ベルトを設定し、確認を行った。東西ベルトの断面の観察からSF1の東側に周堤のような構造が見られ、このことからSF1がSB1を利用して作られていたと考えられる。

遺物

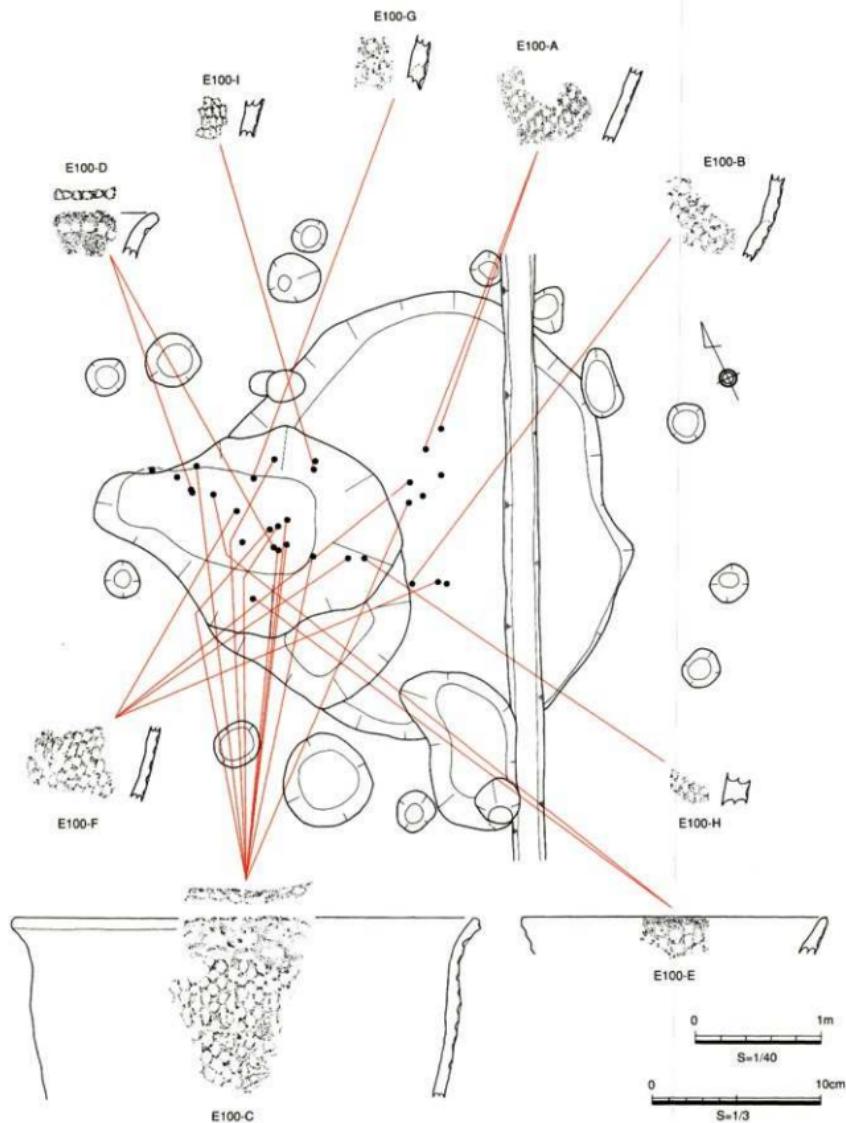
1はE100-Aで、長方形が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。施文原体は2単位・長さ1.7cm、4条・幅2.3cmが一つのサイクルとなり、縦方向に施文を行っている。



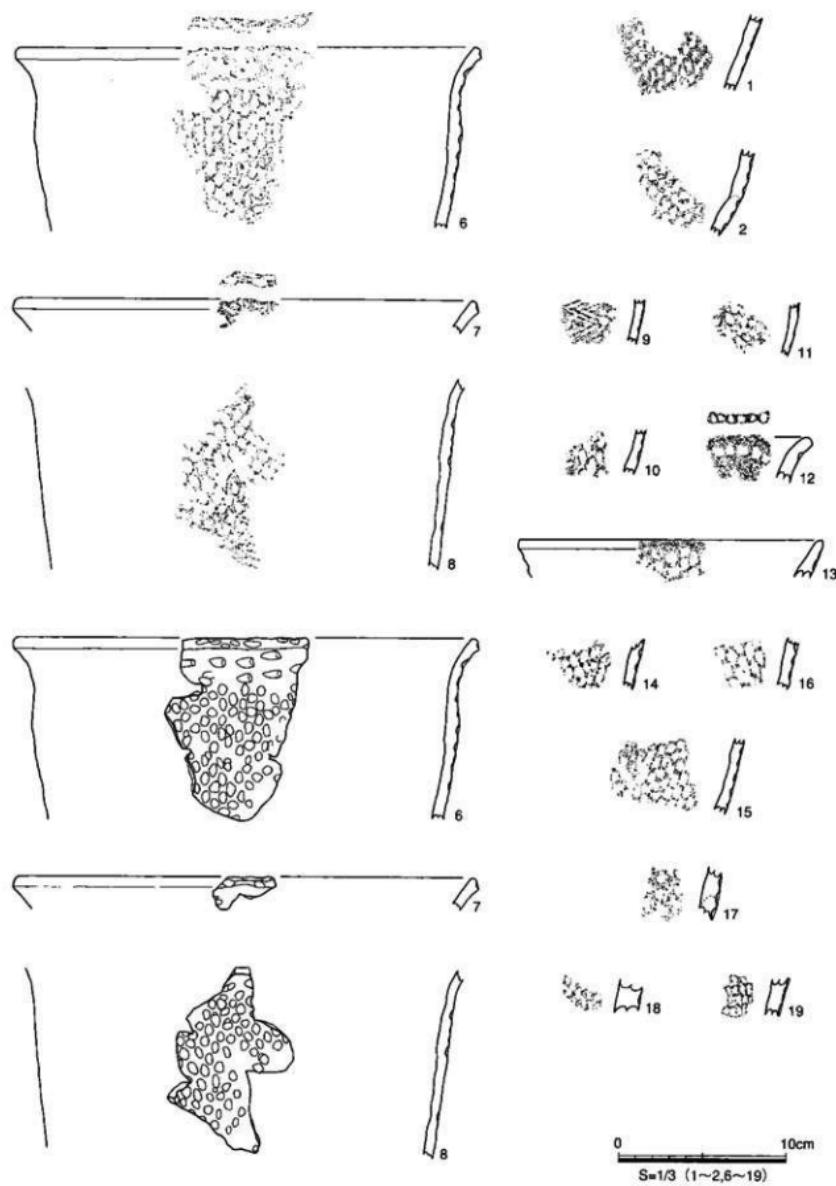
第17図 E100-SB1 柱穴実測図 (L=94.100)



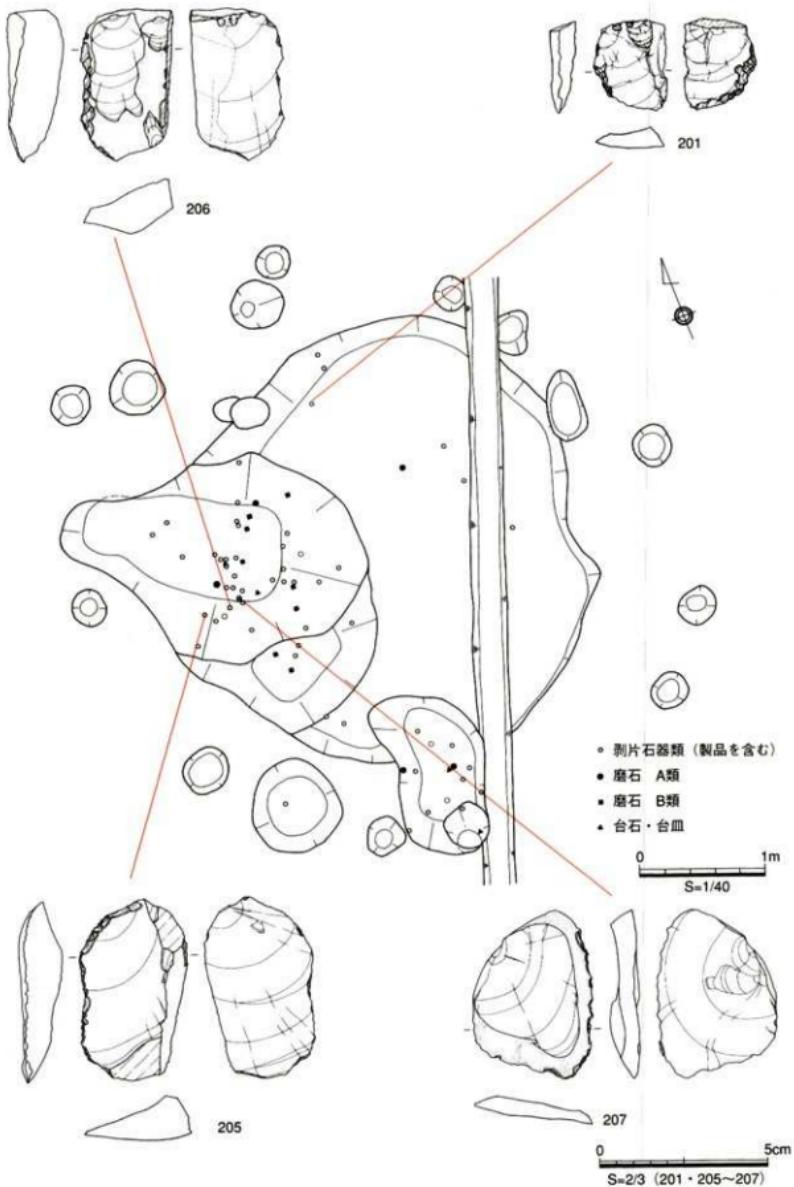
第18図 E100実測図 (L=94.100)



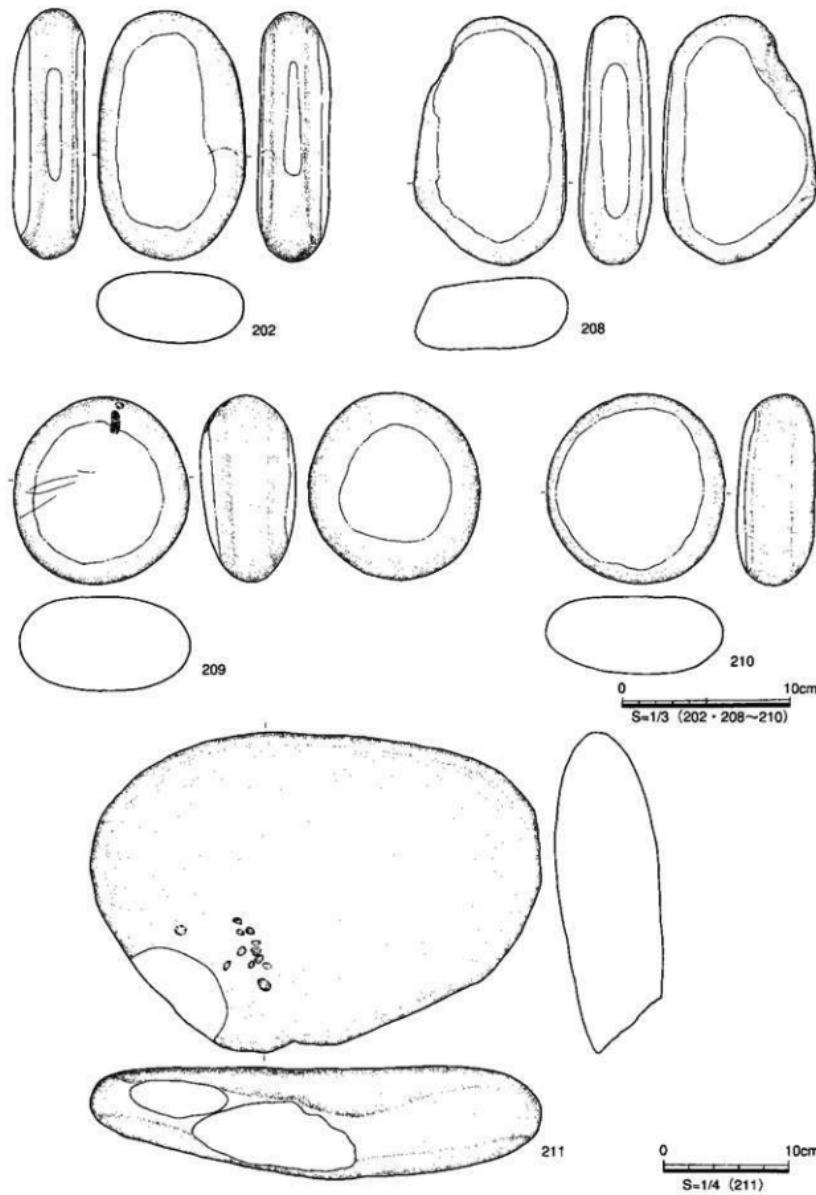
第19図 E100出土縄文土器分布図



第20図 E100出土縄文土器実測図



第21図 E100出土石器分布図・E100出土石器実測図（1）



第22図 E100出土石器実測図 (2)

2はE100-Bで、格円文が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。施文原体は2単位・長さ1.7cm、4条・幅2.4cmが一つのサイクルとなり、施文を行っている。そのほか縄文土器ではあるが、施文が不明瞭な土器の小片が7点出土した。分類不能のため図示は省略した。

石器では、剥片石器類が9点、礫石器類が1点出土した。また、搬入磧は8点あった。剥片石器は全てフレイクまたはチップで、製品はみられなかった。ただし、1点のみ2次加工を加えられたものがみられた。201はRFである。石材はチャートである。筋理面を打面としてやや綾長の剥片を作り出している。この剥片の左側縁から端部にかけて背面より剥離を連続的に行っている。202は磨石のA類である。石材は濃飛流紋岩で左右両面を磨っている。

時期

遺物は少ないものの出土遺物から縄文時代早期前半と考えられる。

第2号住居跡 (E120-SB2) (図23・24、図版6・8)

遺構

E区の5BB、5BC区に位置する。南側は幅1m弱の突出部がみられるが、南端で削平を受けている。突出部を除く形状は隅丸方形である。一边の長さは約3.4mで第1号住居跡と同様、壁面の立ち上がりは緩く、皿状にくぼみ底面は平坦である。検出面からの深さは0.15mで、埋土は灰黄褐色粘質土からにぶい黄褐色粘質土である。突出部が入り口と考えられ、突出部からやや硬化した面が帯状に伸びている。これを主軸方向とするとN-1.5°-Eとなっている。柱穴の可能性のあるビットは6基確認したが、そのうちE117とE119は、住居跡の中心付近に向かって傾いている。E117の場合主軸方向はN-10°-Eで、ビットの傾きは66°である。E119の場合N-30°-Wで、ビットの傾きは70°である。この二つのビットの埋土は単層でいすれもにぶい黄褐色粘質土である。

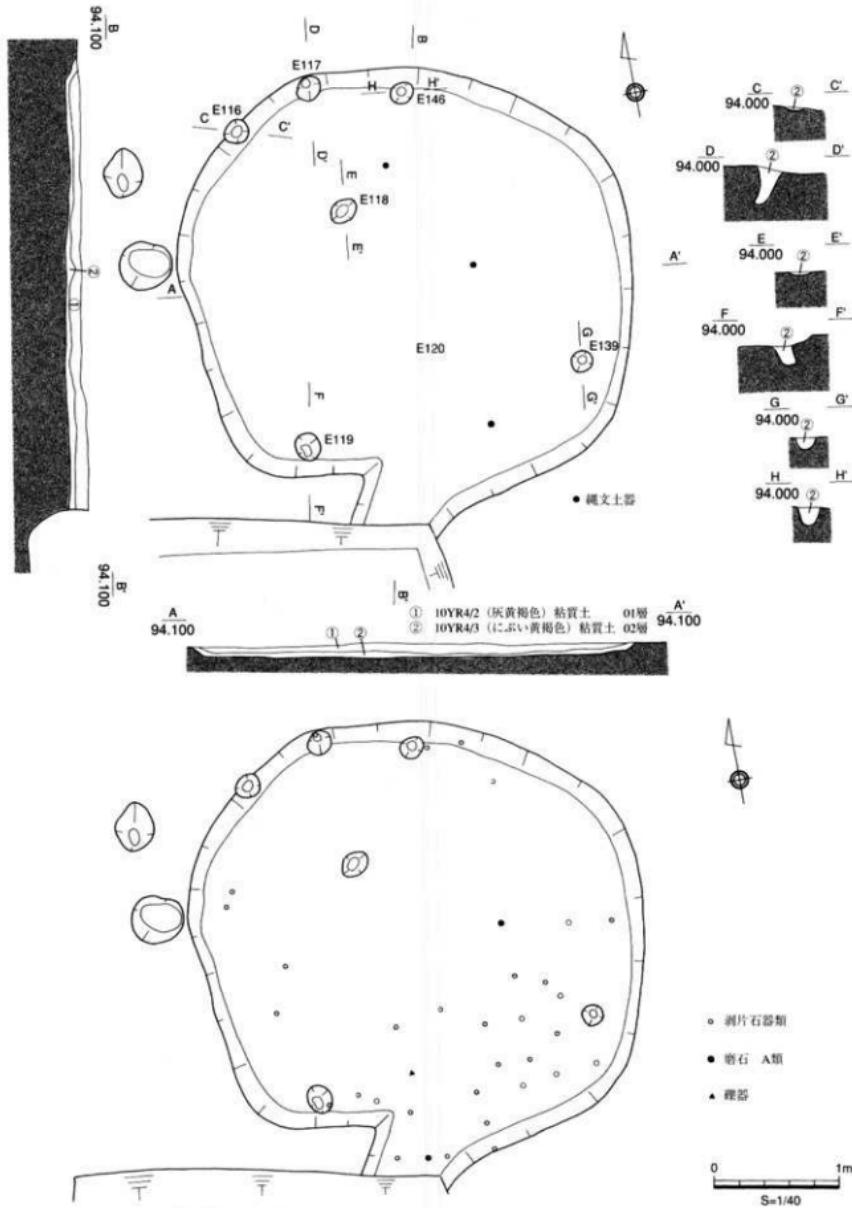
遺物

3はE120-Aで縦方向に格円文が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。土器の表面が剥離しており施文の詳細は不明である。4はE120-Bで長方形が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。施文原体は2単位・長さ2.0cm、3条以上・幅1.7cm以上が一つのサイクルとなり、縦方向に施文を行っている。5はE120-Cで山形文が凹む形で横方向に回転施文された押型文土器である。土器の表面が剥離しており施文の詳細は不明である。胎土および施文方法の違いから3個体の深鉢が確認された。

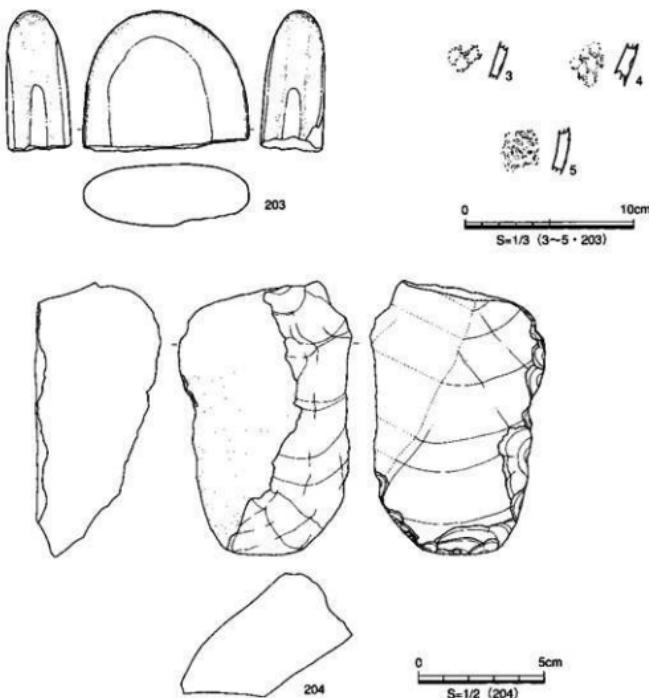
剥片石器類は32点、礫石器類が3点出土した。剥片石器は全てフレイクまたはチップである。203は磨石のA類である。石材は安山岩で、両面を磨っている。石は中央付近で欠損している。204は礫器で、石材は砂岩である。自然面を打面として作られている。右側の側縁に合わせて左側縁の調整し、下方向には粗製の刃部を形成している。

時期

遺物は少ないものの出土遺物から縄文時代早期前半と考えられる。



第23図 E120実測図・E120出土縄文土器分布図・E120出土石器分布図



第24図 E120出土遺物実測図

(2) 煙道付炉穴

E区で6基の煙道付炉穴が確認された。1基は竪穴住居跡と切り合って、4基は1つの土坑を基に重なり合って、もう1基は単独で検出された。

第1号煙道付炉穴 (E100-SF1) (図版5・6・11)

遺構

E区の5BD区に位置する。SF1の掘り込みを利用して造られたものと考えられる。煙道部は崩落した形で確認された。現存長は2.48m、検出面での最大幅は1.70m、検出面からの深さは0.44mで、長軸方向はN-63.5°-Wである。平面形はらっきょう形をしており、南側がやや膨らんだ非対称な形となっている。煙道部付近はオーバーハング状となっている。燃効率を高めるための構造と考えられる。煙道部の天井は崩落している。焚き口と考えられる部分の南側に平坦面が作られている。焚き口南側の平坦面は検出面から0.27mである。この面は調理作業をする際にものを一時置く施設として使われていたと考えられる。煙道部は西側に伸びているが崩落している。底面は船底状である。焚き口付近から煙道部方向にかけて床面や壁面は被熱の影響で赤色しやや硬化している。また焚き口付近は5~

10mm程の炭化物やにぶい黄褐色粘質土が確認された。また東西方向の土層断面の観察から、この煙道付炉穴を構築する際の土を利用し、竪穴住居跡との切り合った部分に盛土状の堆積が確認できた。これは周堤と考えられ、煙道付炉穴を囲うように積み上げられている。

遺物

6～11はE100-Cである。6は口縁部が外反し、胴部に楕円文と山形文が凹む形で回転施文される押型文土器である。口唇部には胴部と同じ棒状工具で回転施文されている。口縁部から頸部にかけて2条の刺突が左方向から行なわれている。その後、縱方向に2単位・長さ2.0cm、5条・幅2.6cmを一つのサイクルとする施文を行っている。9は胴部下方に山形文の施文がみられる。

12・13は口縁部である。12はE100-Dで口唇部に棒状工具で長方形が凹む形で施文されるよう回転施文されている。また口縁部外面には一列の刺突列が施文されている。13はE100-Eで口縁部から長方形が凹む形で回転施文されている押型文土器である。一つのサイクルは小片のため確認できないものの、2単位以上・長さ1.8cm以上、3条以上・幅2.5cm以上が縱方向に施文される。14～16はE100-Fである。胴部に長方形が凹む形で回転施文される押型文土器である。14は4単位・長さ2.6cm、5条・幅2.3cmを一つのサイクルとして、縱方向に施文を行っている。15は重複施文となっている。16は14と同様長方形が凹む形で施文されている。17はE100-Gで楕円文が凹む形で回転施文された押型文土器である。6の土器に比べ器壁がやや厚い。18はE100-Hで、非常に小粒の楕円文が凹む形で回転施文された押型文土器である。器壁は17よりさらに厚い。縱方向に施文されている。凹みが浅く重複施文されているため一サイクルの詳細は不明である。19はE100-Iで唯一格子目状に施文された押型文土器である。胎土も他の繩文土器と異なり明赤褐色土である。

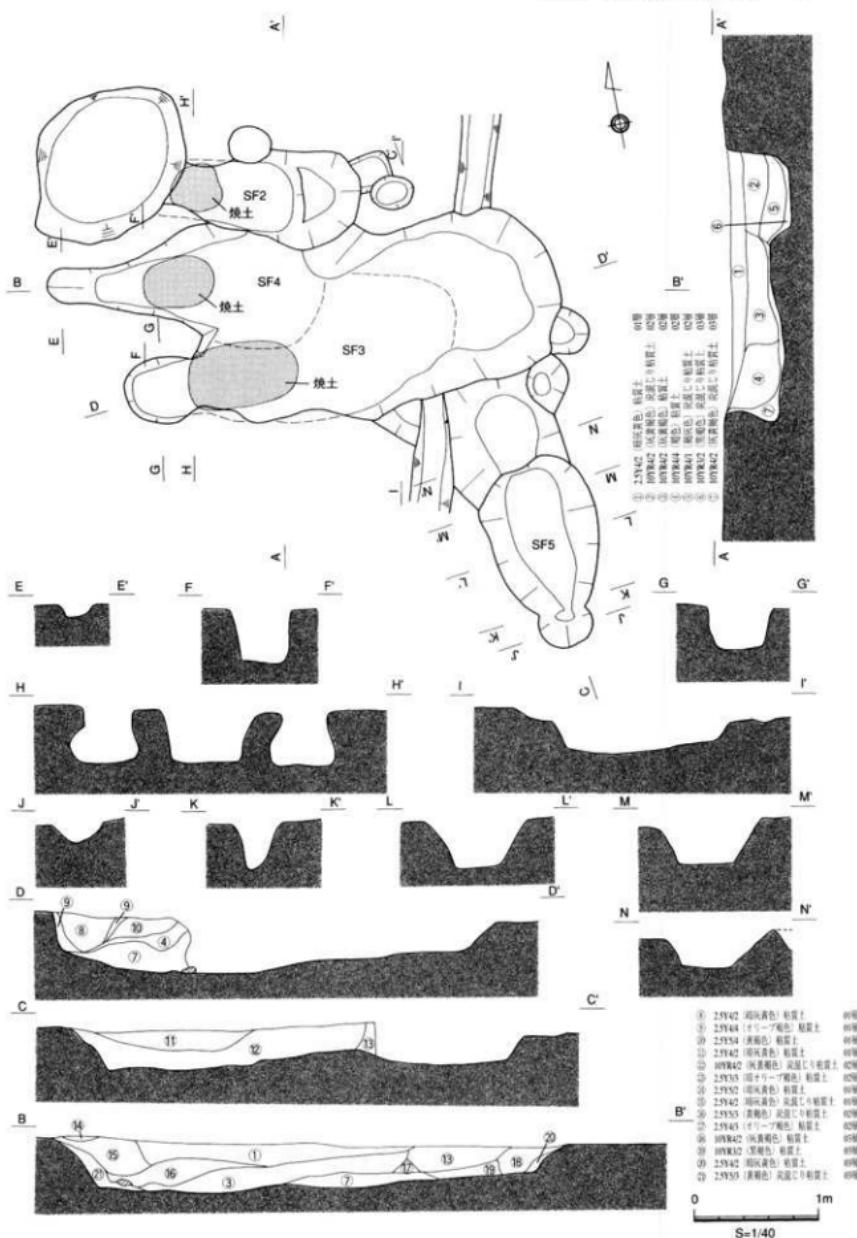
剥片石器類は41点、礫石器類は12点出土した。搬入礫は20点であった。剥片石器の大半はフレイクまたはチップで、すべて石材はチャートである。205はサイドスクリーバーである。節理面を打面として縱長の剥片を作り出している。左側縁を腹面から連続的に行なっている。206はRFである。自然面を打面として縱長の剥片を作り出している。この剥片の左側縁を腹面から連続的に行なっている。207はUFである。自然面を打面として剥片を作り出している。この剥片の右側縁に微細な剥離痕が不規則に観察される。208～211は磨石である。208と209はA類で、石材は濃飛流紋岩である。これらの磨石は片面が磨られている。209には、敲打によると思われる小さな凹みが観察される。210と211はB類である。石材は安山岩である。これらの石は両面が磨られている。

時期

出土遺物および炭化物の分析結果により繩文時代早期前半と考えられる。

第2号～第5号煙道付炉穴（E101-SF2～SF5）（図25～32、図版6・11～13）

第1号住居跡の北側、E区の4BC、4BD、5BC、5BD区に位置する。4つの煙道付炉穴が切り合っている。第2号～第4号煙道付炉穴は煙道部が西側を向き、第5号煙道付炉穴のみ煙道部は南側を向いている。検出時には、これらの遺構は不定型なアーマー状をしており、切り合い関係の判断は困難で土層観察用ベルトを設定しながら、面的に掘り下げ調査を行った。これらの遺構は土坑状の窪地を利用して構築されたと考えられる。土層観察用のベルトの観察から各煙道付炉穴のプランを推定し、各遺構ごとに簡単に記述する。



第25図 E101実測図 (L=94.000)

第2号煙道付炉穴（E101-SF2）（図25～32、図版6・11～13）

煙道付炉穴群の中で、4BD区に位置する。3基の西側に煙道部を持つもののうち、北側のものである。土層観察用ベルトの観察から第4号煙道付炉穴に切られていると判断した。煙道部の先端は搅乱により破壊されているが、焚き口、足場とともに確認できる。また足場と焚き口の比較差は0.10mである。焚き口付近は後世の窯窓の小規模なものを想起させる形状である。煙道付炉穴の長軸方向はN-75°-Wで、残存長は1.62m、残存する最大幅は0.78m、検出面からの深さは0.45mである。炉穴の焚き口および煙道部はオーバーハングして作られている。焚き口付近には5～10mm角の炭化物が多く確認できた。また、焚き口付近は底面に近づくほど粘性が強くなり、底面および壁面では被熱の影響で土が赤色硬化している。

第3号煙道付炉穴（E101-SF3）（図25～32、図版6・11～13）

煙道付炉穴群の中で、4BD～5BD区に位置する。3基の西側に煙道部を持つもののうち南側のものである。土層観察用ベルトの観察から第4号煙道付炉穴に切られていると判断した。煙道部の先端は船底のように立ち上がる。煙道部の天井は崩落しており、煙道部の埋土に被熱により赤色硬化した土が混ざっている。この煙道付炉穴の長軸方向はN-85°-Wで、残存長は2.69m、最大幅は推定で1.50m、検出面からの深さは0.44mで、他の煙道付炉穴と同様、焚き口付近はオーバーハング状である。焚き口付近は5～10mm角の炭化物が確認できた。

第4号煙道付炉穴（E101-SF4）（図25～32、図版6・11～13）

煙道付炉穴群の中で、4BD区に位置する。3基の西側に煙道部を持つもののうち中央のものである。土層観察用ベルトの観察から第2号煙道付炉穴と第3号煙道付炉穴を切っていると判断した。煙道部は天井が崩落しており、底面は船底状となり、煙出し付近でやや急に立ち上がっている。残存長は2.20mでその最大幅は0.94mである。煙道部の壁面はオーバーハングしている。検出面からの深さは0.38mである。この煙道付炉穴の長軸方向はN-70°-Wである。焚き口付近は被熱のため、赤色化し、やや硬化した土となっている。また、底面には炭化物と灰によると思われる粘性の強い土が最下層にみられる。

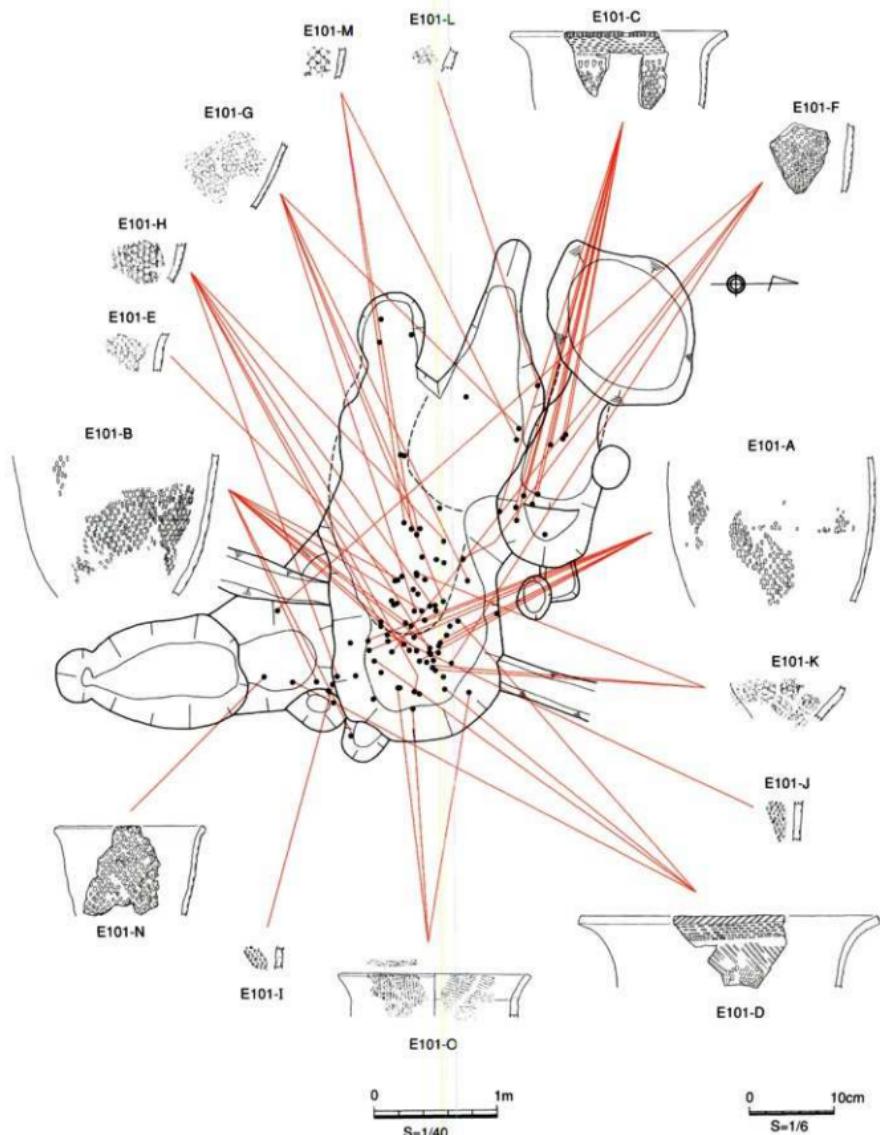
第5号煙道付炉穴（E101-SF5）（図25～32、図版6・11～13）

煙道付炉穴群の中で、5BC～5BD区に位置する。煙道部は南側に伸びており、その天井は崩落している。この煙道付炉穴の長軸方向はN-5°-Wで残存長は2.26m、その最大幅は0.90mで、検出面からの深さは0.28mである。焚き口部の手前に足場があり、焚き口との比較差は0.09mである。第2号～第4号煙道付炉穴と比べ、炭化物の小片は少なく、煙道部から焚き口部にかけての被熱による土の赤色化は確認できなかった。

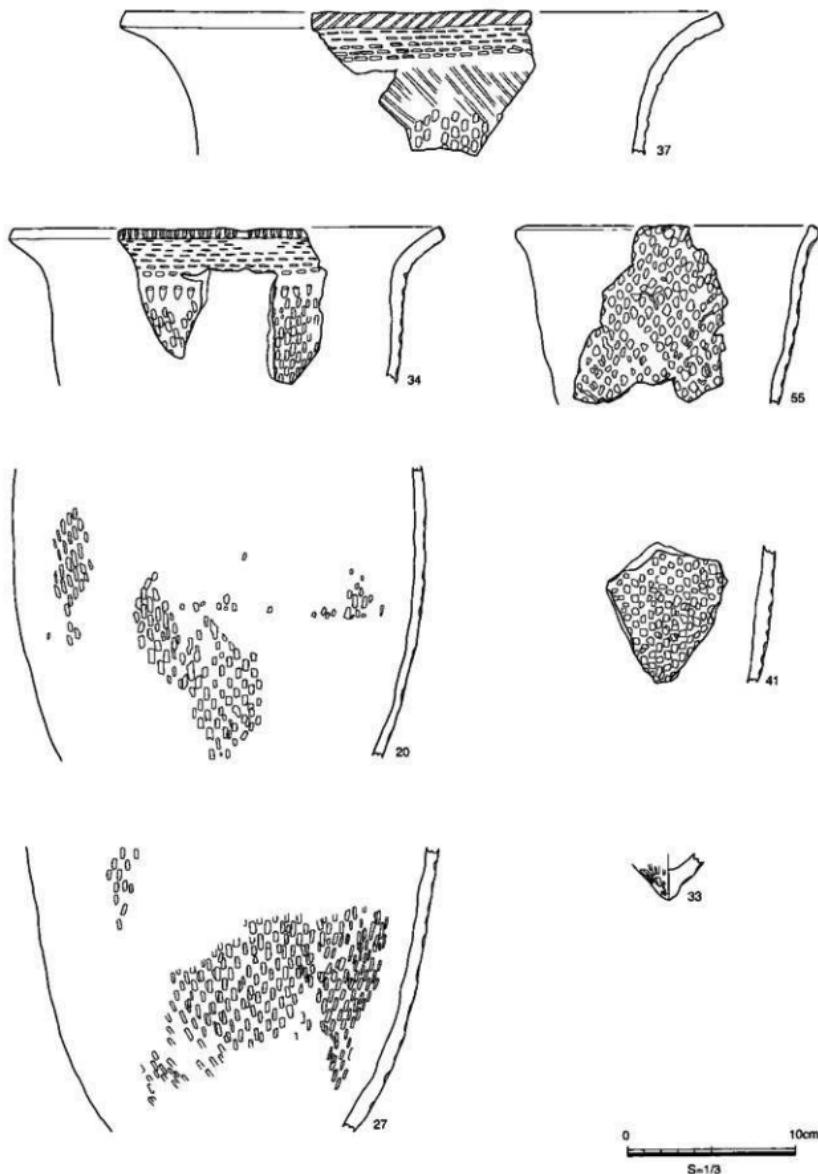
遺物

煙道付炉穴群の遺物は遺物の取り上げ時に同じ遺構番号で取り上げたことや切り合い関係が複雑なことから一括して報告する。この煙道付炉穴群からは14個体分の遺物が出土した。20～26はE101-A

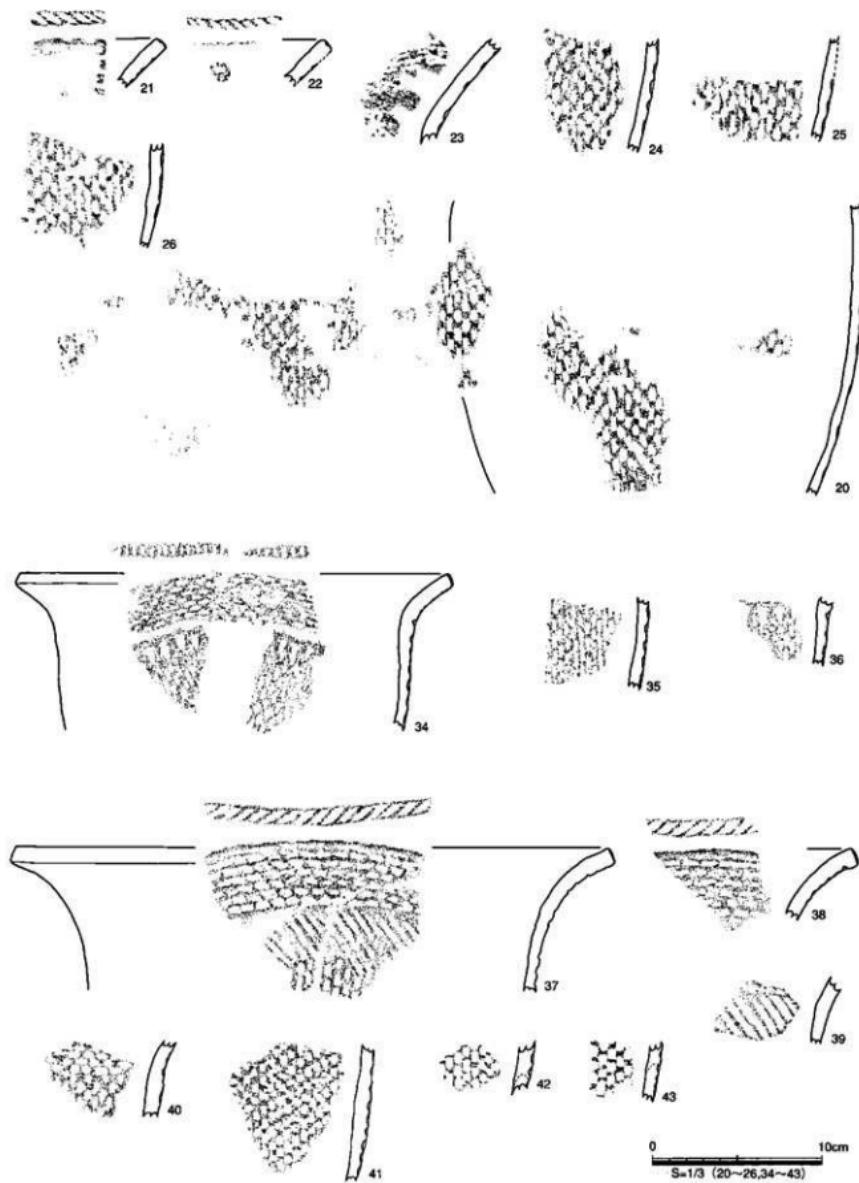
である。口縁部が外反し、頸部に刺突文様、胴部に長方形が凹む形で回転施文される押型文土器である。外面が剥離しているところが多くみられる。21・22は口縁部である。口唇部に斜め方向に刻んだ棒状工具で回転施文されている。23は頸部で棒状工具により左方向から刺突が3列の刺突が施されている。24~26は胴部である。完全に剥離はしていないものの断面に隙間がみられる。内面には指頭圧痕がみられる。27~33は、E101-Bである。胴部上方に長方形が凹む形で市松状に回転施文され、下方になだらかな山形文が凹む形で回転施文される押型文土器である。33は唯一今回の調査で確認された押型文土器の尖底部である。粘土塊を乳頭状に貼り付け施文されている。34~36はE101-Cである。口縁部が外反し、頸部に下方から刺突を施し、胴部に長方形が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。頸部の刺突は4~6mmの間隔を空け、棒状工具により刺突が行われている。口唇部には棒状工具を押しつけ引くように5mm程の間隔を空け、刻み目文様を施している。口縁端部から頸部にかけても胴部と同じ施文工具を用いている。口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施文している。この施文は2単位・長さ2cm、5条・幅1.8cmが一つのサイクルとなっている。第2号煙道付炉穴から集中して出土している。37~39はE101-Dである。口縁部が外反し、頸部に斜め方向の施文、胴部に楕円文が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。口唇部には頸部に用いた棒状工具を回転させ文様を施している。斜めの斜線は4本が単位となっている。口縁端部から頸部にかけては長方形が凹む形で縦方向に回転させ施文している。6単位以上・長さ3.2cm以上、4条・幅4cmが一つのサイクルとなっている。下方向から上方に向に施文を施し、口縁端部には、単位ごとの膨らみが確認できる。また、頸部より下は別の種類の棒状工具を使って楕円文が凹む形で縦方向に回転施文されている。単位は3以上・長さ2.4cm以上、5条・幅2.8cmが一つのサイクルとなっている。40はE101-Eである。口縁部が外反し、胴部に楕円文が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。頸部を境に上方は横方向に回転させ施文している。3単位・長さ2.3cm、4条以上・幅1.8cm以上が一つのサイクルとなっている。頸部の下方は縦方向に回転させ施文しているが、サイクルは不明である。41~43はE101-Fである。長方形が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。この施文は3単位・長さ2.7cm、5条・幅2.7cmが一つのサイクルとなっている。44~47はE101-Gである。胴部に楕円文が凹む形で縦方向に市松状に回転施文される押型文土器である。48と49はE101-Hである。楕円文が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。これらの施文は3単位・長さ2.3cm、5条・幅3.6cmを一つのサイクルとして縦方向に回転させ施文している。50はE101-Iである。長方形が凹む形で縦方向に市松状に回転施文される押型文土器である。長方形の刃が5mmと2mm程で非常に細かな施文となっている。小片のためサイクルは不明である。51はE101-Jである。長方形が凹む形で縦方向に市松状に回転施文される押型文土器である。50に比べて施文の密度がやや疎である。小片のためサイクルは不明である。52はE101-Kである。胴部に楕円文と山形文が凹む形で回転施文される押型文土器である。楕円文を縦方向に施文した後、山形文を横方向に施文している。サイクルは不明である。53はE101-Lである。楕円文が凹む形で回転施文される押型文土器である。小片のためサイクルは不明である。54はE101-Mである。楕円文が凹む形で縦方向に回転施文される押型文土器である。小片のためサイクルは不明である。55はE101-Nである。口縁部がわずかに外反し、楕円文が膨らむ形で縦方向に回転施文される押型文土器である。口唇部には楕円文が凹む形で施文される棒状工具を用いて回転させている。この施文は2単位・長さ2.0cm、6条・幅2.2cmが一つのサイクル



第26図 E101出土縄文土器分布図



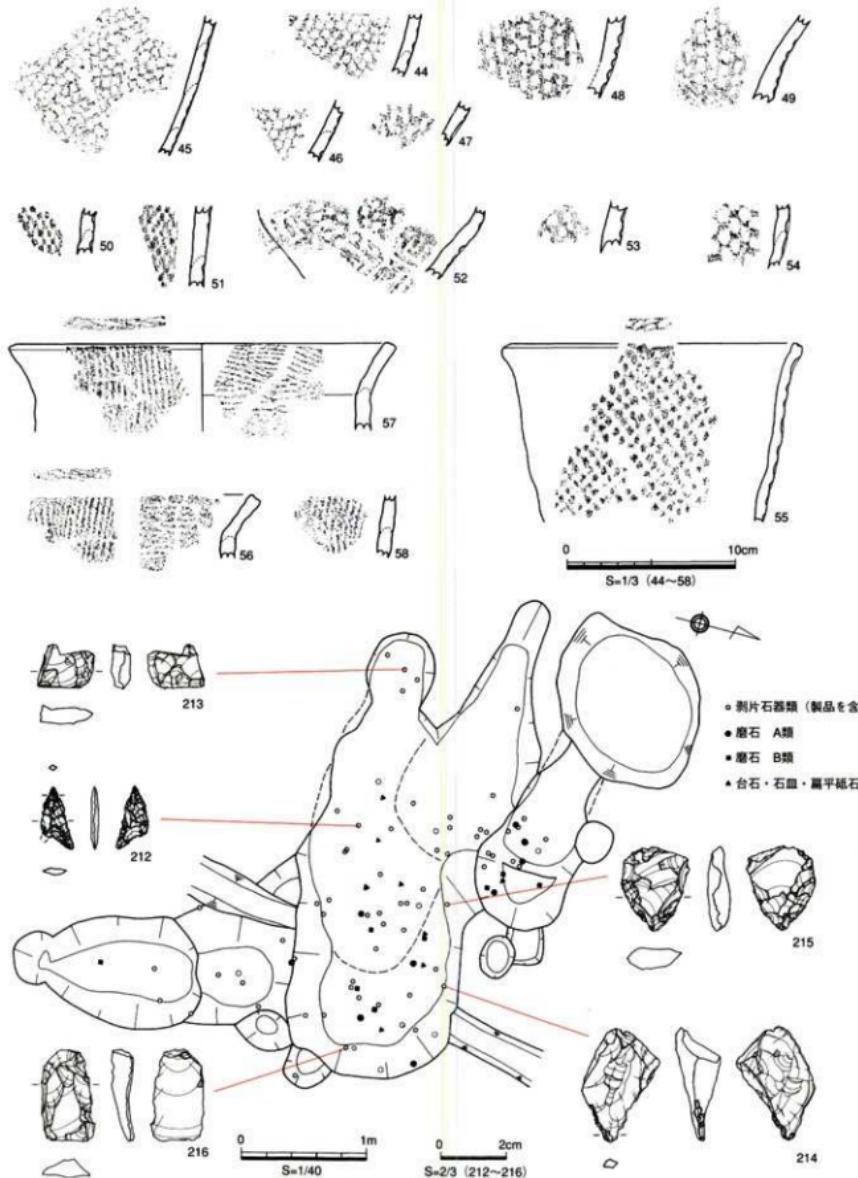
第27図 E101出土縄文土器実測図(1)



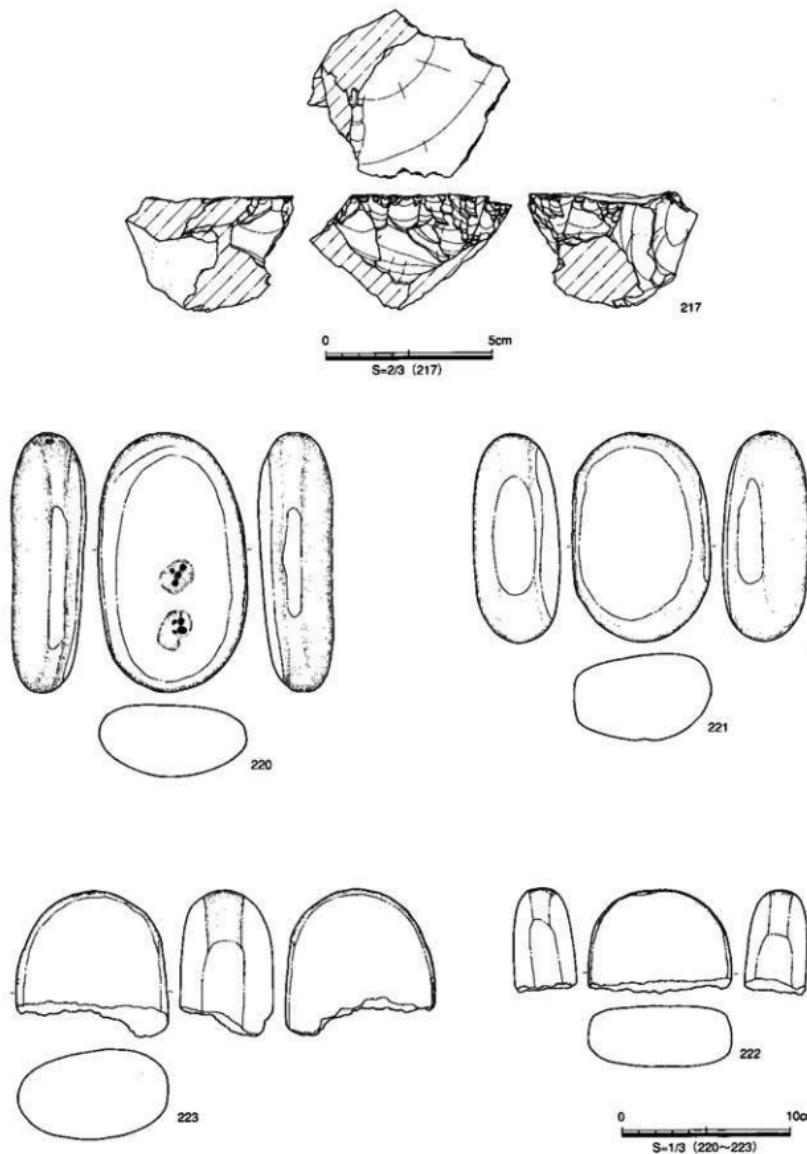
第28図 E101出土縄文土器実測図 (2)



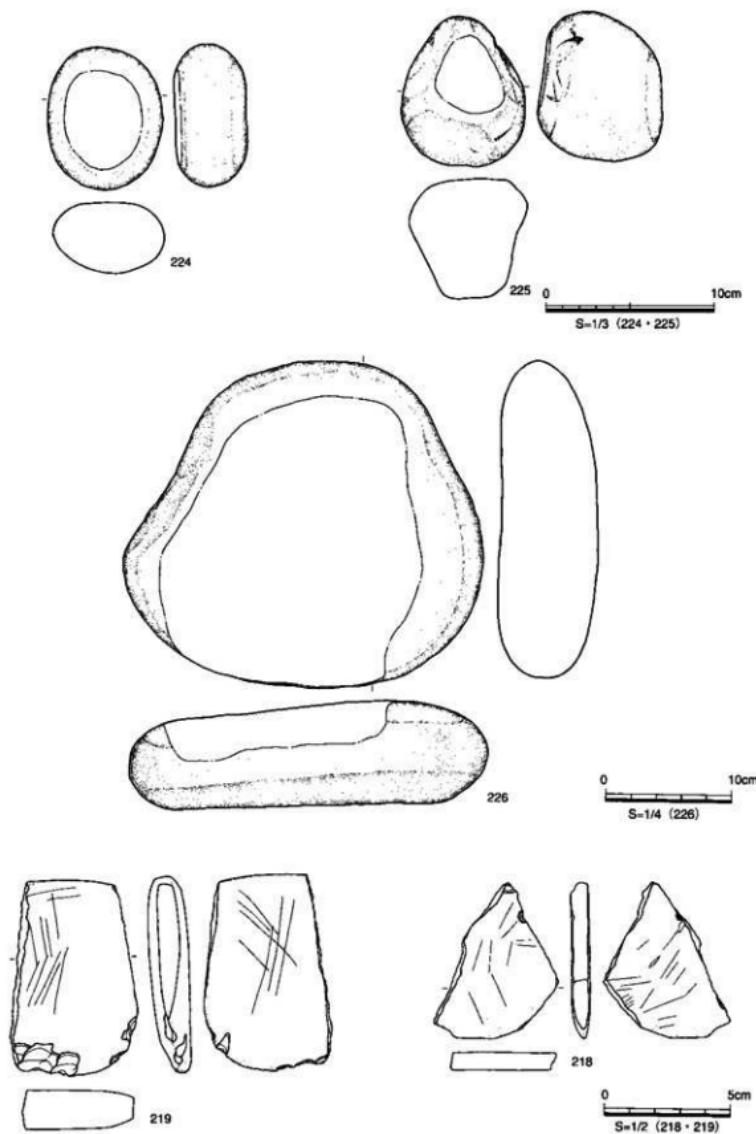
第29図 E101出土縄文土器実測図 (3)



第30図 E101出土縄文土器実測図(4)、E101出土石器分布図・E101出土石器実測図(1)



第31図 E101出土石器実測図（2）



第32図 E101出土石器実測図（3）

ルとなって縦方向に行われている。56~58はE101-Oである。口縁部がやや外反する表裏繩文土器である。外面は縦方向に繩文を施文している(LR)。これに対して内面は横方向に繩文を施文している。また、胸部の58は外面のみの施文である。

剥片石器類76点、疊石器類25点、搬入疊41点が出土した。剥片石器は製品は少なく大半がフレイクまたはチップである。疊石器は扁平砥石が4点、磨石が17点、台石・石皿が4点出土した。212は石鑿である。石材は下呂石で、先端に作り出しを持つ。左側脚部が欠損している。213は楔形石器である。石材はチャートで上面および左縁に折損がみられる。下面に潰れ痕が顕著にみられる。214は石錐である。石材はチャートである。剥離面を打面として縦長の剥片を作り出している。左側縁に腹面から剥離を連続的に行っていている。刃部は欠損している。215はサイドスクレイパーである。石材はチャートである。節理面を打面としてやや縦長の剥片を作り出している。左側縁から端部にかけておよび右側縁から端部にかけて背面と腹面の両面から連続的に剥離を行っている搔器である。なお、調整の方法を観察すると石錐の可能性もある。216はサイドスクレイパーである。石材はチャートである。剥離面を打面として縦長の剥片を作り出している。左側縁および右側縁に腹面から剥離を連続的に行ってている削器である。その左右側縁には使用痕と思われる微細な剥離が観察される。217は石核である。石材はチャートである。分割疊または、原疊を素材として、打面調整を行わず、平坦面を打面としている。218と219は扁平砥石である。厚さはそれぞれ0.7cmと1.5cmで平板状になっている。石材はともに砂岩である。平坦面は両面に擦痕がみられる。218は端部は一部しか残っておらず、破損しているが、端部は刃状になっている。平坦面は両面とも非常に平滑である。219は3面が端部の形状を留めている。218に比べて端部は鈍い刃状になっている。これらの遺物は枕の湖遺跡出土のものと類似している。220~225は磨石である。石材は220が砂岩、221・222・224が安山岩、223が濃飛流紋岩である。220~223はA類である。223を除いて擦面を2面持っている。221には一部敲打痕が確認される。222と223は石の中央付近で欠損している。224と225はB類で1面のみ擦面がみられる。225は側面に使用時の指の擦れによる平滑面がみられる。226は台石である。石材は濃飛流紋岩で、厚さが8.2cmの平板状である。上面からその手前にかけて非常に平滑な面が確認できる。敲打痕はみられない。

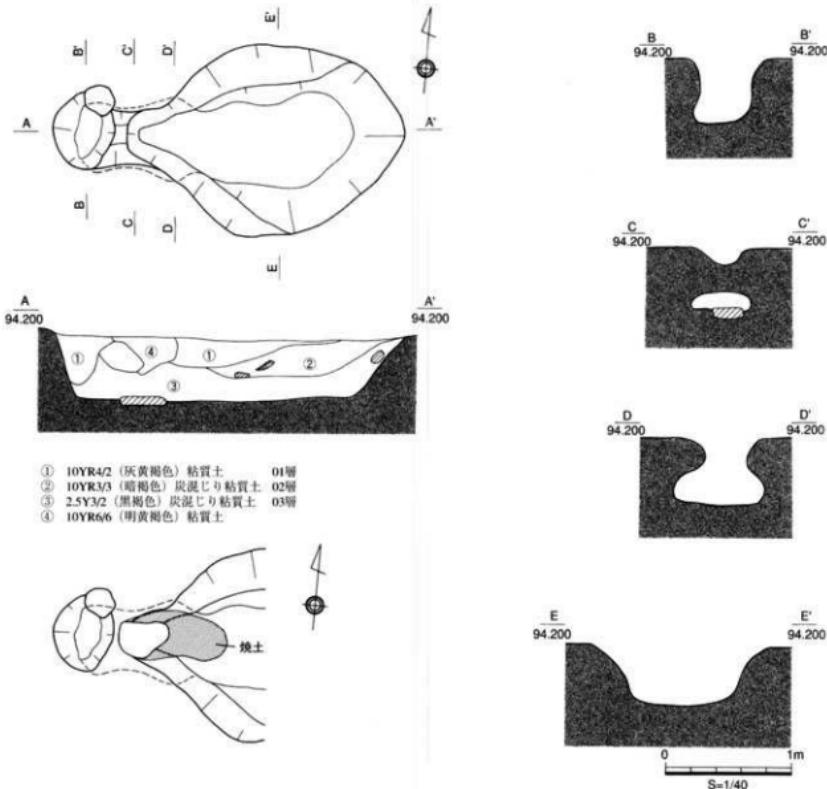
時期

これらの遺構は、切り合い関係はあるものの出土遺物および炭化物の分析結果より繩文時代早期前半と考えられる。

第6号煙道付炉穴(E102-SF6)(図33~36、図版7・8・13)

遺構

煙道付炉穴群の西側、4BE区に位置する。単独で構築された炉穴である。全長は2.81m、最大幅1.50m、検出面からの深さは0.48mで、長軸方向はN-86°-Eである。埋土は3層に分層でき、下層ほどしまりがある。上層は灰黄褐色粘質土でやや粘性がある砂質土である。中層は暗褐色粘質土で、繩文土器や磨石などを包含する。また、5mm程の炭化物を含んでいる。また、ほぼ同レベルで搬入疊を面的に確認することができ、集石とは言えないものの、意図的に石が置かれている可能性がある。最下層は黒褐色粘質土で中層よりもしまり、炭化物の含まれる割合も増加する。この煙道付炉穴

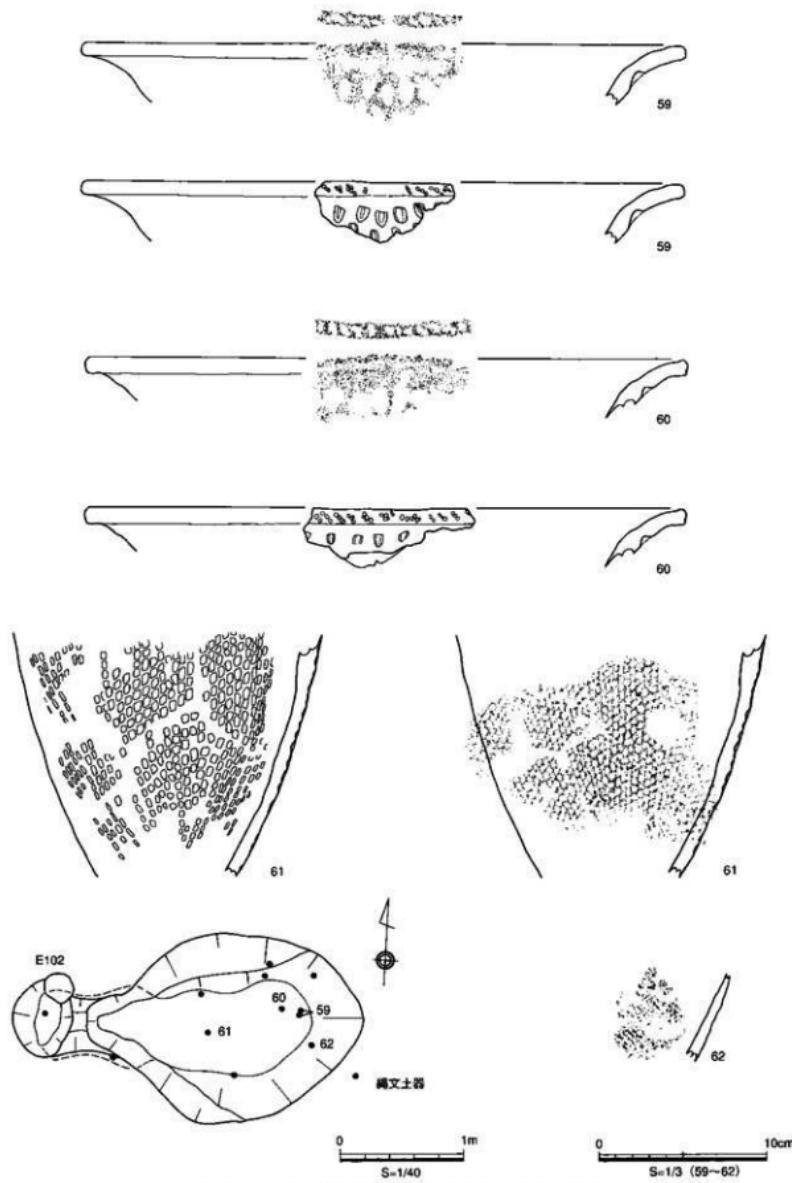


第33図 E102実測図

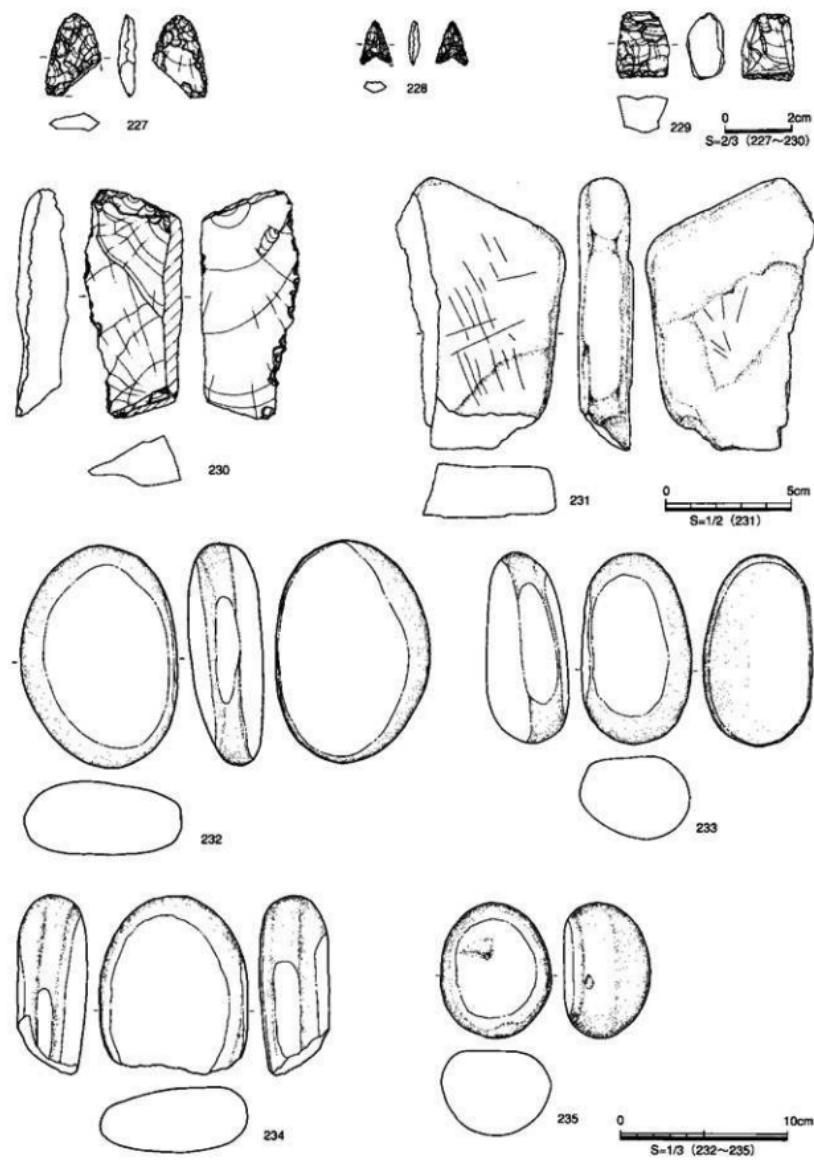
は煙道部の遺存が良好で天井部が残り、機能していた状況を留めている。焚き口のやや奥に扁平の川原石を14cm程埋め、上面を水平に置いて使われている。石の上面は被熱の影響で一部剥離がみられる。また、川原石周辺は被熱の影響で土が赤色硬化している。焚き口と足場の区別は確認できず、煙道部から焚き口東側にかけてはオーバーハングしている。焚き口の東側からは、5~10mmの炭化物が多く出土した。また、埋土の下層から面的に磨石や搬入跡が確認された。

遺物

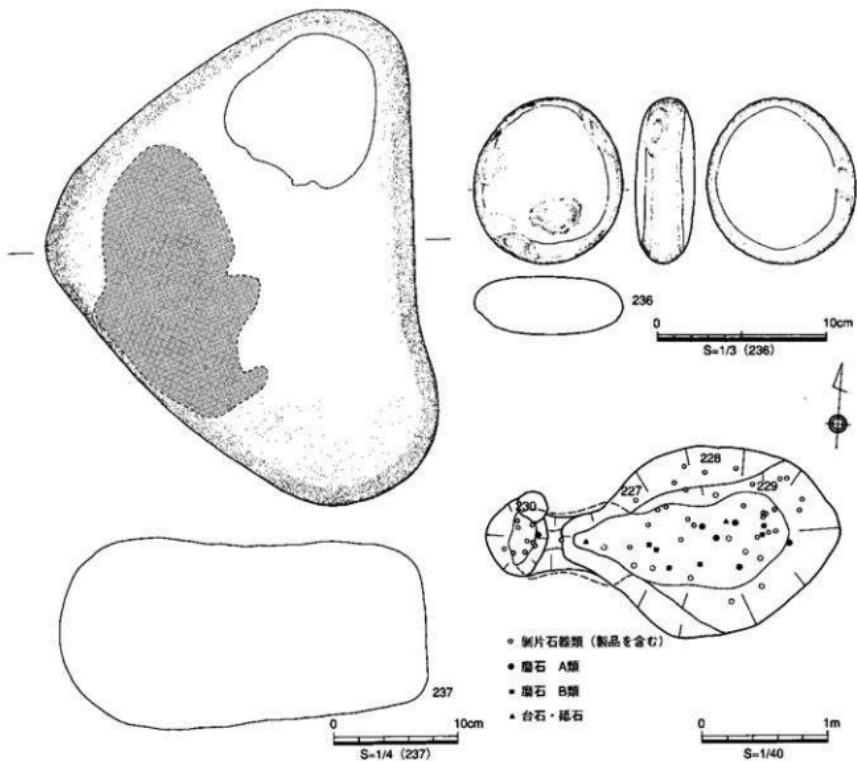
59~61はE102-Aである。口縁部が外反し、頸部に刺突施文を行い、胴部に梢円文が凹む形で市松状に回転施文される押型文土器である。59と60は口縁部で口唇部に繩文を施文している(LR)。今回の調査で出土した繩文土器の中で最も口縁部の外反が大きい。頸部には下方向から2列の刺突が5~8mmの間隔を空けて棒状工具で施されている。61の胴部の施文は3単位・長さ2.3cm・4条・幅2.3cmを一つのサイクルとして縱方向に行っている。62はE102-Bである。外面の施文の判別が困難



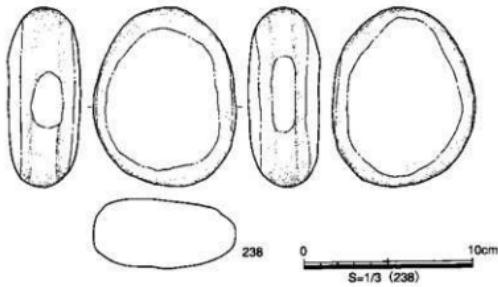
第34図 E102出土縄文土器実測図、E102出土縄文土器分布図



第35図 E102出土石器実測図(1)



第36図 E102出土石器分布図・E102出土石器実測図 (2)



第37図 E112出土石器実測図

であるが燃え文の可能性のある遺物である。

剥片石器類50点、礫石器類14点、搬入礫14点が出土した。剥片石器は製品は少なく大半がフレイクまたはチップである。礫石器は扁平砥石が1点、磨石が12点出土した。227と228は石鎌である。石材はともにチャートである。227は先端部が丸いカーブを描き、基部が直線的となる石鎌で右側の228は鋭角な尖頭部を持ち、基部は長さの割に深い抉りを持つ。229は楔形石器である。石材はチャートで、左側縁および右側縁に折損がみられる。上面および下面に潰れ痕がみられる。230はサイドスクレーパーである。石材はチャートで節理面を打面として綾長の剥片を作り出している。左側縁を背面から押圧剥離を行い、刃部を形成している削器である。231は扁平砥石である。厚さは2.2cmで平板状になっている。石材は砂岩である。平左侧縁および下側縁が折損している。平坦面は両面に擦痕がみられる。端部は面が作られ、218や219とは異なっている。232～236は磨石である。石材は232・235・236が安山岩、233・234が濃飛流紋岩である。232～234がA類で232と233は片面が、234は両面が擦られている。また、これらは平坦面も擦られた痕跡が残っている。235と236はB類である。236には敲打痕が周縁部に多く残っている。237は台石である。煙道付炉穴の焚口よりやや奥に置かれる。上面は被熱の影響で剥離がみられる。この台石は上面が平坦になるように設置され、石の大半は地面に埋められていた。

時期

出土遺物および炭化物の分析結果により縄文時代早期前半と考えられる。

(3) 土坑

第1号土坑 (E103-SK1) (図38)

遺構

第1号煙道付炉穴の南側、6BD区に位置する平面形が円形の遺構である。直径は約0.68m、検出面からの深さは0.06mである。埋土は灰黄褐色粘質土である。竪穴住居跡と同時期には存在し得ない位置にあり、新旧関係は不確かであるが、第1号煙道付炉穴との関係が推測される。

遺物

剥片石器類1点、搬入礫1点が出土した。剥片石器はフレイクである。図示は省略した。

時期

出土遺物から縄文時代早期前半と考えられる。

第2号土坑 (E112-SK2) (図37・38)

遺構

煙道付炉穴群の東、4BC区に位置する平面形が梢円形の遺構である。長軸は0.48m、短軸0.40m、検出面からの深さは0.16mである。壁面は擂鉢状となっており、最下層から磨石が出土している。

遺物

礫石器類1点が出土した。238は磨石のA類である。濃飛流紋岩で両面が擦られている。

時期

出土遺物から縄文時代早期前半と考えられる。

第3号土坑 (E144-SK3) (図38)

遺構

第6号煙道付炉穴の南東側、4BD・4BE・5BD・5BEの4つの地区にまたがる平面形がだるま形の遺構である。長軸1.89m、短軸0.79m、長軸方向はN-75°-Wである。検出面からの深さは0.14mで埋土は灰黄褐色の非常に浅い土坑である。壁面は擂鉢状になだらかに立ち上がっており、第6号煙道付炉穴の焚き口付近に構築されていることから、この煙道付炉穴との関連が考えられる。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

E102と同質の土が埋土であることから、縄文時代早期前半と考えられる。

第4号土坑 (E145-SK4) (図17、図版8)

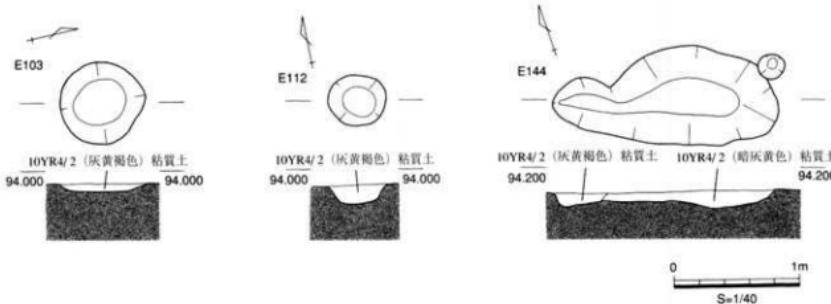
6BD区に位置する平面形が不定形の遺構である。長軸は約1.26m、短軸は0.80m、検出面からの深さは0.16mである。竪穴住居跡と切り合っており、この遺構が竪穴住居跡より新しい。また、この遺構の下層から平面形が円形のピット (E143) が確認された。検出面からの深さや色が第1号土坑に近いこと、煙道付炉穴の南東に位置することなどから第1号土坑と同様の性格の遺構である可能性が高い。

遺物

砾石器類が4点出土した。磨石A類が2点、台石・石皿が2点である。図示は省略した。

時期

出土遺物から縄文早期前半と考えられる。



第38図 E103・E112・E144実測図

第2節 弥生時代の遺構と遺物

本節では、E区に展開する弥生時代の遺構について記述する。II期の遺構は竪穴状遺構1基のみである。

第1号竪穴状遺構 (E142-ST1) (図39、図版8・18)

遺構

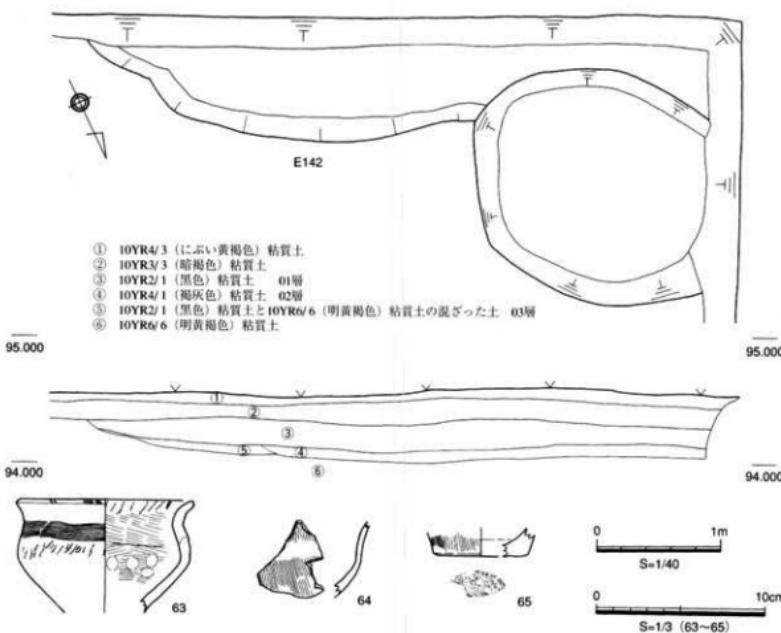
E区の南西端、5BF～5BG区に位置する。北側で搅乱土坑に切られている。平面形は調査区内では帯状であるが、東端に突出した形をしている。検出面からの深さは0.33mである。埋土は3層に分層でき上層から黒色粘質土、中層は褐灰色粘質土、最下層は黒色粘質土と明褐色粘質土の混ざった土である。いずれもそれほどしまりはない。壁面の立ち上がりは直立していないが、床面は平坦である。長軸方向はN-64.5°～Wで長軸4.98m、最大幅0.76mである。東に突出した付近の土層観察を行ったが土坑などの切り合いは確認できなかった。火を焚く施設など確認できなかったものの竪穴住居跡の可能性も考えられる。

遺物

弥生土器3点が出土した。63と64は鉢である。63は口縁部から底部付近まで残存している。口縁端部には櫛状工具による刻み目を施し、口縁内部に同じ工具で刺突列点を施している。また、頸部には同工具で横方向に8条の凹線を巡らし、その下方には口縁内部と同様の列点を施している。外面には煤の付着が激しく、煮炊具として使われていたことがうかがわれる。64は胴部のみ残存している。65は平底の甕である。底部には布目压痕が確認できる。

時期

出土した遺物から弥生時代後期に所属するものと考えられる。



第39図 E142実測図、E142出土遺物実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

本節では、B区とC区に展開するⅢ期の古墳時代の遺構について記述する。この時期の遺構は堅穴住居跡2軒である。共に調査区外へ広がっており、遺構全体の平面形は不明であるが、柱穴や壁面などの立ち上がりから堅穴住居跡と判断した。

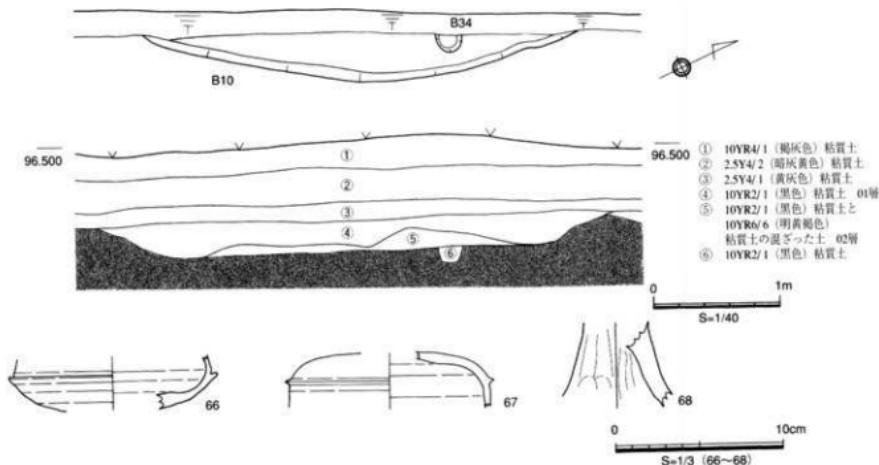
第3号堅穴住居跡（B10-SB3）（図40、図版9・19）

遺構

B区の調査区西端中央部分にあたる、24J～25J区にまたがって確認された。遺構は西側に広がっていく様相を示し、調査区の西側に堅穴住居跡の中心部分があると考えられる。予想される平面形は調査区内で確認された遺構の形状から推測することは困難であるが、円形と考えると直径が8m以上のものとなり、むしろ方形に近い形状の可能性が高い。調査区内の最大長は3.48m、最大幅は0.40mである。検出面からの深さは0.25mである。埋土は2層に分かれ上層は黒色粘質土で、下層は黒色粘質土と明黄褐色粘質土の混ざった土である。2層とも遺物を包含しており、下層には5mm程の炭化物もわずかに含まれていた。壁面の立ち上がりはそれほど急ではないが、床面は平坦となっており、そこから柱穴と考えられるピット（B34）を確認した。平面形は調査区内に遺構全体が確認できていはないが、円形と推定される。壁面の立ち上がりはきつくほぼ垂直に立ち上がる。B34の直径は0.20m、検出面からの深さは0.13mである。埋土は黒色粘質土で、堅穴住居跡の埋土に比べ、粘性が高い。その埋土に含まれている遺物と堅穴住居跡の埋土のものが同一個体と考えられる遺物であったことから、同時期の遺構と判断し、ピットと合わせて、全貌は確認できていないものの、堅穴住居跡と判断した。

遺物

B10より21点、B34より2点が出土した。そのうち2点が須恵器、21点が土師器である。いずれも



第40図 B10実測図、B10出土遺物実測図

Ⅲ期の遺物である。土師器は小片が多く、須恵器2点、土師器1点のみを図示した。66は壊身で上層より出土した。美濃須衛産である。また67は壊蓋で、下層の床面より出土した。猿投産である。68は上層より出土した短脚の高坏である。指ナデ、板ナデが確認される。

時期

2つの須恵器には時期差があるが、下層の須恵器と土師器の時期から5世紀末頃と考えられる。

第4号竪穴住居跡（C216-SB4）（図41、図版9・18・19）

遺構

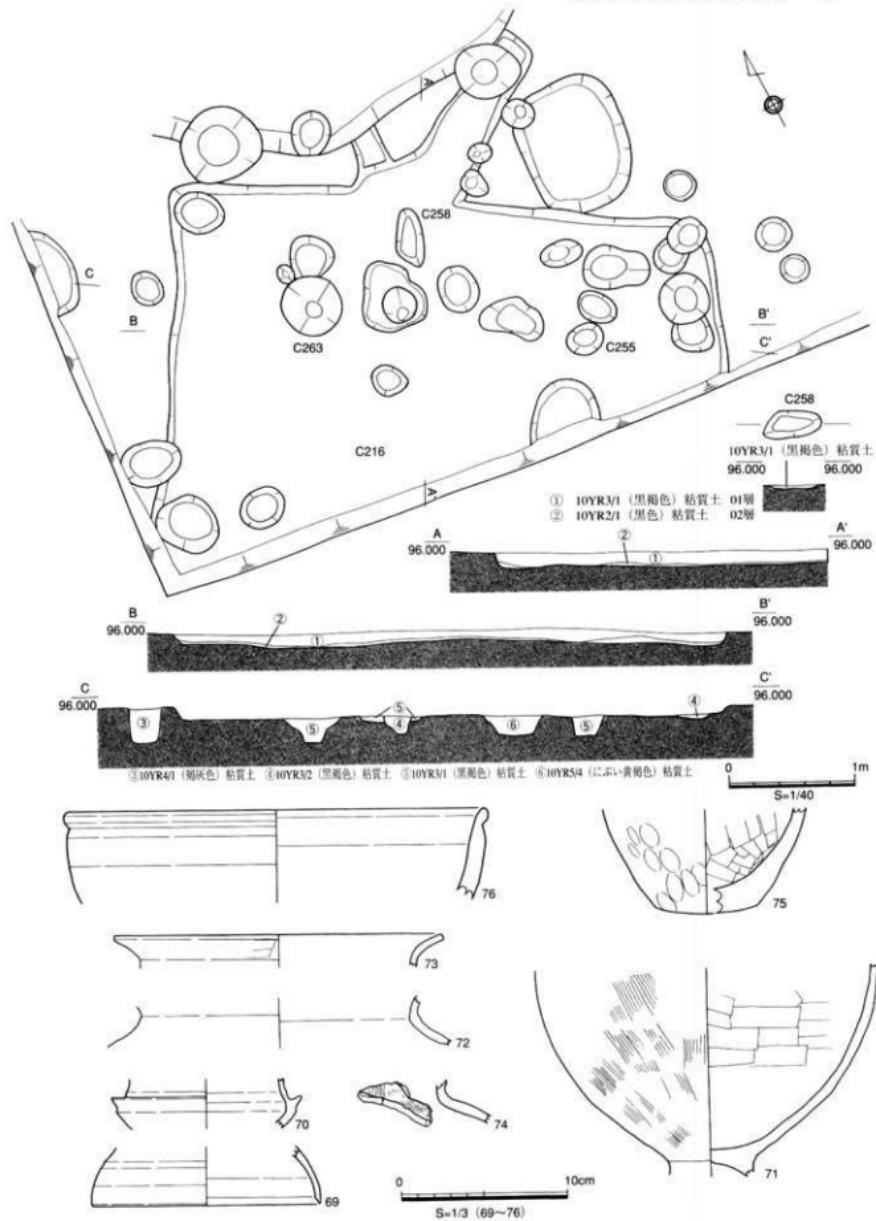
C区の調査区南西端部分にあたる、230～240、23P～24P区にまたがって確認された遺構である。遺構は南西側に広がっていく様相を示している。遺構全体が調査区内では確認できてはいないものの、平面形が方形の竪穴住居跡であると考えられる。この竪穴住居の一辺は約4.50m、もう一辺は調査区の外へ伸びていることから不明であるが、確認できた長さは3.10m以上である。主軸方向は北側にカマドを持つ住居であることから、それを基に考えるとN-50°-Eである。検出面からの深さは0.12mである。埋土は2層に分層でき上層は黒褐色粘質土、下層は黒色粘質土である。上層に比べ、下層の方がしまりが弱い。埋土にはそれぞれ遺物を包含していた。カマドは煙道部は確認できたものの、カマドの袖は確認できず、またカマド付近に多くみられる被熱を受けた焼土塊や硬化面は確認できなかった。但し、C258のピットは焚き口付近と考えられ、擂鉢状に凹んでいる。床面からの深さは0.06mほどで柱穴とは考えにくく、埋土には粘性の強い黒褐色粘質土であった。柱穴と考えられるピットは遺構内に多くみられたが、多くは中世の掘立柱建物のピットによるもので、この遺構と同時期のものはC255とC263と考えられる。C255は北東側の主柱穴と考えられる平面形が橢円形のピットである。長軸は0.29m、短軸は0.25mで床面からの掘り込みの深さは0.16mで壁面はほぼ直立に立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土である。C263は北西側の主柱穴と考えられる平面形が橢円形のピットである。長軸は0.48m、短軸は0.46mで床面からの掘り込みは0.18mである。ピットの肩は崩落しているため、壁面上部は擂鉢状となっており、それに対して下部はほぼ垂直になっている。埋土はC255と同じ黒褐色粘質土である。

遺物

125点の遺物が出土した。土師器103点、須恵器3点、白壺4点、白壺系陶器11点、剥片石器類3点、打製石斧1点である。小片の遺物が多く、特に土師器は摩耗し、時期不明のものが大半である。剥片石器は全てフレイクである。69は上層から出土した須恵器の壊蓋である。畿内系である。天井部と口縁部の境に沈線が入る。70は下層から出土した須恵器の壊身である。猿投産である。69に比べ時期が遅る。71は台付壺である。外面の遺存状態が悪くハケ日の調整の単位は不明瞭である。72～74は壺の口縁部から頸部にかけての部分である。71と同様ハケ日の調整が行われているが、単位は不明瞭である。75は壺の底部である。69～75はⅢ期の遺物である。76は白壺の盤である。口縁部は玉縁状に肥厚する。内外面にハケ塗りにより、灰釉が施されている。Ⅳ期の遺物である。

時期

2時期の遺物が出土しているが、床面遺物の出土遺物やカマドを伴う施設であることから5世紀末と考えられる。



第41図 C216実測図、C216出土遺物実測図

第4節 中世の遺構と遺物

本節では、A～E区に展開する中世の堅穴状遺構・井戸状遺構・掘立柱建物跡・柱根の残るピット・土坑・盛土状遺構について記述する。V期の遺構は堅穴状遺構4基・井戸状遺構1基・掘立柱建物跡2軒・柱根の残るピット13基・土坑22基・盛土状遺構1基・その他ピット432基である。本遺跡のほぼ全域にわたって検出されているため地区別遺構数を以下に示す。

第3表 V期の各地区の遺構数

	A 区	B 区	C 区	D 区	E 区	合 計
堅穴状遺構	0	1	3	0	0	4
掘立柱建物跡	0	0	2	0	0	2
井戸状遺構	0	0	1	0	0	0
盛土状遺構	0	0	0	1	0	1
土坑	2	1	13	1	5	22
ピット（柱根有）		2	11	0	0	13
ピット（柱根無）	22	28	272	15	105	432

(1) 堅穴状遺構

堅穴状遺構は4基検出した。B区で1基、C区で3基である。

第2号堅穴状遺構（B28-ST2）（図42、図版9）

遺構

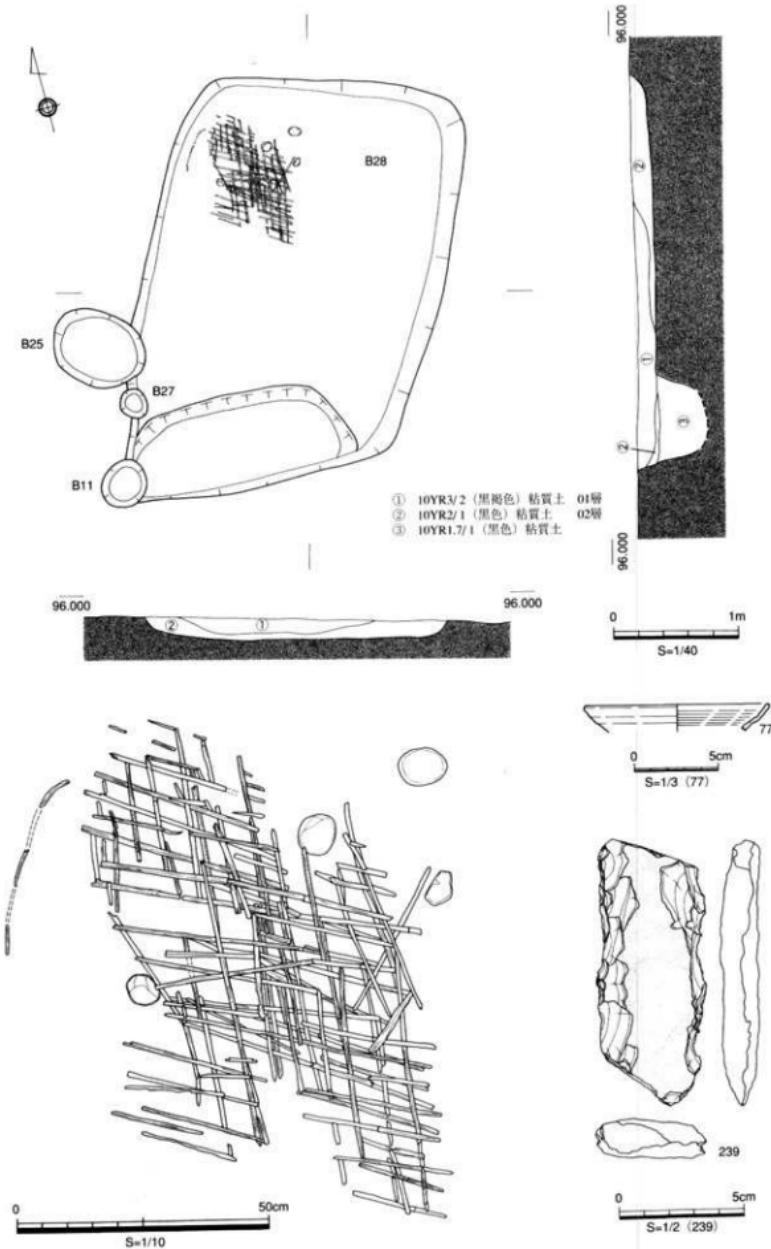
B区の西側25J区に位置する。西側でB11、B25、B27に切られ、南側でB29に切られている。平面形はややひずみがあるが長方形に近い形状である。長軸は3.40m、短軸は2.36mで、長軸方向はN-62°-Eである。検出面から床面までの深さは0.18mで、上面は削平を受けている。埋土は大きく2層に分層でき、上面は黒褐色粘質土、下層は黒色粘質土である。壁面の立ち上がりはそれほど急ではない。遺構内の北西端床面直上で一本超え一本潜りの編み方の竹製品を検出した。この竹製品は一本の竹の幅が1~1.5cmと狭い。木舞又はざる状のものと考えられる。床面は平坦であるが、壁溝や柱穴は確認できなかった。また南端では下層に風倒木痕を確認した。

遺物

18点の遺物が出土した。土師器11点、土師器皿3点、白瓷系陶器3点、打製石斧1点である。石器1点を除きV期の遺物である。土器は全て小片であるため口縁部の残る1点と石器1点のみ図示した。77は白瓷系陶器の口縁部である。内面には同心円状にコテナデによる小突起がみられる。239は打製石斧である。石材は粘板岩で両側縁がほぼ並行している。上面および下面が折損している。この遺物のみI期の遺物である。

時期

口縁部や底部の残る遺物は少ないが、出土した遺物から中世後期と考えられる。打製石斧は流れ込



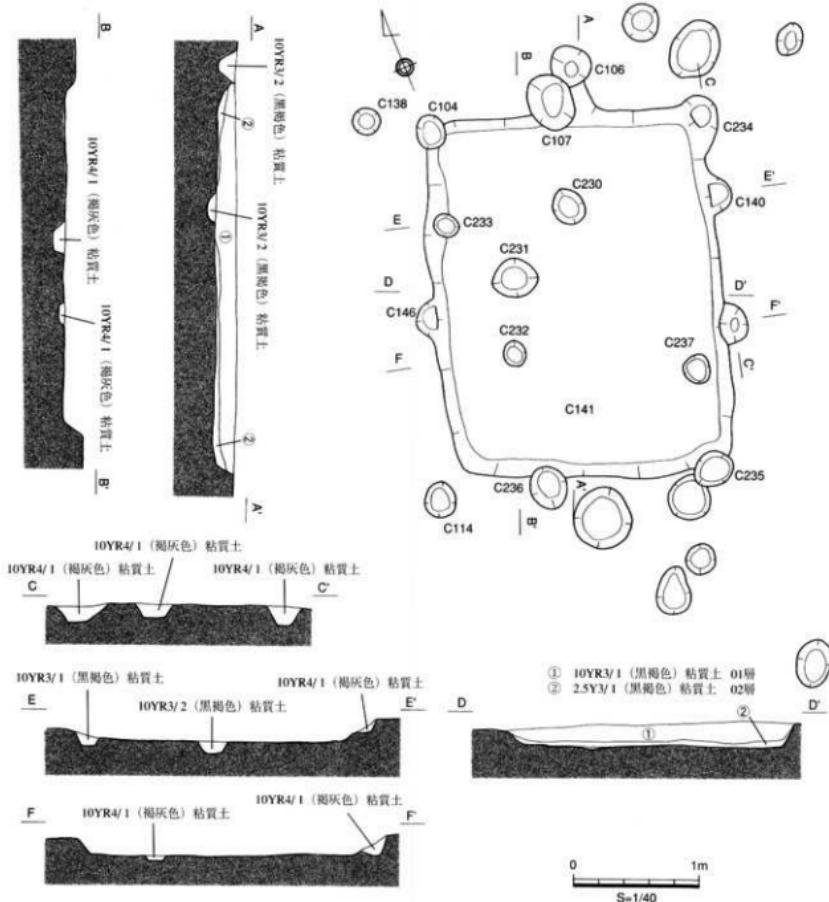
第42図 B28実測図、B28出土遺物実測図

みによる混入と考えられる。

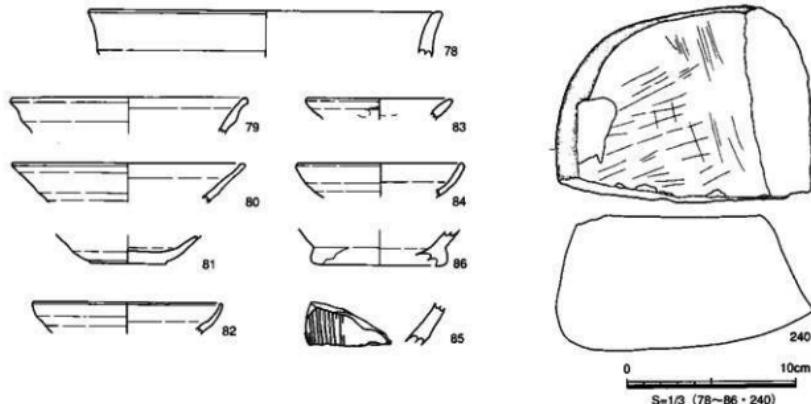
第3号堅穴状遺構（C141-ST3）（図43・44、図版9・19）

遺構

C区の中央22N区に位置する。平面形は長方形で、長軸2.90m、短軸2.32mで、長軸方向はN-16.5°-Eである。検出面から床面までの深さは0.20mで、上面は削平を受けている。埋土は黒褐色粘質土で、2層に分けられる。上層に比べ、下層はしまりが弱い。床面には壁溝は作られていない。



第43図 E141実測図 (L=96.000)



第44図 C141出土遺物実測図

堅穴状遺構の周辺には直径0.20~0.30mのピットが検出された。ピットの埋土と堅穴状遺構の埋土は同色で、同時期の可能性が高い。これらの遺構や床面で確認できた直径0.20~0.30mのピットによって覆い屋が作られていたと考えられる。

遺物

164点の遺物が出土した。土師器26点、須恵器3点、白壺3点、白壺系陶器117点、古瀬戸1点、大窯2点、輸入磁器1点、打製石斧3点、砥石1点、剥片石器類7点である。大部分がV期の遺物である。須恵器や白壺は上層からの出土であり流れ込みの可能性が高い。小片が多く口縁部または底部の残るものを主に取り上げ9点を示した。78~81は白壺系陶器である。78を除き北部系である。78は鉢で口縁部の注ぎ口に近い口縁部である。79~81は碗である。79は口縁部が肥厚する。80は外面に白泥がみられ、C224出土遺物と接合した。81は底部で無高台である。82は皿である。83は古瀬戸の縁釉小皿である。84と85は大窯で皿および擂鉢である。84は擂鉢の上に鉄軸が施されている。86は白磁の碗底部である。240は置き砥石である。石材は砂岩である。上面に擦痕が残る。

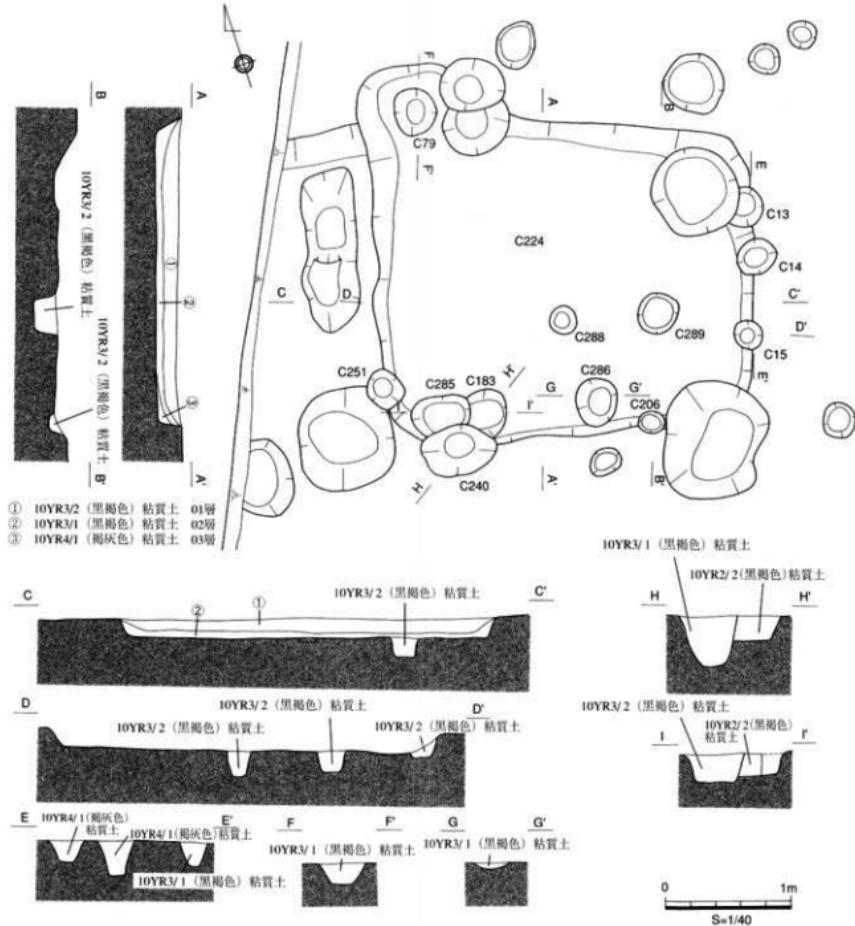
時期

口縁部および底部の残る白壺系陶器の器形および器壁の厚さを考慮するとこの遺構は、中世後期と考えられる。

第4号堅穴状遺構 (C224-ST4) (図45・46、図版9・19)

時期

C区の西端中央、C141の西側21O、22N~22O区に位置する。掘立柱建物 (SH1) に切られている。平面形はほぼ長方形で、長軸3.04m、短軸2.62m、長軸方向はN-16.5°-Eで、C141と全く同方向である。一部北西角に突出した部分が確認できる。検出面から床面までの深さは0.19mで、上面は削平を受けている。埋土は一部南側に最下層がみられるが大きく2層に分層できる。2層とも黒褐色粘質土であるが、下層は褐色が強くしまりが弱い。南側にみられる最下層は褐灰色粘質土で2層目と共に

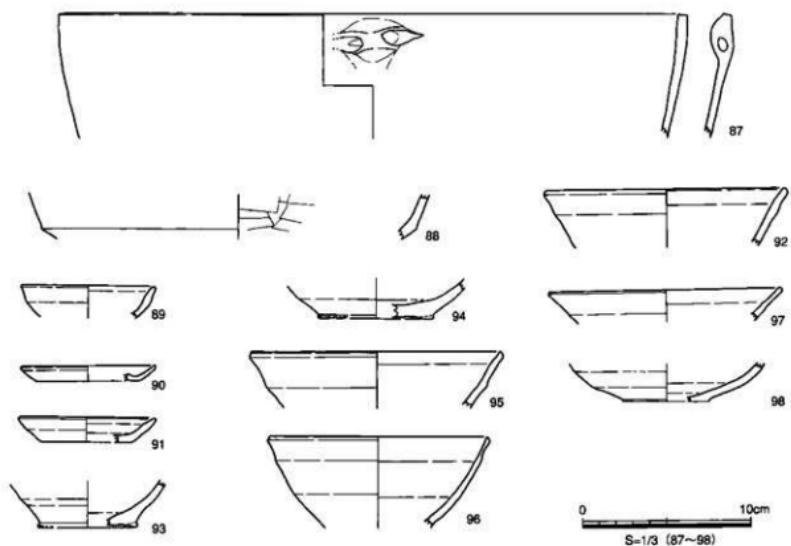


第45図 C224実測図 (L=96.000)

しまりは弱い。壁面の立ち上がりは垂直気味である。床面に壁溝は作られていない。床面には、本遺構の埋土と同質の土が入り込んでいるピットが4基(C79, C286, C288, C289)確認された。床面の精査の際に切り合い関係は確認できず、同時期の遺構と考えられる。また、本遺構の周辺には同質の土が埋土となっているピットも確認できた。一つ一つのピットの柱穴が直径0.20~0.30mのものであることから、細い柱を建て構築していることが推測できる。

遺物

473点の遺物が出土した。土師器107点、土師器皿16点、須恵器15点、白瓷1点、白瓷系陶器301点、古瀬戸5点、大窯9点、打製石斧3点、剥片石器類16点である。ほとんどが小片で、土師器は時期



第46図 C224出土遺物実測図

不明のものがかなり多くみられる。口縁部または底部が残るものを主に取り上げ図示した。白磁系陶器の遺物は副部小片が多く、薄手である。なお、掘立柱建物（SH1）と重なり合うことから、その遺構の遺物も含まれていると考えられるが区別はできない。

87と88は内耳鍔である。外面に煤が付着している。89～97は白磁系陶器である。いずれも北部系である。89～91は小皿である。91の内面には自然釉がみられる。92～98は碗である。92は口縁部が器壁が厚く端部はやや外反気味となっている。93と94は高台が底部外周付近に貼り付けられている。95は口縁端部がやや玉縁状になっている。96～98は92～95に比べ胴部の立ち上がりが緩やかである。98は無高台である。

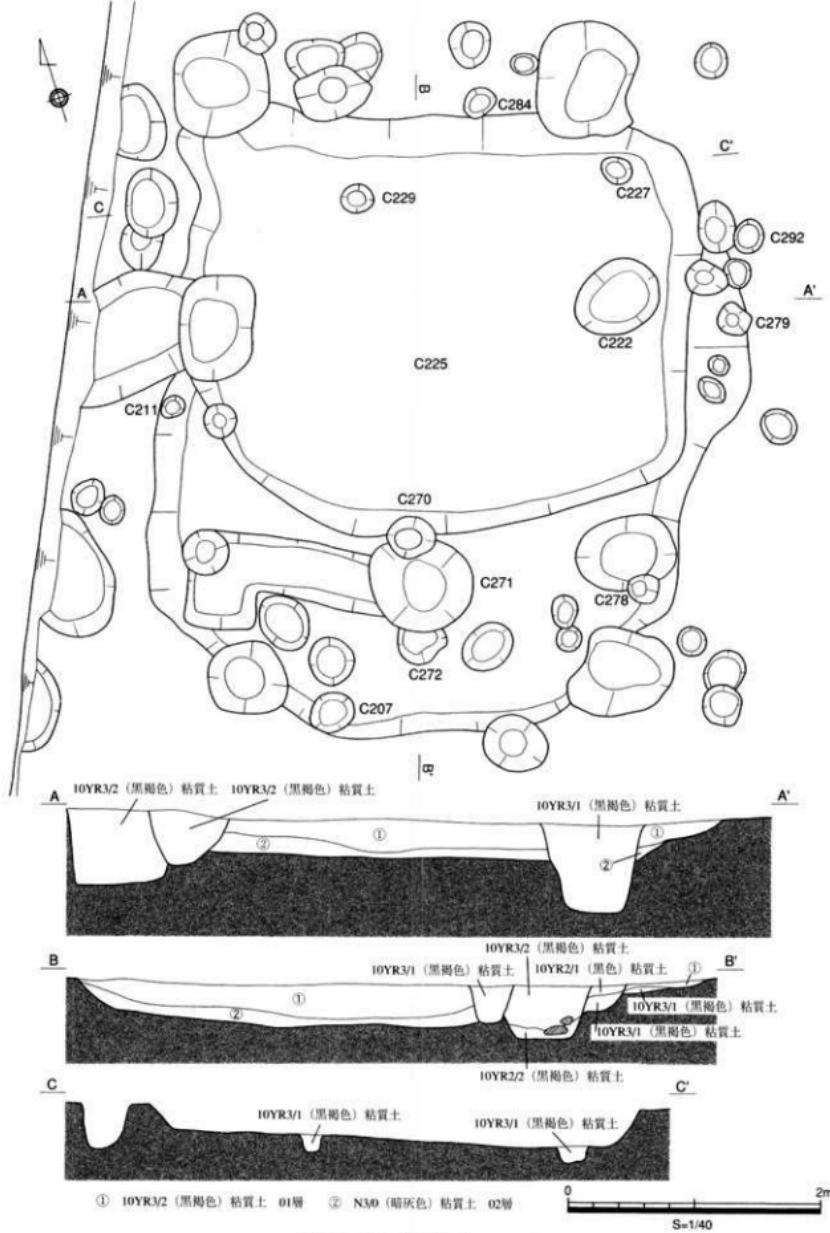
時期

出土した遺物から、中世後期と考えられる。

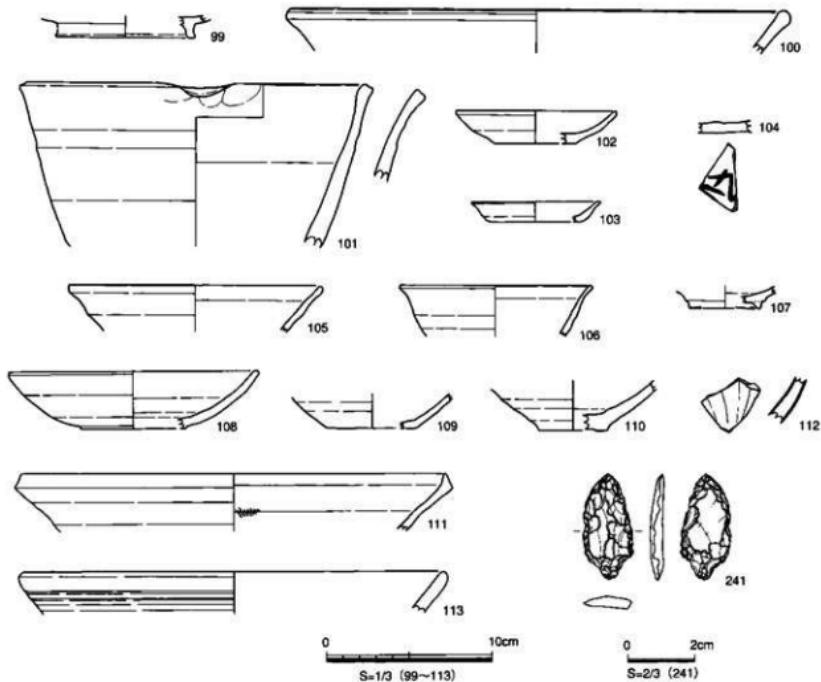
第4号竪穴状遺構（C225-ST5）（図47・48、図版9・19・21）

遺構

C区の西端、C216とC224に挟まれた、C141の西側21O、22N、22Oの3つの区にまたがっている。掘立柱建物（SH1）に切られている。平面形は長方形であるが、段差があり拡幅又は切り合っていた可能性もある。長軸は4.88m、短軸は4.65m、長軸方向はN-12.5°-Eである。検出面から床面までの深さは0.34mで、上部は削平を受けている。埋土は2層に分層でき、上層は黒褐色粘質土、下層は



第47図 C225実測図 (L=96.000)



第48図 C225出土遺物実測図

極めて粘性の強い暗灰色土である。埋土内には5~10mm程の炭化物が多く含まれている。壁面の立ち上がりは緩やかである。本遺構も壁溝は作られていない。柱穴は本遺構の周囲を囲む形でC207、C211、C278、C279、C284、C292と確認でき、C141やC224と同様の構築方法と考えられる。

遺物

251点の遺物が出土した。土器19点、土器皿12点、須恵器6点、白磁2点、白磁系陶器199点、古瀬戸4点、大窯1点、輸入磁器1点、近世陶磁器4点、打製石斧1点、剥片石器2点である。ほとんどが小片で大半が薄手の胴部である。口縁部または胴部が残るものを取り上げ16点を図示した。C224と同様掘立柱建物(SHI)と重なっているため、その遺構の遺物も含まれていると考えられるが区別はできない。

99は白磁である。底部のみ残る。高台が丁寧に作られている。100~109は白磁系陶器である。101を除き北部系である。100は鉢である。101は片口鉢である。102と103は小皿、104~109は碗である。102は胴部に縦を持つ。103は器高が非常に低い小皿である。104は底部である。最下層からの出土で外面に墨書「丸」の文字が確認できる。105は胴部の立ち上がりがやや強く、「I」縁端部が玉縁状となり、やや外反する。106は105に比べ薄手で直線的に立ち上がる。107は底部で、高台はやや内面に貼り付けられている。108と109は胴部の立ち上がりが緩やかで無高台で、外面に白泥がみられる。110

は古瀬戸の平碗である。内面に灰釉が施され底部は削り出して高台が作られている。

111は大窯の擂鉢である。内面に一部播目が確認できる。112は龍泉窯系の青磁碗である。胴部外面には錦運弁の削り出し文様がみられる。緑灰色の青磁釉が施されている。113は灰釉の施された鉢である。241は石鑓である。石材は粘板岩で、鋭角な尖頭部を持ち、基部に茎を持つ。I期の遺物と考えられる。V期の遺物が下層に多く集中している。

時期

出土した遺物から、中世後期と考えられる。須恵器や白壺、石躰などは流れ込みによる混入と考えられる。

(2) 挖立柱建物跡

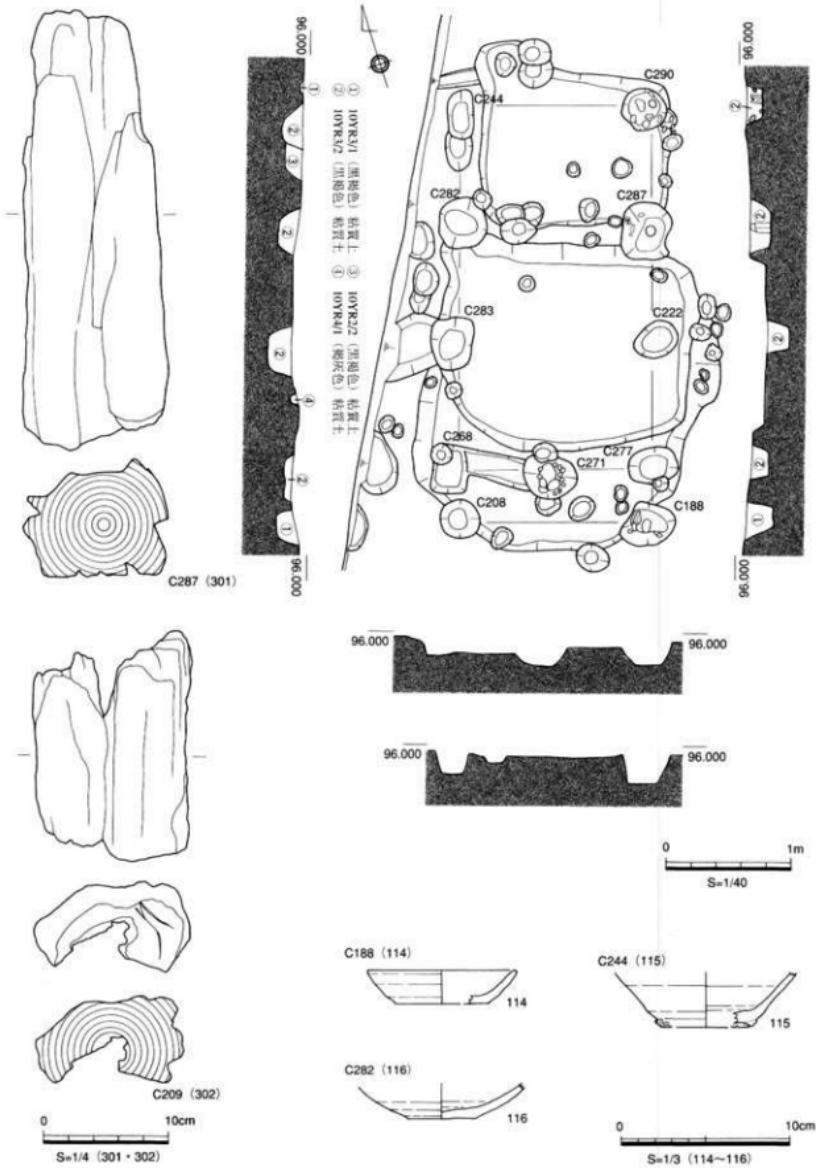
掘立柱建物跡は2軒確認した。

第1号掘立柱建物跡（C188、C277、C222、C287、C290、C244、C282、C283、C268、C208、C271-SH1）（図49、図版4・5・20・23）

造構

C区の西端中央付近、22N、22O、23O間に位置する造構である。3間×2間の柱穴列を確認したが西側に広がる可能性もある。確認された柱根の主軸方向はN-13°-Eである。柱根の平面形は不正円形か不正梢円形で、壁面の立ち上がりも似ているものが多い。また、柱根の間隔はほぼ0.9~0.95mである。柱穴の中には柱根の残るものもあり、雜木が使われていた。

C188は平面形が不正円形のピットである。最大幅は0.88mである。埋土は単層で黒褐色粘質土である。柱根は確認できなかつたものの柱の基底部に置かれた可能性の強い川原石が礎盤のように置かれていた。またその石の周辺にも拳大から人頭大の川原石が配され柱を支えていた様子がうかがえる。検出面からの深さは50cmである。C277は平面形が梢円形のピットである。長軸0.80m、短軸0.60mで、C278に切られている。埋土は単層で黒褐色土である。検出面からの深さは0.30mで、礎盤は確認されなかつた。C222は平面形が梢円形のピットである。長軸0.70m、短軸0.56mで埋土は単層の非常に粘性の強い黒褐色土である。礎盤は確認できず、この掘立柱建物跡の柱根の中では、最も掘り込みが深かったピットで、検出面からの深さは0.68mである。C287は不正梢円形のピットである。長軸が1.00m、短軸が0.94mである。C224やC225を切っている。埋土は黒褐色粘質土でハンノキ亜属の柱根が確認された^{〔註〕}。また、柱を支えるための川原石が埋土底面付近で確認された。礎盤は使われていなかつた。検出面からの深さは0.34mである。C290は平面形が円形のピットである。直径は0.70mである。C13やC224を切っている。ピットの中心にはC287と同じハンノキ亜属の柱根が確認された。また、柱の周辺からは拳大から人頭大の大きさの川原石が検出された。また、基底部から礎盤とも考えられる川原石も確認された。検出面からの深さは0.26mである。C244は平面形が梢円形のピットである。長軸0.80m、短軸0.42m、検出面からの深さは0.34mである。C12を切っている。埋土は単層で黒褐色土で非常に粘性が強い。このピットから川原石や柱根は確認できなかつた。C282は平面形が円形のピットである。直径0.85mで、検出面からの深さは0.37mである。C251に切られC225を切っている。埋土は単層で粘性の強い黒褐色土である。C283は平面形が梢円形のピットである。長軸0.82m、



第49図 SH1実測図、SH1出土柱根実測図、SH1出土遺物実測図

短軸0.70m、検出面からの深さは0.40mである。このピットもC282と同様非常に粘性の強い黒褐色土であった。C268はL字状の遺構である。長軸は1.44m、短軸は0.46m、検出面からの深さは0.20mである。検出時には確認できなかったものの西側に凹む部分がみられることから、遺構が重なり合っている可能性もある。

遺物

C188からは白瓷系陶器8点、土師器Ⅲ1点、剥片石器1点が出土した。C222からは土師器1点、白瓷系陶器2点、須恵器1点が出土した。C287からは白瓷系陶器4点、近世陶磁器1点が出土した。C290からは白瓷系陶器1点が出土した。C244からは白瓷系陶器4点が出土した。C282からは白瓷系陶器5点と近世陶磁器2点が出土した。II縁部の遺物は少なく、器壁の薄いものが多い。3点のみ図示した。I14は小皿、I15は胴部の立ち上がりのが直線的に立ち上がる高台が底部外周付近に貼り付けられる碗、I16は胴部の立ち上がりの緩い無高台の碗である。遺物の大半がV期のものである。

時期

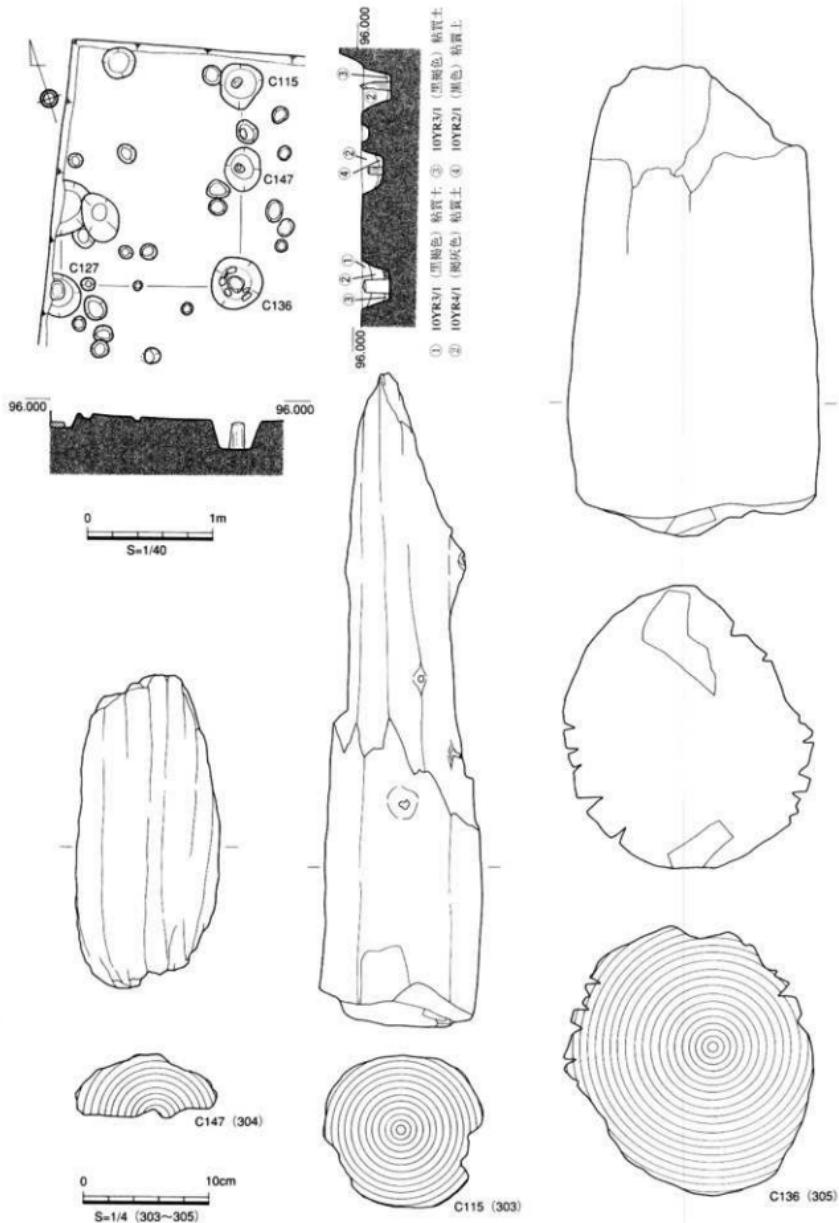
下層の遺構C224とC225を切っていることや、出土遺物から中世後期の遺構と考えられる。

第2号掘立柱建物跡（C115、C147、C136、C127-SH2）（図50、図版4・9・23）

遺構

C区の北東端、21N、21O、22N、22O区に位置する遺構である。2間×1間の柱穴列を確認したが西側および北側に広がる可能性もある。確認された柱根の主軸はN-21°-Eで、柱根の平面形は円形から梢円形で、壁面の立ち上がりも垂直気味に似たような形で立ち上がっている。柱根の残っているピットは一直線上に並んでいる。また、その樹種はC115がヒノキ、C147がムクノキ、C136がハンノキ亞属とそれぞれ異なっているが、どの樹種も付近の山に存在する木々である。また、柱根は確認できなかったもののC127からは礎盤が確認された。礎盤には川原石が用いられ、上面がを平らに据えられていた。この掘立柱建物跡の主軸方向は第1号掘立柱建物跡の主軸方向と非常に近く、同時期に存在した可能性もある。

C115は平面形が梢円形のピットである。長軸0.73m、短軸0.66mで、検出面からの深さは0.46mである。埋土は褐灰色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構の中央から柱根が確認された。根石や柱を支えるための石は検出されなかった。C147は平面形が梢円形のピットである。長軸0.68m、短軸0.58mで、検出面からの深さは0.34mである。埋土は上層が褐灰色粘質土、下層が黒色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。遺構の中央から柱根が確認された。根石や柱を支えるための石は検出されなかった。C136は平面形が梢円形のピットである。長軸0.84m短軸0.78mで、検出面からの深さは0.46mである。埋土は3層に分層でき上層は黒褐色土、中層は褐灰色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。中層および下層の埋土は柱を立てた際の埋土の可能性が高い。根石や柱を支えるための石は検出されなかった。C127は西側半分は調査区外に伸びているが、平面形が梢円形のピットと考えられる。長軸0.68m、短軸0.42m、検出面からの深さは0.24mである。埋土は上層が黒褐色粘質土で、下層が黒色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。遺構の中央には礎盤と考えられる川原石が検出され、また、その東側で人頭大ほどの柱を支えるための石も確認された。



第50図 SH2実測図、SH2出土柱根実測図

遺物

C115からは土師器1点、白瓷系陶器4点が出土した。C147からは土師器3点、土師器皿1点、白瓷系陶器3点が出土した。C136からは土師器5点、白瓷系陶器6点が出土した。C127からは土師器4点、土師器皿1点、白瓷系陶器6点が出土した。小片が多く、土師器には胴部に縁が付着したもののがみられる。また白瓷系陶器は薄手で胴部の立ち上がりの緩いものが多い。小片のため図示はしなかった。いずれもV期の遺物である。

時期

出土した遺物から中世後期と考えられる。

(3) 井戸状造構 (C8—SE1) (図51、図版10・18・20・21)

造構

C区の中央22L～22M区に位置する造構である。平面形は楕円形で、長軸1.78m短軸1.54m、長軸方向はN-89.5°-Eである。西側は急傾斜で落ち込んでいるが東側は緩やかな傾斜で擂鉢状に落ち込んでいき、その後ほぼ垂直に落ち込んでいる。検出面からの深さは2.39mで、埋土は上層は褐色粘質土、下層はさらに上層より粘性の強い黒褐色土である。上層の最下層からは白瓷系陶器の小皿の完形品や碗の破片などが多く出土した。また、擂鉢状に落ち込んでいる部分の底面には川原石が多く散かれ、井戸状に落ち込んだ部分の内周に沿った配置となっている。下層は石はみられず素掘りである。

遺物

50点の遺物が出土した。須恵器3点、白瓷2点、白瓷系陶器39点、常滑陶器2点、近世陶磁器3点、剥片石器類1点である。須恵器や白瓷、近世陶磁器は上層からの出土で、そのほかの遺物は川原石の間または川原石の直上で確認された。多くはV期の遺物である。15点を図示する。

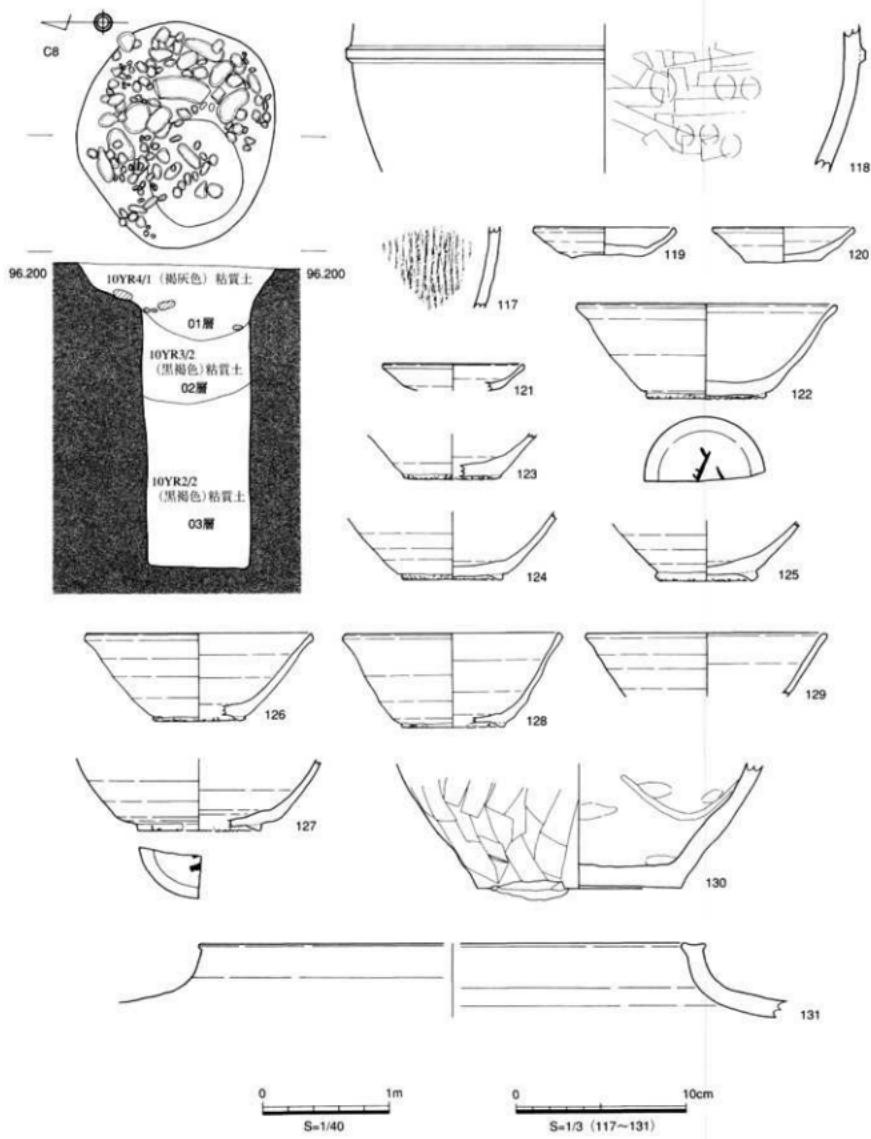
117は須恵器の壺で、外面のみ叩き目が残り内面は磨り消されている。118は白瓷の凸帯付瓶で胴部に6mm幅の突帯が貼り付けられている。外面に灰釉がハケ塗りで施されている。119～129は白瓷系陶器で119～121は小皿である。119と120はともに完形で口径も8.4cmと同じである。いずれも内面が平滑になっている。122～129は碗である。122～126は底部の高台が外周付近に貼り付けられ、器壁が厚く底形も大きい。胴部の立ち上がりが強く口縁部はやや外反する。胴部の中央付近に稜がみられる。122の底部外面には墨書きがみられる。破片のため解説はできない。内面が非常に平滑である。127と128は126に比べ高台が内側に入り高台の高さも低くなっている。129は胴部から口縁部まで直線的に立ち上がっている。130と131は常滑の壺である。130は底部に焼成時の土が着している。外面は板状工具による下から上方向への搔き上げがみられ、内面には指押さえの痕跡がみられる。131は口縁部で内外面に灰釉が施されている。

時期

出土した遺物から中世前期と考えられる。

(4) 土坑

3期の造構はA区で2基、B区で1基、C区で13基、D区で1基、E区で5基確認した。そのうち、遺物を伴ったものや特徴のあるもののみ記述する。



第51図 C8実測図、C8出土遺物

第5号土坑（A20-SK5）（図52、図版10）

遺構

A区の中央付近、南端の27E区に位置する遺構である。平面形が梢円形で長軸0.98m短軸0.86m、長軸方向はN-54°-Eである。埋土は2層に分層でき褐灰色粘質土で、下層は上層よりさらに粘性の強い黒色土である。壁面の立ち上がりはきつく、下層には石が不規則に置かれている。検出面からの深さは0.83mで、遺構の検出時は井戸状の遺構と考えていたが、断ち割りを行ってみると浅く、梢円形の土坑と判断した。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土および平面形から中世と考えられる。

第6号土坑（A24-SK6）（図52、図版10）

A区の中央南寄りの27C、27D、28C、28D区に位置する遺構である。平面形が長方形で長軸2.24m、短軸1.48m、長軸方向N-74°-Wであるが、上層が削平されている。検出面からの深さは0.22mで、埋土は黒褐色粘質土の単層で遺物の出土もない。壁面の立ち上がりは緩やかである。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土および平面形から中世と考えられる。

第7号土坑（B30-SK7）（図52）

遺構

B区の南端、26J区に位置する遺構である。平面形が梢円形で長軸1.76m、短軸0.94m、長軸方向はN-76°-Wである。壁面の立ち上がりは急で垂直気味に立ち上がる。埋土は単層で非常に粘性の強い黒色土で、検出面からの深さは0.38mである。

遺物

遺物は出土しなかった。

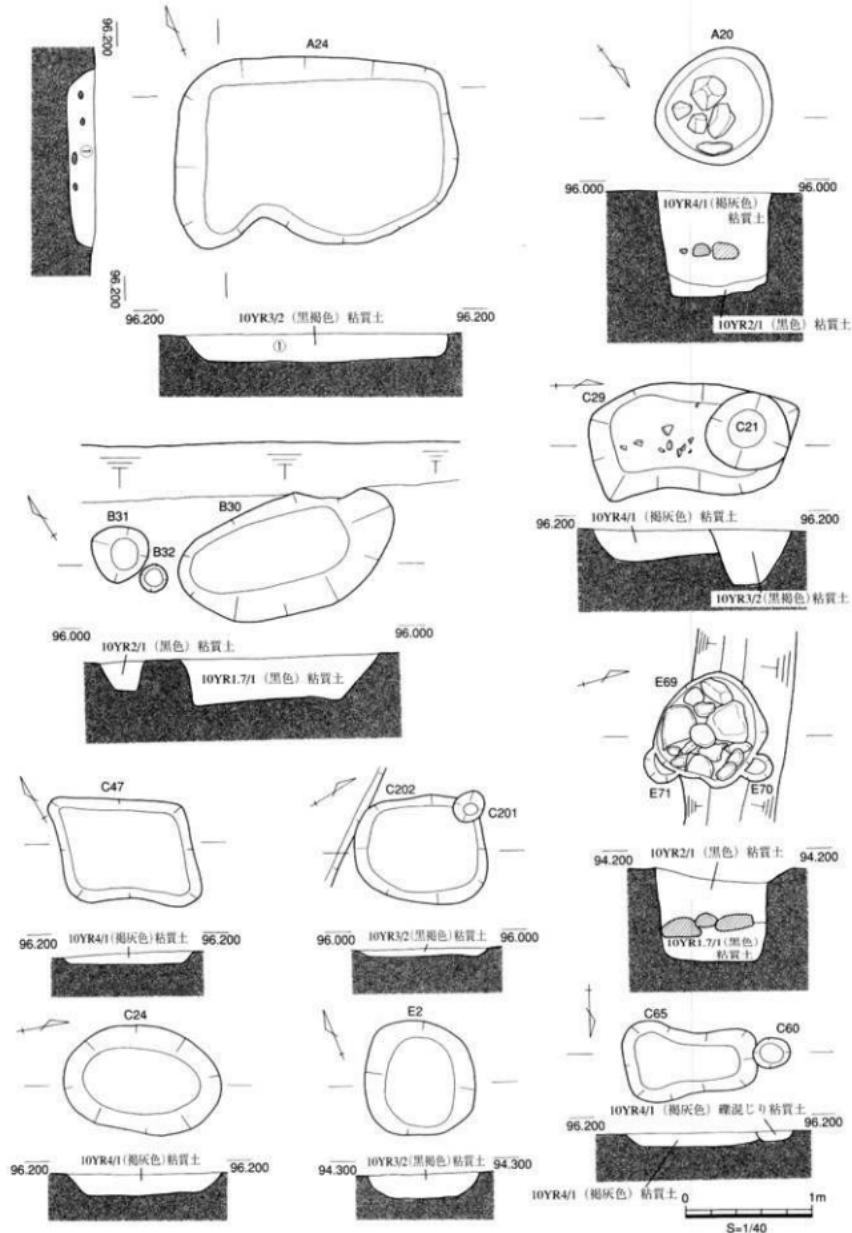
時期

埋土および平面形から中世と考えられる。B28の堅穴状遺構との関係が推測され中世後期の可能性が考えられる。

第8号土坑（C24-SK8）（図52）

遺構

C区の中央付近、22L、22M、23L、23M区に位置する遺構である。平面形が梢円形で長軸1.25m、短軸0.86m、長軸方向はN-7°-Eである。壁面の立ち上がりは擂鉢状である。埋土はやや粘性のある褐灰色土で、検出面からの深さは0.17mである。C29と並んで作られ、軸方向が似ていることから2



第52図 中世土坑実測図

基の遺構の関連が推測される。

遺物

3点の遺物が出土した。いずれも白瓷系陶器の口縁部で碗1点、小皿2点である。小片のため図示はしていない。碗は口縁部がやや外反する。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

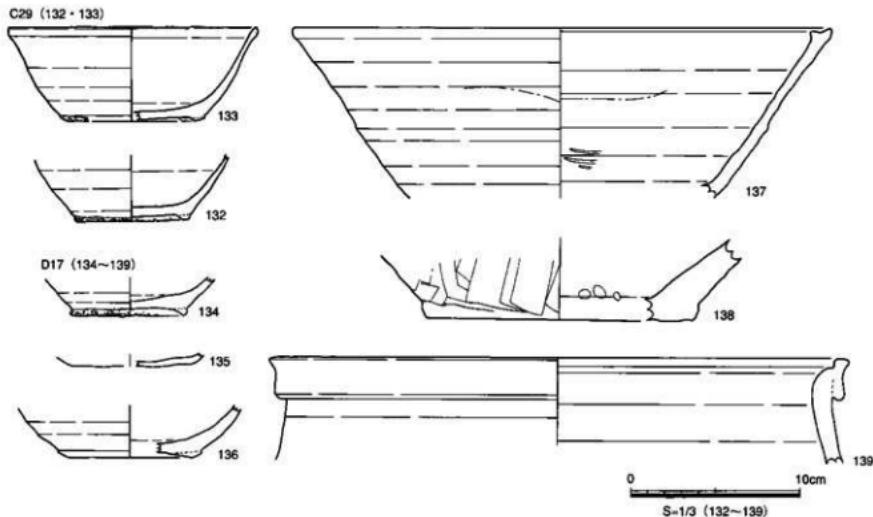
第9号土坑 (C29-SK9) (図52・53、図版20)

遺構

C区の中央付近、22M～23M区に位置する遺構である。C21に切られている。平面形は長方形で、長軸1.60m、短軸は0.86m、長軸方向はN-2°～Wである。壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は単層の褐灰色粘質土で、検出面からの深さは0.24mである。底面から白瓷系陶器が出土した。中世墓の可能性が考えられる。C24と並んで作られ、軸方向が似ていることから2基の遺構の関連も推測される。

遺物

12点の遺物が出土した。白瓷系陶器の碗が11点、常滑陶器の壺が1点である。白瓷系陶器は底部の外周付近に高台が貼り付けられ、直線的に立ち上がり口縁部まで直線的なものとやや外反するものが



第53図 C29・D17出土遺物実測図

ある。壺は胴部で外面に灰釉が施されている。I32とI33の2点のみ図示した。内面に自然釉が多くみられる。

時期

出土した遺物から中世前期と考えられる。

第10号土坑（C47-SK10）（図52）

遺構

C区の南側、24M区に位置する遺構である。平面形は長方形で、長軸1.05m、短軸0.79m、長軸方向はN-58°-Wである。壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は単層の褐灰色粘質土で、検出面からの深さは0.10mである。

遺物

2点の遺物が出土した。土師器1点、白瓷系陶器1点である。土師器は小片のため時期は不明である。白瓷系陶器は薄手の碗の胴部でV期の遺物である。いずれも小片のため図示はしていない。

時期

出土した遺物から中世後期と考えられる。

第11号土坑（C202-SK11）（図52）

遺構

C区の南側、230区に位置する遺構である。C201に切られている。平面形は隅丸長方形で長軸1.12m、短軸0.90m、長軸方向はN-30°-Eである。壁面の立ち上がりは比較的緩い。埋土は単層の黒褐色粘質土で、検出面からの深さは0.06mと非常に浅い。

遺物

10点の遺物が出土した。土師器2点、白瓷系陶器7点、剥片石器類1点である。土師器は小片のため時期は不明である。白瓷系陶器は薄手の碗で口縁部1点、底部1点、胴部5点である。底部の高台は外周付近に細く貼り付けられている。非常に小片のため図示はしていない。剥片石器はフレイクである。

時期

出土した遺物から中世後期と考えられる。

第11号土坑（E2-SK12）（図52）

遺構

E区の西端4BG区に位置する遺構である。平面形が橢円形で、長軸0.98m、短軸0.92m、長軸方向はN-1.5°-Wである。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで擂鉢状である。埋土は単層の黒褐色粘質土で検出面からの深さは0.19mである。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第12号土坑（E69-SK13）（図52、図版10）**遺構**

E区の中央やや北寄りの4BE区に位置する遺構である。平面形が円形で直径は0.92mである。検出面からの深さは0.68mである。E70やE71などのピットに切られている。また、上層は土地境となっていたことから石垣が構築されており、その影響で上部はかなり削平を受けている。石垣の掘り方を掘削したところ下層から平面形が円形のプランを確認し、本遺構を確認した。埋土は単層で黒褐色粘質土であるが、下層には拳大から人頭大の川原石が不規則に積み上げられていた。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。墓の可能性がある。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

遺構の形状および石の積み上げ方から中世と考えられる。

(5) 盛土状遺構（D17-SM1）（図53・54、図版10・21）**遺構**

D区の中央付近を北北東から南南西方向に伸びる遺構である。20R、20S、21S区で確認された。この遺構の上面には近世と考えられる溝状の遺構があり、その下層から検出された遺構である。そのため、北側および南側では、盛土状の遺構と重なり、遺構の全貌を確認することができなかった。確認された遺構は、粘質土の中に雜木や拳大から人頭大の角礫を埋め込み、西側の底地部とを区画する形で作られている。その埋土からは、古墳時代から中世までの各時代の遺物が出土している。遺構の規模は長さ6.20m、幅1.92m、高さは0.80mである。盛土の主軸方向はN-17°-Eである。

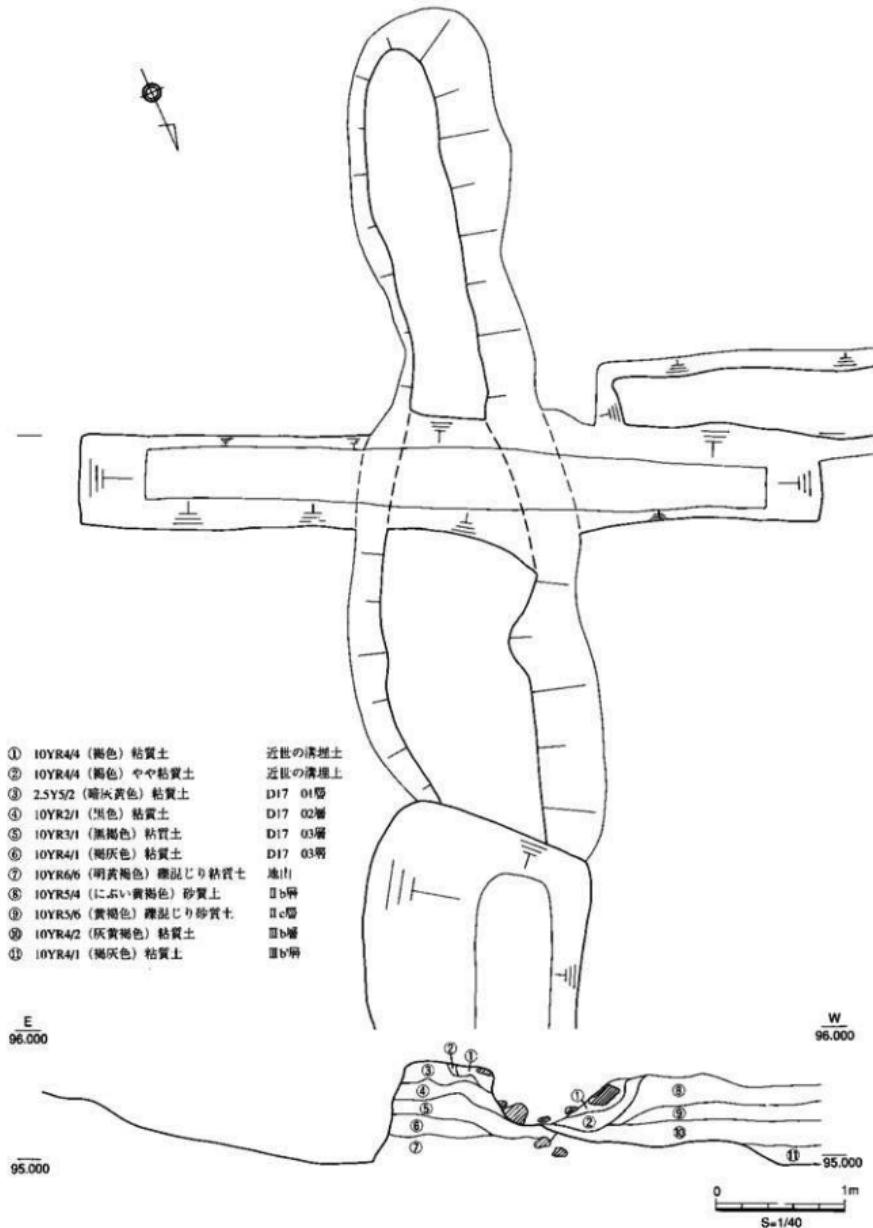
遺物

15点の遺物が出土した。土師器6点、白瓷1点、白瓷系陶器4点、古瀬戸1点、常滑陶器2点、剥片石器類1点である。土師器は胴部小片のため、時期は不明である。白瓷は胴部小片でIV期の遺物である。剥片石器はフレイクである。遺物は大半がV期の遺物である。小片が多い。

134～136は白瓷系陶器である。134と135は北部系の碗と小皿である。135は底部の径が大きく外周付近に高台が貼り付けられ、胴部の立ち上がりが強い。135は非常に薄手である。136は南部系の碗で、胴部の立ち上がりは緩い。137は古瀬戸の卸目付大皿である。内面に一部卸目が確認できる。口縁部から胴部の上面にかけ灰釉が施されている。138と139は常滑陶器である。138は外面には工具による掻き上げ痕が残る。

時期

出土した遺物の時期がかなり幅を持っているが、盛土の時期に混入したと考えられ、構築は中世後期と考えられる。



第54図 D17実測図

(6) 柱根の残るピット

柱根の残るピットは全部で13基確認した。そのうち、掘立柱建物跡として規模が推定できた前述のものを除いて8基について記述する。

第1号ピット（B1-P1）（図55・56、図版23）

遺構

B区の北西端、23I区に位置する遺構である。平面形は円形で直径は0.28mである。検出面からの深さは0.18mで、埋土は単層の黒褐色粘質土である。基底部に礎盤は置かれず、地山を掘り込み柱を建てる構造になっていた。柱根の残存長は40.5cm、幅9.9cm厚さは9.2cmである。樹種はクリである。腐食が激しく柱根の加工痕はほとんど確認できなかった。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第2号ピット（B3-P2）（図55・56、図版10・23）

遺構

B区の北西端、23I区に位置する遺構である。平面形は楕円形で長軸0.32m、短軸0.25mである。検出面からの深さは0.38mで、埋土は単層の黒褐色粘質土である。基底部には、B1と同じく礎盤は置かれず、地山を掘り込み柱を建てる構造になっている。柱根の残存長は59.8cmで、幅15.0cm、厚さは12.8cmである。樹種はB1と同様クリが使われている。B1とB3の間が2.25mで、樹種も同じことから同じ掘立柱建物跡の柱根の可能性もある。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第3号ピット（C123-P3）（図55・56）

遺構

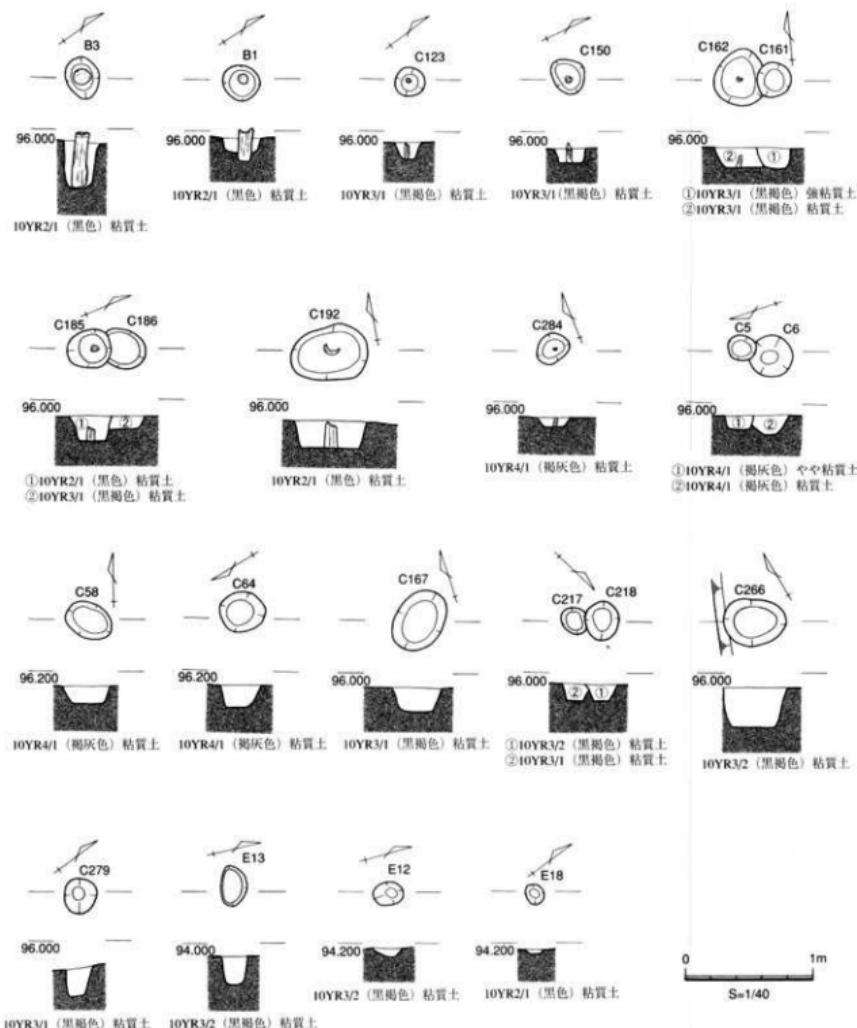
C区の北西端21O区に位置する遺構である。平面形は円形で直径は0.24mである。検出面からの深さは0.14mで、埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。遺構内には礎盤や柱を支えるための石は検出されなかったが、柱根の一部が残っていた。その柱の残存長は15.3cm、幅は3.0cm、厚さは1.8cmである。樹種はクリを使用している。

遺物

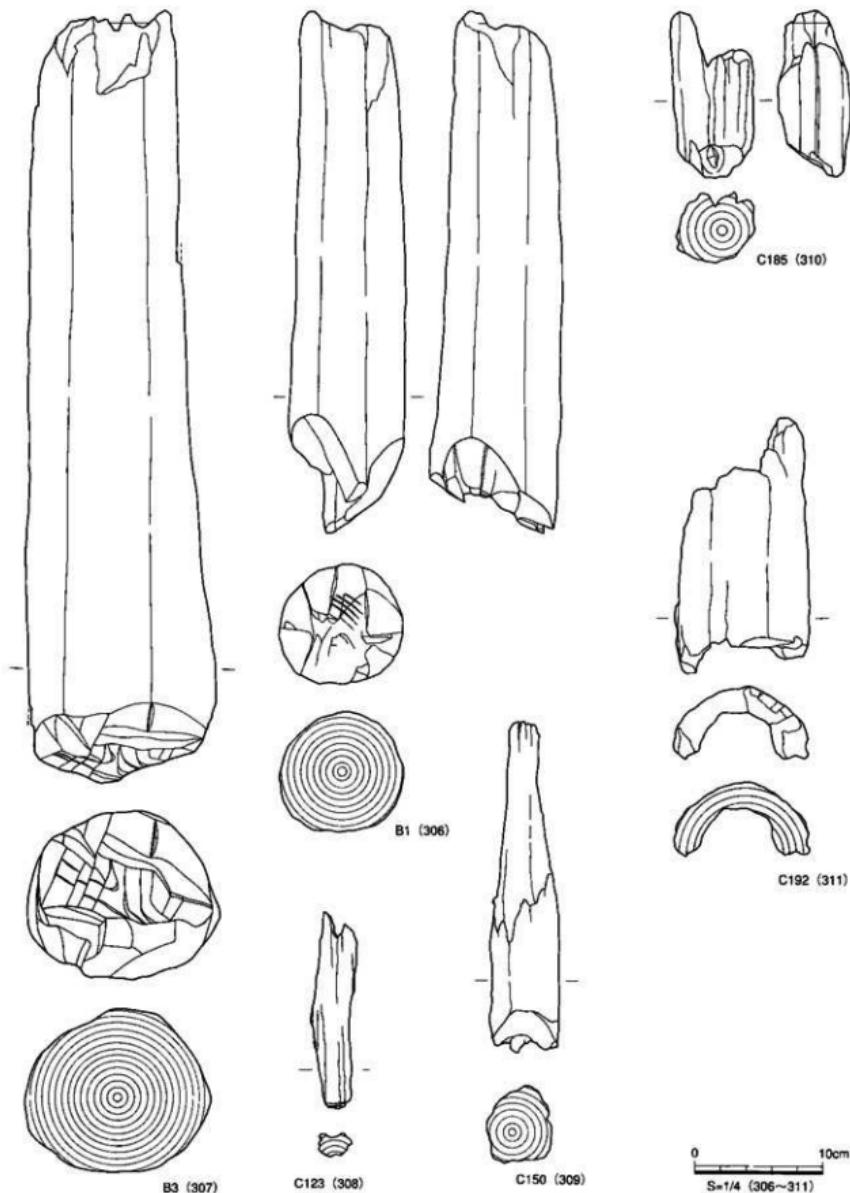
遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。



第55図 中世ピット実測図



第56図 柱根実測図

第4号ピット (C150-P4) (図55・56)

遺構

C区の北端、21N区に位置するピットである。平面形は梢円形で長軸0.30m、短軸0.25mである。検出面からの深さは0.12mで、その埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。遺構内に礎盤や柱を支えるための石は検出されなかったが、中央から柱根の一部が確認された。その柱の残存長は25.5cm、幅は5.3cm、厚さは5.6cmである。樹種はヒノキを使用している。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第5号ピット (C162-P5) (図55・56)

遺構

C区の北端、21N区に位置するピットである。平面形は梢円形で長軸0.44m、短軸0.40m、検出面からの深さは0.16mでC161に切られている。埋土は単層で黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がる。遺構内には礎盤や柱を支えるための石は検出されなかったが、中央から柱根の一部が確認された。残存長10.0cm、幅4.0cm、厚さは1.8cmである。樹種はクリを使用している。残存状況が悪く、柱根の図化は省略した。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第6号ピット (C185-P6) (図55・56)

遺構

C区の南側、23O区に位置するピットである。平面形は梢円形で長軸0.34m、短軸0.30mである。検出面からの深さは0.30mで、その埋土は単層の黒色粘質土である。C186を切っている。壁面は垂直気味に立ち上がっている。遺構内に礎盤や柱を支えるための石は検出されなかったが、中央から柱根の一部が確認された。残存長は12.8cm、幅6.1cm、厚さ5.0cmである。樹種はクリを使用している。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第7号ピット (C192-P7) (図55・56)

遺構

C区の南端、23O区に位置するピットである。平面形は梢円形で長軸0.60m、短軸0.42mである。検

出面からの深さは0.22mで、その埋土は単層の黒色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。遺構内に礎盤や柱を支えるための石は検出されなかったが、中央から柱根の一部が確認された。残存長は18.6cm、幅10.4cm、厚さは5.6cmである。樹種はクリを使用している。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

第8号ピット (C284-P8) (図55・56)

遺構

C区の西側、22O区に位置するピットである。平面形は橢円形で長軸0.26m、短軸0.22mである。検出面からの深さは0.08mで、その埋土は単層の褐灰色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。礎盤や柱を支えるための石は検出されなかったが、中央から柱根の一部が確認された。残存長は7.0cm、幅4.0cm、厚さは1.8cmである。樹種はクリを使用している。残存状況が悪く、図化は省略した。

遺物

遺物は出土しなかった。

時期

埋土から中世と考えられる。

(7) 遺物出土のピット

遺物が出土した遺構の中で時期が特定できるものを11基図示する。

第9号ピット (C6-P9) (図55・57、図版20)

遺構

C区の中央、22M区に位置するピットである。C5のピットを切っている。平面形は円形で直径0.33mである。検出面からの深さは0.15mで、その埋土は単層の褐灰色粘質土である。壁面は擂鉢状に立ち上がっている。

遺物

1点の遺物が出土した。I40は白瓷系陶器の碗底部で外周付近に高台が貼り付けられている。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第10号ピット (C58-P10) (図55・57)

遺構

C区の南東端、24M区に位置するピットである。平面形は橢円形で長軸0.38m、短軸0.26mである。

検出面からの深さは0.14mで、その埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

1点の遺物が出土した。141は白瓷系陶器の碗底部で外周付近に高台が貼り付けられている。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第11号ピット (C64-P11) (図55・57、図版20)

遺構

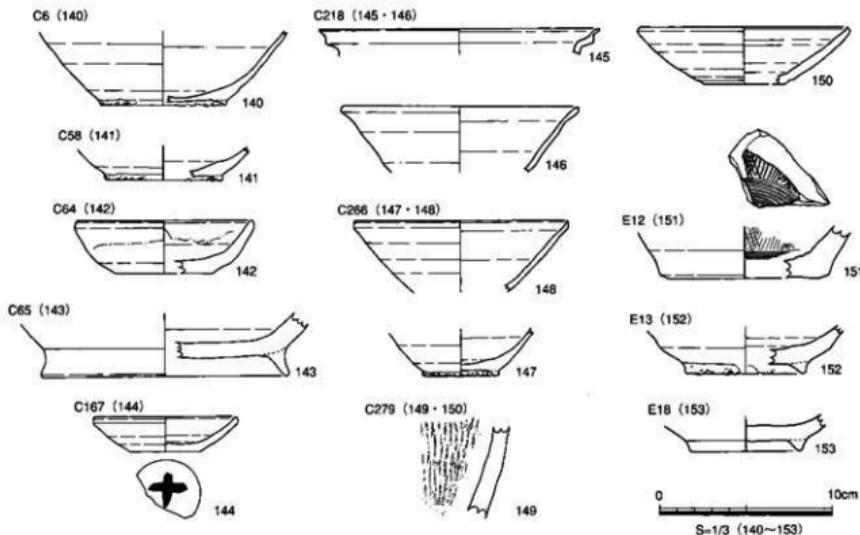
C区の東側、23L区に位置するピットである。平面形は楕円形で長軸0.36m、短軸0.30mである。検出面からの深さは0.18mでその埋土は単層の褐灰色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

2点の遺物が出土した。白瓷1点、古瀬戸1点である。白瓷は胴部小片のため図示は省略した。142は古瀬戸の縁袖小皿である。V期の遺物である。

時期

IV期とV期の遺物が出土しているが、IV期の遺物は混入と考えられ、この遺構は埋土や出土遺物から中世後期のものと考えられる。



第57図 ピット出土遺物実測図

第12号ピット (C65-P12) (図55・57、図版20)

遺構

C区の南東端、24M区に位置するピットである。C60に切られている。平面形は不定形で長軸1.02m、短軸0.48mである。検出面からの深さは0.10mで、その埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は緩やかに立ち上がっている。

遺物

1点の遺物が出土した。I43は白瓷系陶器の底部である。南部系の鉢で、内面が非常に平滑である。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第13号ピット (C167-P13) (図55・57、図版21)

遺構

C区の中央、22N区に位置するピットである。平面形は楕円形で長軸0.50m、短軸0.38mである。検出面からの深さは0.20mで、その埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

2点の遺物が出土した。いずれも白瓷系陶器である。1点のみ図示する。I44は白瓷系陶器の小皿である。内面が非常に平滑である。底部外面には墨書きで「十」と書かれている。底径が小さい。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第14号ピット (C218-P14) (図55・57、図版20)

遺構

C区の西端、23P区に位置するピットで、C217を切っている。平面形は楕円形で長軸0.30m、短軸0.26mである。検出面からの深さは0.14mでその埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

6点の遺物が出土した。土師器2点、白瓷系陶器4点である。土師器のうち1点は小片のため時期は不明である。白瓷系陶器は碗2点、小皿2点で、うち3点は胴部小片である。2点のみ図示した。I45はS字状口縁台付壺のU縁部である。III期の遺物である。I46は白瓷系陶器の碗である。V期の遺物である。

時期

III期の遺物とV期の遺物が出土しているが、埋土や出土遺物から中世後期と考えられる。

第15号ピット (C266-P15) (図55・57、図版20)

遺構

C区の南西端、23P区に位置するピットである。C216を切っている。平面形は楕円形で長軸0.48m、短軸0.26mである。検出面からの深さは0.32mでその埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

4点の遺物が出土した。いずれも白瓷系陶器で薄手である。147は底部で外周付近に高台が貼り付けられ胴部は立ち上がりが強い。148は口縁部で胴部が直線的に立ち上がる。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第16号ピット (C279-P16) (図55・57、図版20)

遺構

C区の西側、23N～23O区に位置するピットである。C225を切っている。平面形は楕円形で長軸0.29m、短軸0.26mである。検出面からの深さは0.22mでその埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

2点の遺物が出土した。須恵器と白瓷系陶器である。149は壺胴部である。外面には擬斜口格子目状の叩き目がみられ、内面には同心円状の当て具痕が磨り消されている。III期の遺物である。150は無高台の白瓷系陶器で胴部の立ち上がりは弱い。V期の遺物である。

時期

III期とV期の遺物が出土しているが、埋土や切り合ひ関係および出土遺物から中世後期と考えられる。III期の遺物は流れ込みと考えられる。

第17号ピット (E12-P17) (図55・57、図版20)

遺構

E区の西側、4BG区に位置するピットである。平面形は楕円形で長軸0.24m、短軸0.18mである。検出面からの深さは0.06mと浅く、その埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は拂り鉢状に緩やかに立ち上がっている。

遺物

遺物が1点出土した。151は大底の拂鉢である。同心円状に擗目がみられる。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世後期と考えられる。

第18号ピット (E13-P18) (図55・57、図版20)

遺構

E区の西側、5BF区に位置するピットである。平面形は楕円形で長軸0.32m、短軸0.21mである。検

出面からの深さは0.22mでその埋土は単層の黒褐色粘質土である。壁面は垂直気味に立ち上がっている。

遺物

遺物が4点出土した。白壺系陶器2点、常滑陶器2点である。常滑陶器は胴部片のため図示は省略した。白壺系陶器のうち1点のみ図示する。152は白壺系陶器の碗である。器壁が厚く、高台は外周付近に丁寧に貼り付けられている。胴部の立ち上がりも強い。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第19号ピット（E18-P19）（図55・57、図版20）

遺構

E区の西側、4BF区に位置するピットである。平面形は楕円形で長軸0.17m、短軸0.14mである。検出面からの深さは0.04mで、その埋土は単層の黒色粘質土である。壁面は擂鉢状に緩やかに立ち上がっている。

遺物

遺物が1点出土した。153は白壺系陶器の碗である。焼成が不良であるが、器壁が厚く高台は外周付近に貼り付けられている。V期の遺物である。

時期

出土遺物から中世前期と考えられる。

第5節 試掘調査出土の柱根（図58・図版23）

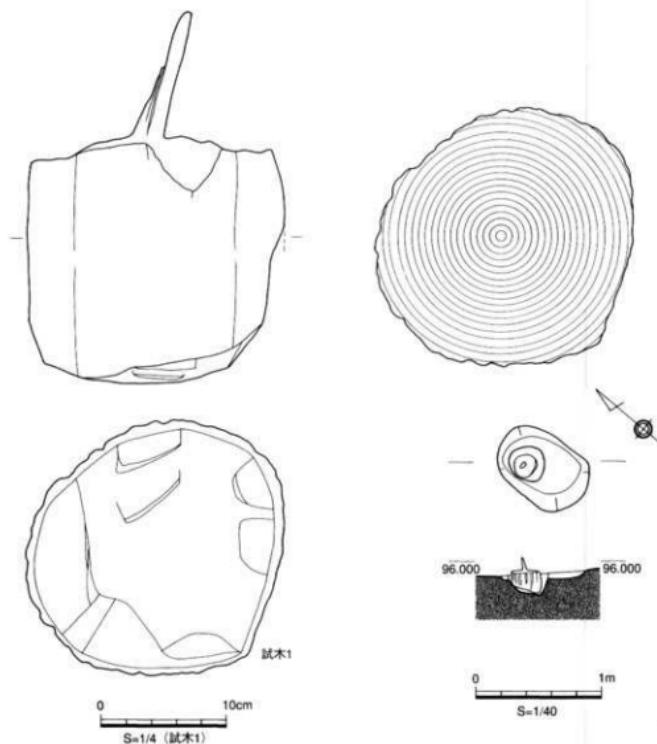
平成11年度の試掘調査の際、C区の北側のトレンチ内より柱根の残るピットが確認された。（右写真参照）

1m幅のトレンチのため、掘立柱建物跡のどの部分かは不明であったが、柱根の最下層のレベルが95.75mと今回の調査で検出されたピットのレベルとほぼ等しい。

第2号掘立柱建物跡が北側にさらに広がることも推測される。樹種はクスギでこの柱根は底面の加工痕が明瞭に残っている。集落が今回の調査区からさらに北に広がることを指摘すると共に、今回の調査で検出された柱根は腐食が激しく加工の痕跡が不明瞭であったため、参考資料として紹介する。

柱根は現存長29.5cm、幅20.5cm、厚さ20.5cmで、樹木の皮が付いたまま使われている。このピットの底面部分は地山のしまりがよく、礎盤は置かれていなかった。





第58図 試掘トレンチ内ピット実測図、柱根実測図

第6節 包含層の遺物

本節では、A区～E区の包含層の遺物について記述する。

I期の遺物 (図59、図版16・17)

I期の遺物は包含層からは土器が3点確認された。早期の押型文土器の胴部小片1点、中期の胴部小片2点である。いずれも小片のため図示しない。

242は石鋤である。石材はチャートである。鋭角な尖頭部と基部には茎を持っている。左脚部に折損がみられる。243と244は打製石斧である。石材は粘板岩である。両側縁がほぼ平行している。

244の上面は折損している。

II期の遺物 (図60、図版22)

154は細頸壺の口縁である。口縁部外面に凹線が2本巡っている。

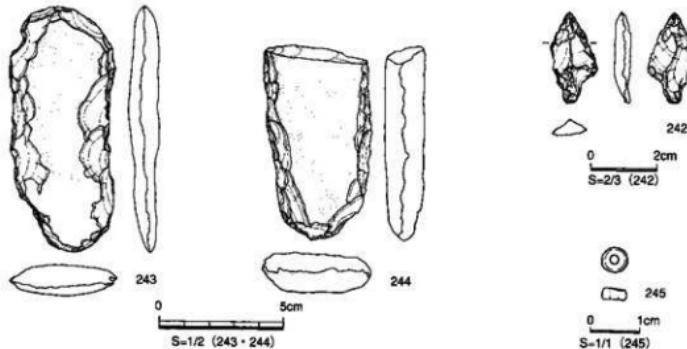
III期の遺物 (図60、図版22)

155～157は土師器である。155と156は壺である。平底で外面には指頭圧痕、内面には板ナデの痕跡が確認できる。155は胴部である。頸部から肩部にかけてあまり張らない器形である。156は単位は不明であるが、口縁部から頸部にかけてハケ目調整が行われている。157は高坏の屈折脚である。158と159は須恵器である。158は高坏の坏部で外面に波状文が施されている。内面には自然釉がみられる。159は坏身である。ともに猿投産である。

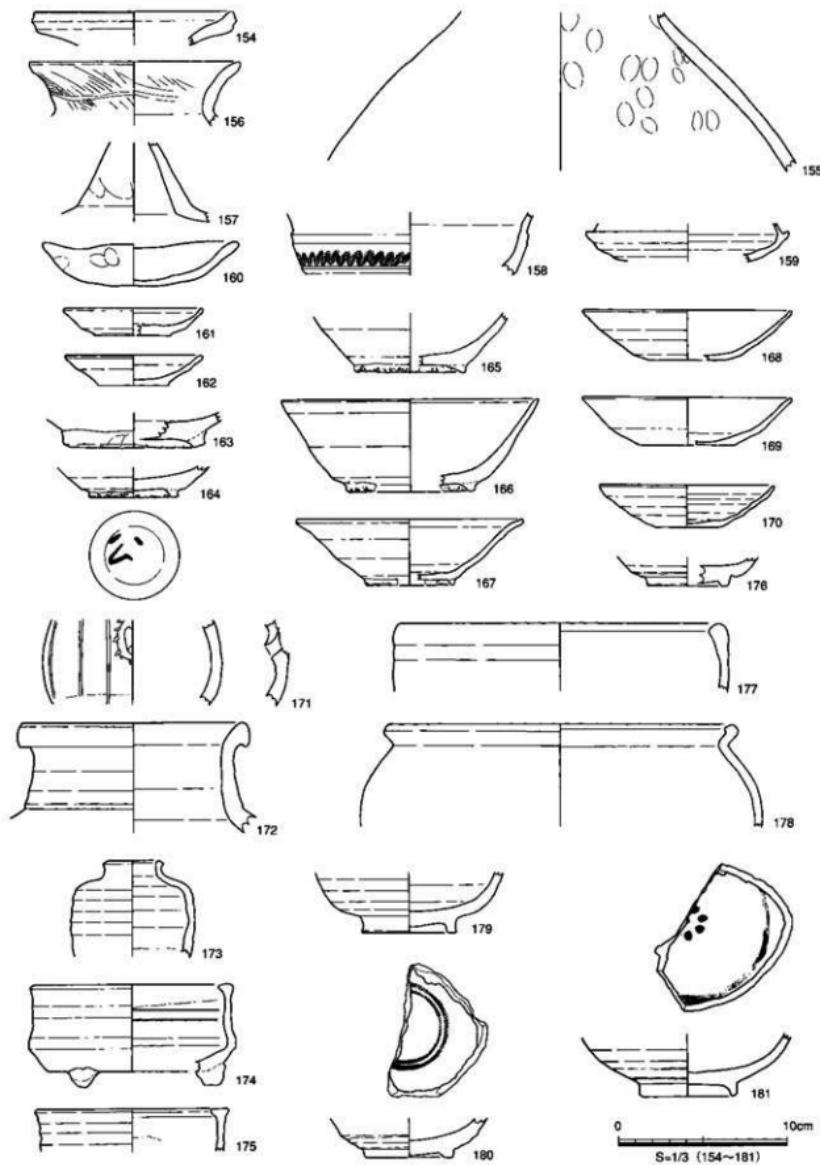
245は白玉である。石材は滑石で1点のみ確認された。白玉は祭祀遺構からの出土が多く、周辺で祭祀が行われていたことが推測される。

V期の遺物 (図60、図版18・22)

160は土師器皿である。内外面に指頭圧痕がみられる。161～170は白瓷系陶器である。161と162は小皿で、内面は平滑である。163～170は碗である。163～166は底部で器壁が厚く、外周付近に高台が貼り付けられ、胴部の立ち上がりも強い。164の外面には墨書「公」がみられる。167の口縁部はやや外反する。高台は外周付近に貼り付けられているが163などに比べ低く、器壁も薄い。168～170は無高台の碗である。器壁が薄く、胴部の立ち上がりも緩い。170は内部に同心円状のコテナデの痕跡がみられる。171～175は古漸戸である。171は注口である。外面に縱方向の沈線による裝飾が施され内外面に鉄釉が塗られている。172は有耳壺である。内外面に灰釉が施されている。173は茶入れである。内外面に鉄釉が施されている。174と175は香炉である。174は袴腰形香炉で、内面口縁部から外面にかけて鉄釉が施されている。脚は3本と推定される。175は筒形香炉で、口縁部のみの出土である。内面口縁部から外面にかけて灰釉が施されている。176は大窓の丸碗である。高台を除き内外面に灰釉が施されている。177～181は近世陶器である。177は鉢で内外面に灰釉が施されている。178は行平鍋である。内外面に灰釉が施されている。179～181は丸碗である。179は内外面に船釉が施されている。180は内面底部に幅2mmの二重の園線が描かれ、長石釉が施されている。181は内面に呉須絵で花文が描かれ、透明釉が施されている。



第59図 包含層出土石器実測図



第60図 包含層出土土器実測図

第7節 表面採集の遺物（図61、図版23）

地元の方から、富田清友遺跡付近の畠地で発見した弥生土器6点の寄贈をうけた。農作業中に掘り起こされた遺物であるため、出土した地点等は明らかではない。しかし、遺物の遺存状況が比較的良好で、図示することができるため、この節において紹介することにする。

191は高坏の坏部で、内外面ともに縦方向にミガいている。193は脚部で、外面の調整は不明であるが、内面にはケズリの調整痕と指押圧痕が残る。この2点は、同一個体の可能性が高い。脚部の端部は欠損しているが、坏部の外反は強く、山中期にみられる外反高坏の様相を備えている。また、192は高坏の坏部である。内面の調整は不明であるが、外面は縦方向にミガいている。194は脚部で、外面は縦方向にミガいている。この2点も、同一個体の可能性が高い。脚部の端部は欠損しているが、坏部には先端部には面を持ち、多少外反は弱いものの191・193と同じく山中期の特徴を有する高坏である。

195は器台受け部、196は器台脚部であり、同一個体の可能性が高い。受け部は内外面ともに細かくミガき、脚部は外面は細かく丁寧にミガく一方で、内面のハケ調整痕はそのままに残されている。また、脚裾部の外反が強く、端部には1条の凹線を施す。内外面は全体的に赤褐色を呈し断面はそれにはさまれるように中黒が残るもので、成瀬正勝氏が「砂行遺跡における土器の在地色」^(注1)で位置づけた、条痕系器台と考えられる。198も器台である。外面は細かく丁寧に縦方向にミガかれ、内面には指ナデ痕が残されている。195・196と違い、にぶい黄橙色を呈する。195・196、198のどちらも山中期の特徴を有する器台である。

197は長頸壺である。焼成の際か使用時にかは、はっきりしないが、内部に煤が付着する。外面は196の器台同様に、縦方向に細かくミガかれており、口縁部の内面には指押圧痕が残っている。また、底部近くに、外側から開けられた、打欠きによる穿孔がある。これは、焼成後にあけられたもので祭祀的な意味を持つものであろう。

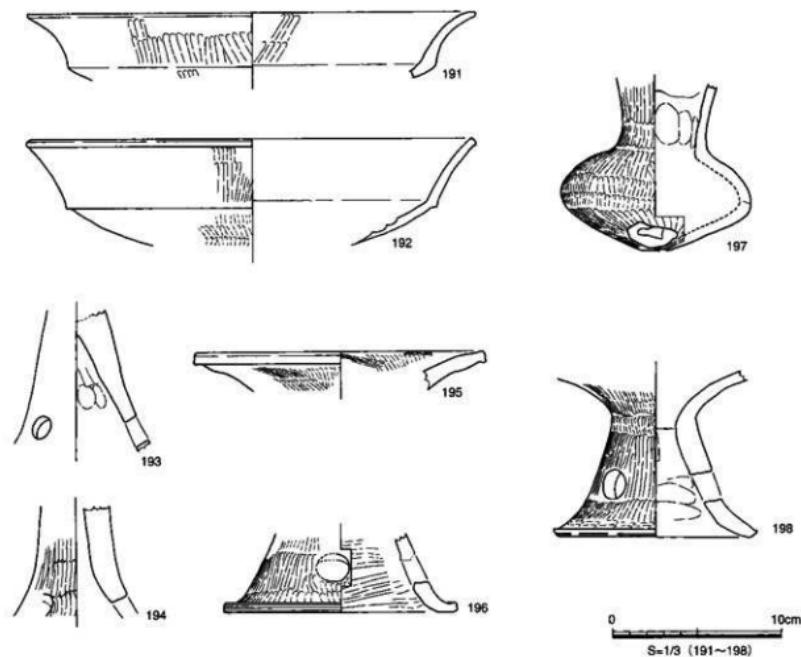
先行の研究^(注2)によって、これらの遺物はすべて、弥生時代後期の山中期のものと考えられる。特に端部が、撥形に開いて、比較的厚手の脚部を持つ器台や、外反高坏は山中期の様相をよく示している。196の器台と197の長頸壺は大きさや色調・調整から、セットである可能性が高く、祭祀的な様相をうかがうことができる。なお、同じ河岸段丘上に存在する為岡遺跡^(注3)には、山中期の6・7・12号方形周溝墓があることから、富田清友遺跡付近にも同時期の方形周溝墓が存在した可能性が想定できる。

^(注1) 植田弥生氏に柱痕の分析を依頼し、樹種の同定を行った。柱痕の樹種はその分析結果による。

^(注2) 成瀬正勝 「砂行遺跡における土器の在地色」「砂行遺跡」(2000) 岐阜県文化財保護センター調査報告書65集 財団法人岐阜県文化財保護センター

^(注3) 赤塚次郎 「山中式土器について」「山中遺跡」(1992) 愛知県埋蔵文化センター調査報告書40集 財団法人愛知県埋蔵文化センター

^(注4) 渡辺博人 「為岡遺跡発掘調査報告書」(1995) 美濃加茂市教育委員会文化課



第61図 表面採集の遺物

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

富田清友遺跡から出土した炭化物試料3点の放射性炭素年代をAMS法にて測定した。測定結果と暦年代較正して得られた結果は第4表に記載した。

放射性炭素年代測定について

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

なお、¹⁴C年代値（yrBP）の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。試料の¹⁴C計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の¹⁴C計数率の比が¹⁴C_{sample}/¹⁴C_{Modern} ≥ 1の時はModernと表記する。

同位体分別効果の補正について

第3表に記載したδ¹⁴C_{raw}値は、PDB標準試料の¹³C/¹²C比（(¹³C/¹²C)_{PDB}=0.0112372）を標準値として、その標準値からのずれを千分率で示し、試料炭素の¹³C/¹²C比（(¹³C/¹²C)_{sample}）を質量分析計で測定して、 $\delta^{14}\text{C}_{\text{raw}} = [\left(^{13}\text{C} / ^{12}\text{C} \right)_{\text{sample}} - \left(^{13}\text{C} / ^{12}\text{C} \right)_{\text{PDB}}] / \left(^{13}\text{C} / ^{12}\text{C} \right)_{\text{PDB}} \times 1000$ の計算式によって算出した。試料のδ¹⁴C_{raw}値を-25.0‰に規格化することにより、測定された試料のδ¹⁴C_{raw}値を用いて¹⁴C濃度を補正し、これを用いて¹⁴C年代を算出した。したがって、表1に記載した¹⁴C年代は同位体分別効果による測定誤差を補正した年代である。

暦年代較正について

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確に真の年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の¹⁴C年代の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。較正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program* CALIB rev. 4.3 [Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98 : Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40, p.1041-1083] を使用した。なお、較正暦年代値は¹⁴C年代値に対

応する較正曲線上の暦年代値であり、眞の年代である可能性が最も高いことを示す。また、 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲は確率分布を用いて算出した暦年代範囲であり、その範囲内に眞の年代が入る可能性が高いことを示す。 1σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、眞の年代が入る確率が68%であることを示す。 1σ 暦年代範囲のProbabilityは、68%のうちで、さらに特定の 1σ 暦年代範囲に入る確率を示す。同様に、 2σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差の2倍（ $\pm 2\sigma$ ）に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、眞の年代が入る確率が95%であることを示す。 2σ 暦年代範囲のProbabilityは、95%のうちで、さらに特定の 2σ 暦年代範囲に入る確率を示す。

較正曲線は ^{14}C 濃度の変動のためデコボコしており、そのため ^{14}C 年代値に対応する暦年代値、または ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲が複数存在する場合があるが、較正暦年代値はいずれも等しく眞の年代である可能性があり、 1σ 暦年代範囲はいずれも68%、 2σ 暦年代範囲はいずれも95%の確率で、さらにProbabilityに示された確率で眞の年代が入る。

暦年代較正是約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては較正暦年代値を*****またはModernと表記し、 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲を*****と表記する。また、cal AD1955*は核実験後の年代を指し、Modernを意味する。ただし、一万年以前のデータはまだ不完全であるため注意する必要がある。

第4表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定方法)	試料データ	$\delta^{14}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	較正暦年代		
				較正暦年代値	1σ 暦年代範囲P (Probability)	2σ 暦年代範囲 (Probability)
PLD-932 (AMS)	炭化物	-27.0	9455 ± 40	cal BC 8740	cal BC 8795 - 8690 (79.3%)	cal BC 8820 - 8610 (85.2%)
	E100SW 03				cal BC 8665 - 8645 (14.0%)	
PLD-933 (AMS)	炭化物	-27.0	9445 ± 40	cal BC 8740	cal BC 8785 - 8760 (16.9%)	cal BC 8810 - 8605 (90.4%)
	E101E 03 (1650)			cal BC 8700	cal BC 8750 - 8685 (56.2%)	
				cal BC 8695	cal BC 8665 - 8630 (26.9%)	
				cal BC 8655		
PLD-934 (AMS)	炭化物	-27.9	9470 ± 40	cal BC 8745	cal BC 8800 - 8720 (58.4%)	cal BC 9115 - 9005 (24.9%)
	E102 03 (1538)				cal BC 8710 - 8690 (15.2%)	cal BC 8835 - 8630 (73.0%)

備考

ModernはAD1,950年以降の新しい年代を指す。yrBPはAD1,950年から過去へ遡った年代を意味する。calは較正した暦年代を意味し、実年代との混同を防ぐためにつけられる。また、Probabilityが10%未満の 1σ 年代範囲および 2σ 年代範囲については記載を省略した。

引用文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.
 Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program. Radiocarbon, 35, p.215-230.

第6章 まとめと考察

今回の調査を5つの観点からまとめ、若干の考察を行いたい。

1 縄文時代早期の住居跡について

富田清友遺跡では、今回の調査で縄文時代早期の竪穴住居跡を2軒検出した。住居跡に切り合いでみられ、平面形全体を確認できなかったものの共通する形態が確認できた。

①壁面の立ち上がりについて

遺構の上面が削平を受けているが壁面の立ち上がりをみると第1号竪穴住居跡が40~46度、第2号竪穴住居跡が40~51度である。壁面は比較的緩やかな立ち上がりである。

②竪穴住居跡の屋根の高さについて

第4章で述べたように第1号竪穴住居跡は中央の掘り込みの外周に柱を立て覆いをかぶせる構造であった。外周の柱穴を検討した結果、明らかに住居跡の中心に向かって斜め方向に柱穴が掘られているのを確認できたのは3基で、その交点を高さと考え、第62図の方法で高さを算出すると床面から約3.3~3.7mとなる。また、第2号竪穴住居跡は、中央の掘り込みの中に柱穴を検出した。柱穴が中心に向かって斜めに掘られているものが2基確認でき、同様の計算を行うと約3.8mとなる。

柱穴の一部の値から高さを算出する方法は、柱穴の掘り込みが10cm程度の浅いものが多い本遺跡の場合データの精度は劣るもの、両住居跡とも平面規模に比して、やや不安定な構造であったことが推測される。

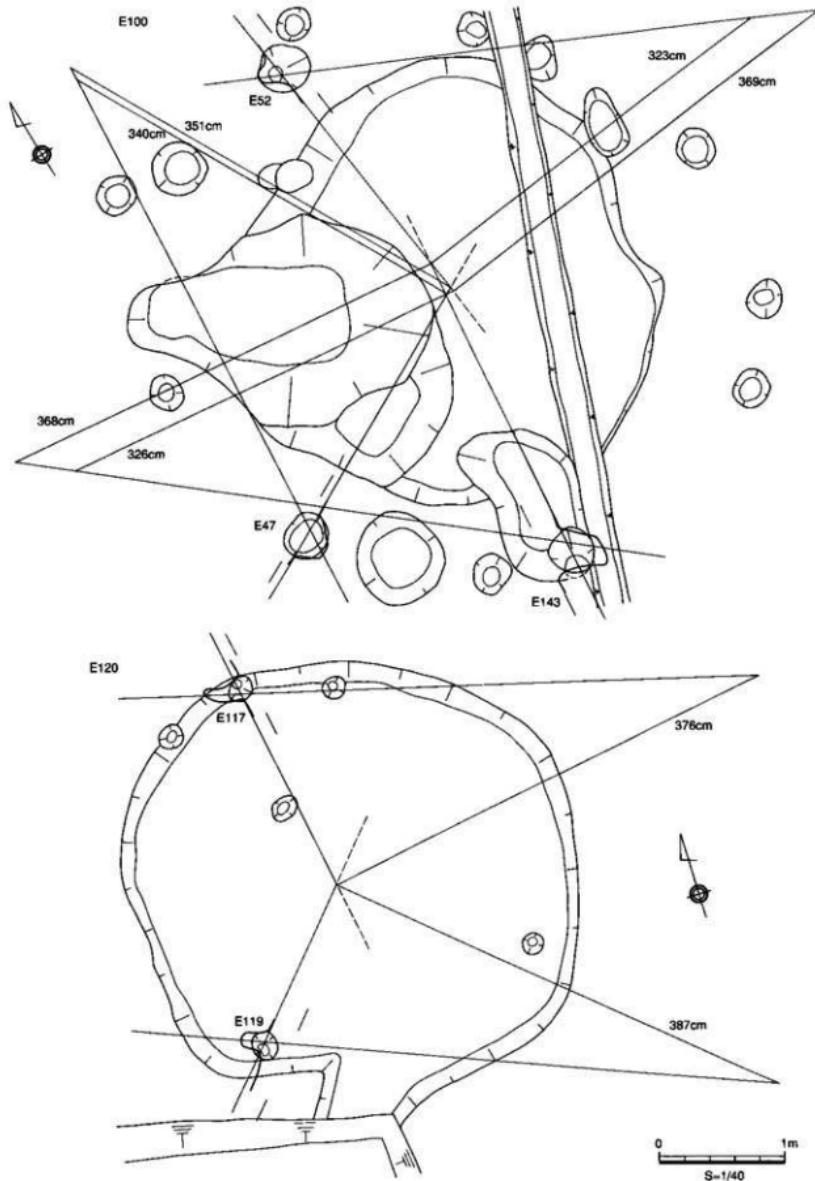
2 縄文早期の煙道付炉穴について

①煙道付炉穴の煙道の方向について

確認された煙道付炉穴6基のうち、煙道は5基が西側に設けられていた。煙道付炉穴は三重県の鴻ノ木遺跡の例のように一つの穴から放射状にいくつも掘る方法ではなく、方向が西と南にはほぼ限られていることは、何らかの意図に基づくものと推測される。火を焚く際に、重要な要素の一つが風の向きである。今回の発掘調査の際、現場事務所付近で風向きを確認したが、7月から11月の間は、北東から南西に向かって弱い風が吹くことが多かった。1年を通しての観測ではないため、時期により風向きが変化することもあり得るが、夏から秋にかけてはこの方向が最も煙道付炉穴を使うのに適していたことが推測される。

②煙道付炉穴の構造と規模について

煙道付炉穴のうち煙道部の天井が残っていたE102は、鴻ノ木遺跡で確認されたと同様扁平な川原石が煙道部に置かれ、その付近は長軸0.48m短軸0.24mの楕円状の煙道部となっている。また煙出しはやや崩落しているため大きくなっていることが推測されるが、長軸0.60m短軸0.50mの楕円形となっている。遺構は足場から煙出しまで約2.80mでやや焚き口左側が広くなっている。E101の煙道付炉穴群は切り合いでみられ、推定による長さとなるがSF2の煙出し部が搅乱により確認できないもののほかは約2.2~2.8mの規模である。鴻ノ木遺跡で指摘された比較的長い煙道付炉穴の方が古い様相を示すという点からみると、煙道付炉穴の初期の炉穴群であったことが推測される^(註1)。



第62図 豊穴住居跡の屋根の高さ推定図

本遺跡の場合、扁平な石が被熱による剥離を受け、煙道部側壁面や石の周辺にも赤色硬化面がみられる事から、火を使う際に置かれていたことがうかがわれる。どの煙道付炉穴も焚き口部分は両開壁上部が庇状となっている。またSF2・SF5など足場は焚き口に比べ5~10cm高く作られている。これらは熱効率を高めるための工夫と考えられる。

③煙道付炉穴の時期について

第5章第1節の分析にあるように煙道付炉穴出土の炭化物を基に分析を行い約9,500年前の遺構であることを推定した。最下層の炭を数片ずつ用いて分析を行ったことから誤差も少ないと考えられる。

今回の調査により、自然の理にかなった煙道付炉穴の構築方法が明確にされた。風を考慮に入れ、熱効率や作業のしやすさを考えて作られていたのである。また、関市神野遺跡で指摘された焚き口付近の赤色硬化面の中に一部空白部分が見られた理由が解明された。今回の調査で据えられていた石がそれを物語っていたのである。すなわち神野遺跡ではE102に残っていた様な石が抜き取られ赤色硬化面が一部空白部分となっていたと考えられる。また、2mを越える今回の煙道付炉穴群は炭化物の分析と合わせ、鴻ノ木遺跡で指摘されているように比較的長い規模のものであり、初期の炉穴群であることが確認されたのである。

3 穴住居跡・煙道付炉穴出土の縄文土器について

今回の調査によって145点の縄文土器が出土した。その内142点が遺構内から出土した。今回出土した縄文土器の98.6%が縄文早期の土器で2点のみ中期の遺物である。本遺跡の早期の土器の特徴は次のようにある。

器形 ①口縁部がやや外反し、口唇部には胴部の施文で使われた工具により施文が行われている。

②口縁部の出土したものは少ないものの、土器の器高の高い、口径の大きいものほど外反が強くなっている。

胎土 ③胎土には白い長石を多く含んでいる。

色調 ④焼成による色調はにぶい黄橙～にぶい褐色が多く別個体でありながら色調が似たものが多い。

文様 ⑤口唇部、口縁部外面、頸部、胴部に分けて施文を行っている。

⑥2~3種類の異種施文原体を用いて施文を行っている。

⑦施文は密接して施文されている。

⑧鴻ノ木遺跡や鐘突遺跡などに比べ、施文の粒が細かい。

⑨刺突施文を除いて、施文は綫方向の施文を原則として行われている。

⑩ネガティブな押型土器と同じ層位から、表裏縄文土器やポジティブな押型土器が出土した。

これらのことから、本遺跡の縄文土器はいわゆる「大川a式土器」に似た特徴を持っている。ただし、粒の大きさの違いなど若干の在地色が見られる。またE102の単独で作られた煙道付炉穴から出土した縄文土器は口縁部の外反が強く古い様相を示し、いわゆる「大鼻式土器」に似た特徴を示す。

また、今回の調査で縄文時代の遺構は、中世の遺構に一部切られているのみで、長い時期に亘って集落として営まれた遺跡とは考えにくい。そのような中で表裏縄文土器、撲糸文土器（の可能性のある土器）、ポジティブな押型文土器が、出土していることから、他地域で前後関係はあるものの、本

遺跡では並行して使われていた可能性がある。

また、E101-Aの土器に顕著に現れているものであるが、土器の断面を見ると右の写真に見られるように土器の表面がほぼ均一に剥離するものが多く見られる。これは以下の土器の制作方法との関連性が考えられる。

- ①濡れた土で輪積みにより土器の形を作る。
- ②(その後半乾きの状態になったところで)乾いた土の上から濡れた土で土器の表面を覆う。
- ③棒状工具で濡れた土の上から施文を行う。
- ④の段階で、棒状工具で土器の表面を押圧することにより、乾いた土と濡れた土の間に空気が抜け二つの土がなじむ。これにより、野焼きの際に空気が残り膨張し土器が割れる失敗を防いでいる。

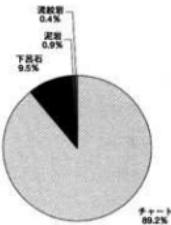


4 繩文時代の石器について

①剥片石器について

今回の調査で出土した剥片石器のうち縄文時代の遺構が確認されたE区の剥片石器の石材は第63図、第5表の通りである。他の地区と合わせた第13図と比べチャートの割合が高い。

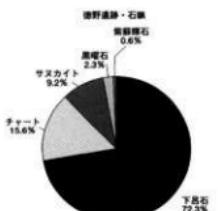
他の遺跡との比較として、本遺跡とほぼ飛騨川から同じような距離に位置する可見市下恵土の縄文時代中期の遺跡である徳野遺跡と比べてみると。飛騨川周辺は下呂町湯ヶ峰から崩落した下呂石が手に入りやすい地域である。報告書を基に石錆で比較をしてみると第64図、第6表のようになる。チャートと下呂石の割合が全く反対になっている。本遺跡で確認された石錆数は少ないものの剥片石器でもチャートの割合が高く、縄文時代早期の人々はチャートを敢えて選択して使っていることがわかる。



第63図 E区の剥片石器の石材組成

第5表 E区剥片石器石材組成集計表

石材名	剥片数(点)	質量(g重)
チャート	207	2056.5
下呂石	22	67.3
ミズモト岩	2	350.8
流紋岩	1	13.9
合計	232	2488.5



第64図 石錆の石材組成の比較

第6表 石錆の石材組成比較表

石材名	徳野遺跡	富田清友遺跡
下呂石	125	1
チャート	27	3
サスカイト	16	1
黒曜石	4	
紫蘇輝石	1	

② 磨石器について

今回の調査で磨石A類のいわゆる「特殊磨石」と呼ばれる磨石器が多く出土した。台石も合わせて確認された。磨石や台石には敲打痕が残っているものもある。ドングリなどの堅果類なども食料としていたことが推測され、この遺跡の周辺にも広葉樹林帯がみられたことが推測される。

また、柵の湖遺跡出土の扁平砥石と同様の平板状の砥石が煙道付炉穴から5点出土した。砥石の出土から今回の調査では確認されなかったものの、研磨された石器の存在が推測される。

5 中世の遺構と遺物

今回の調査で最も多く出土したのは中世の白瓷系陶器であり、特にC区では竪穴状遺構や掘立柱建物跡など多くの遺構を検出した。遺構は切り合い関係にあるものや調査区外へ広がっている遺構もあり、全貌はつかめていないものの、D区の盛土状遺構を境にして集落が展開している様相が見えてきた。D区には盛土状遺構がみられ、その西側には自然流路が流れしており、C区は水の便の良い微高地となっており住みやすい場所であったことがうかがわれる。

白瓷系陶器は藤沢編年の第5型式以降のものから第11型式まで出土している。この時期の人々は基本的に土地利用の形態は変わらず、同じ場所で建て替えなどを併行しながら生活していたのである。また、C区の中世遺構からは凸帯付瓶や盤などが出土した。これらの遺物は一般的な集落で使われるものとは考えにくいものである。これらの遺物の出土から、付近には祭祀を行う特殊な施設がみられるか、または寺院が存在することなどが想定される。

結びにかえて

今回の調査によって美濃地方において初めて、縄文時代早期の集落跡を確認し、しかもほとんど他の時代との切り合いがない状態で検出した。縄文時代早期の竪穴住居跡は吉城郡国府町の宮ノ下遺跡や同郡古川町の沢遺跡、益田郡下呂町の上ヶ平遺跡など飛騨では数例確認されているものの美濃地方では初の確認例となった。煙道付炉穴の遺構は、閔市神野遺跡や塚原遺跡、美濃市の波来川北遺跡、大野郡丹生川村西田遺跡の4遺跡しか類例がなく、5例目の調査事例である。遺構内の床面直上から縄文土器や剥片石器、磨石などが多く出土し、遺構と遺物のセット関係が明確な今回の富田清友遺跡の事例は早期の生活内容を探る上で好資料といえよう。竪穴住居跡と煙道付炉穴の数量関係、磨石の数量など一つの集団が使う単位などを考える意味での貴重な事例となった。縄文時代早期の浅い状の竪穴住居跡や柱穴の斜めに掘り込まれた構造・推定の屋根の高さなど今後の比較資料として役立てば幸いである。

(注1) 滝ノ木遺跡報告によれば、滝ノ木道路の煙道付炉穴は新しい時期のもの（滝ノ木B式）は1.0～1.8mと小型化する傾向にあると指摘されている。

参考文献

- 赤坂次郎 1992 「山中遺跡」 財団法人愛知県埋蔵文化センター
- 会田進 1997 「中部山岳地方の押型文文化の様相」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—』 手塚山考古研究所
- 小林義典 1999 「遺構研究畠穴」『縄文時代文化研究の100年』(『縄文時代』第10号) 縄文時代文化研究会
- 佐野康雄 1995 「飛瀬・底津遺跡」 財団法人岐阜県文化財保護センター
- 篠原英政・古田英敏 1985 「神野遺跡」 関市教育委員会
- 下村登良男・奥義次 1981 「鍊突遺跡発掘調査報告書」 松阪市教育委員会
- 谷口和人ほか 1997 「西田遺跡」 財団法人岐阜県文化財保護センター
- 田村陽一ほか 1998 「鴻ノ木遺跡発掘調査報告書」 三重県埋蔵文化財センター
- 長瀬治義 1998 「他野遺跡(A地点)」 可児市教育委員会
- 長野県岡谷市教育委員会 2000 「桃沢遺跡」
- 成瀬正勝ほか 2000 「砂行遺跡」 財団法人岐阜県文化財保護センター
- 原寛・紅村弘 1974 「岐阜県恵那郡坂下町桃の湖遺跡発掘調査報告書」 坂下町教育委員会
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3 三重県埋蔵文化財センター
- 水谷敬ほか 1980 「美濃加茂市史」 通史編 美濃加茂市教育委員会
- 美濃加茂市教育委員会 1993 「土の中からのメッセージ～美濃加茂の遺跡」(美濃加茂ふるさとファイルNo.4)
- 宮本長二郎 2001 「原始・古代住居の復元」『日本の美術5』 至文堂
- 村瀬泰啓 1999 「諸洞遺跡・大坪遺跡」 財団法人岐阜県文化財保護センター
- 矢野健一 1993 「押型文上器の起源と変遷に関する新視点」『研究紀要』2 三重県埋蔵文化財センター
- 山田猛ほか 1994 「大鼻遺跡」 三重県埋蔵文化財センター
- 吉田英敏・篠原英政 1989 「塙原遺跡・塙原古墳群」 関市教育委員会
- 渡辺博人 1995 「為岡遺跡発掘調査報告書」 美濃加茂市教育委員会

第7表 造構計測表(1)

測定名	測定番号	地 区	種 別	尺 程(cm)		通溝地上 上部 + 下部	切り合い溝底 切る>切られる	出土遺物	備 考
				直幅	仰幅				
A1	26C	ピット	26	20	39	褐色粘土質土			
A2	26C	ピット	18	14	7	褐色粘土質土			
A3	26D	ピット	17	16	21	褐色粘土質土			
A4	26D	ピット	12	12	13	褐色粘土質土			
A5	26D	ピット	12	13	13	褐色粘土質土			
A6	27D	ピット	24	22	19	褐色粘土質土			
A7	28E	ピット	18	14	9	褐色粘土質土			
A8	28E	ピット	16	16	12	褐色粘土質土			
A9	28E	ピット	75	42	65	褐色粘土質土			
A10	28F	ピット	24	22	19	褐色粘土質土			
A11	28F	ピット	17	12	10	褐色粘土質土			
A12	28F	ピット	14	11	20	褐色粘土質土			
A13	27E, 27F	ピット	17	12	30	褐色粘土質土			
A14	28E	ピット	36	34	25	褐色粘土質土			
A15	27H	ピット	24	22	12	褐色粘土質土			
A16	27H	ピット	25	24	2	褐色粘土質土			
A17	27H	ピット	27	22	14	褐色粘土質土			
A18	26E	ピット	14	14	10	褐色粘土質土			
A19	27H	ピット	14	13	27	褐色粘土質土			
A20	28E	木柱	98	86	83	褐色粘土質土→褐色粘土質土			
A21	28D	ピット	66	35	36	褐色粘土質土			
A22	27D	ピット	22	18	18	褐色粘土質土			
A23	27H	ピット	18	18	20	褐色粘土質土			
A24	27E, 27D, 28C, 28D	上根	224	146	22	褐色粘土質土			
B1	P1	23I	ピット	28	28	18	褐色粘土質土		鉄鋸あり
B2	23I	ピット	25	18	6	褐色粘土質土			
B3	P2	23I	ピット	22	23	28	褐色粘土質土		鉄鋸あり
B4	24I	ピット	16	15	18	褐色粘土質土			
B5	24I	ピット	26	18	6	褐色粘土質土			
B6	24I	ピット	17	16	8	褐色粘土質土			
B7	24I	ピット	26	19	8	褐色粘土質土			
B8	24I	ピット	48	46	24	褐色粘土質土			
B9	24I	ピット	33	32	25	褐色粘土質土			
B10	S83	24I, 25I	雙穴式櫛脚	348	49	25	褐色粘土質土→褐色粘土質土と褐 色粘土質土の混じり上	主斜面 19, 隣底面 2	
B11	25I	ピット	36	26	30	褐色粘土質土	> B28		
B12	24I	ピット	25	28	18	褐色粘土質土			
B13	24I	ピット	24	23	6	褐色粘土質土			
B14	24I	ピット	68	58	35	褐色粘土質土			
B15	24I	ピット	34	39	29	褐色粘土質土			
B16	24I, 25I	ピット	21	26	8	褐色粘土質土			
B17	24I	ピット	26	24	24	褐色粘土質土			
B18	24I, 25I	ピット	23	19	6	褐色粘土質土	土堆層 1, 白塗系陶器 1		
B19	25I	ピット	25	26	7	褐色粘土質土	鉄鋸 1		
B20	25I	ピット	18	18	20	褐色粘土質土			
B21	25I	ピット	38	33	15	褐色粘土質土			
B22	25I	ピット	23	18	9	褐色粘土質土			
B23	25I, 26I	ピット	17	16	14	褐色粘土質土			
B24	25I	ピット	25	20	8	褐色粘土質土			
B25	25I	ピット	77	60	12	褐色粘土質土	> B28		
B26	25I	ピット	33	22	8	褐色粘土質土			
B27	25I	ピット	24	34	7	褐色粘土質土	> B28		
B28	H72	25I	壁穴式櫛脚	249	236	18	褐色粘土質土	C, B11, N23, B27, B29	上斜面 14, 壁穴式櫛脚 1, 近井櫛脚 1, 打削石 1, 褐色粘土を切る
B29	25I	ピット	36	29	34	褐色粘土質土	> B28		
B30	S72	26I	土坑	176	94	38	褐色粘土質土		
B31	26I	ピット	46	46	24	褐色粘土質土			
B32	26I	ピット	24	22	19	褐色粘土質土			
B33	26I	ピット	23	22	22	褐色粘土質土			
B34	26I	ピット	20	14	19	褐色粘土質土			
C1	21M	ピット	23	20	19	褐色粘土質土			
C2	21M	ピット	19	12	8	褐色粘土質土	> C2		
C3	21M	ピット	24	22	16	褐色粘土質土	< C1		
C4	21M	ピット	43	36	14	褐色粘土質土			
C5	21M, 22M	ピット	22	20	11	褐色粘土質土	> C6	白塗系陶器 1	
C6	22M	ピット	33	32	15	褐色粘土質土	< C5	白塗系陶器 1	
C7	21M	ピット	26	22	33	褐色粘土質土			
C8	S83	22K, 22M	壁穴式櫛脚	178	154	279	褐色粘土質土→褐色粘土質土	標本器 1, 白塗 2, 白塗系陶器 3, 青色 1, 古伊賀櫛脚 1, フリイク 1	
C9	23I	ピット	23	18	6	褐色粘土質土			
C10	23I	ピット	24	23	10	褐色粘土質土			
C11	23I	ピット	22	18	15	褐色粘土質土			
C12	23I	ピット	54	44	26	褐色粘土質土	< C244		
C13	22M	ピット	31	28	18	褐色粘土質土			
C14	22M	ピット	31	28	26	褐色粘土質土			

第8表 遺構計測表(2)

遺構名 番号 用紙順位	地 区	種 別	規 格 (cm)			遺構用七 上部→下部	切り合ひ面積 せる>切られる	古土遺物	備 考	
			直幅	延幅	深さ					
C15	22m, 220	ピット	25	22	11	黒褐色粘質土				
C16	22L	ピット	56	54	41	褐色粘質土			上部器 1	
C17	23L	ピット	28	26	9	褐色粘質土	< C18			
C18	23L	ピット	34	32	8	褐色粘質土	> C17			
C19	23L	ピット	26	20	7	褐色粘質土				
C20	23L	土坑	98	78	22	黒褐色粘質土			上部器 2, 深部器 2, 古土系 陶器 2	
C21	22M, 23M	ピット	65	64	44	褐色粘質土	> C20			
C22	23L	ピット	51	40	9	褐色粘質土				
C23	23L	ピット	64	52	48	褐色粘質土+ 黄褐色粘質土 + 淡褐色粘質土			古土系陶器 2	
C24	SK8	22L, 22M, 23L, 23M	土坑	125	86	17	褐色粘質土			古土系陶器 3
C25	22L	ピット	18	16	8	褐色粘質土				
C26	22M	ピット	40	32	15	褐色粘質土			土器器 2	
C27	22M	ピット	32	26	9	褐色粘質土				
C28	22M	ピット	44	35	8	褐色粘質土				
C29	SK9	22M, 23M	土坑	160	86	24	褐色粘質土	< C21		古土系陶器 1, 古土系陶器 1
C30	22M	ピット	26	25	16	褐色粘質土				
C31	22M	ピット	47	36	17	褐色粘質土			古土系陶器 2	
C32	22M	ピット	43	35	6	褐色粘質土			上部器 1	
C33	22M	土坑	178	83	30	褐色粘質土+ 黑褐色粘質土 + 淡褐色粘質土				
C34	22M	ピット	34	18	11	褐色粘質土				
C35	22M	ピット	24	20	13	褐色粘質土				
C36	22M	ピット	41	34	22	褐色粘質土				
C37	22M	ピット	46	39	13	褐色粘質土				
C38	22M	ピット	31	18	21	褐色粘質土				
C39	22M	ピット	20	10	19	褐色粘質土				
C40	21L, 23M	ピット	16	13	13	褐色粘質土				
C41	21L	ピット	14	14	7	褐色粘質土				
C42	22L	ピット	28	23	8	褐色粘質土				
C43	22L	ピット	22	22	9	褐色粘質土				
C44	22L	ピット	20	16	11	褐色粘質土				
C45	22L	ピット	33	29	12	褐色粘質土				
C46	24M, 25M	ピット	50	44	23	褐色粘質土			古土系陶器 1	
C47	SK10	22M	土坑	105	79	10	褐色粘質土			上部器 1, 古土系陶器 1
C48	22M	ピット	28	25	8	褐色粘質土				
C49	22M	ピット	30	27	39	褐色粘質土				
C50	22M	ピット	23	21	13	褐色粘質土				
C51	24L, 24M	ピット	29	26	12	褐色粘質土				
C52	24L	ピット	30	20	24	褐色粘質土				
C53	24L	ピット	34	11	25	褐色粘質土				
C54	23L, 24L	ピット	19	18	15	褐色粘質土				
C55	23L	ピット	22	20	48	褐色粘質土				
C56	23L	ピット	26	25	18	褐色粘質土				
C57	23L	ピット	35	32	20	褐色粘質土				
C58	P10	24M	ピット	38	26	14	褐色粘質土			古土系陶器 1
C59	24M, 25M	ピット	31	28	12	褐色粘質土				
C60	24L	ピット	30	23	8	褐色粘質土	> C59			
C61	24L	ピット	44	42	28	褐色粘質土	< C52			
C62	24L, 24M	ピット	38	31	13	褐色粘質土	> C59			
C63	24L	ピット	22	18	9	褐色粘質土				
C64	P11	23L	ピット	36	30	18	褐色粘質土			古土系陶器 1
C65	P12	24M	土坑	102	49	19	褐色粘質土	< C50		古土系陶器 1
C66	24M	ピット	25	28	11	褐色粘質土				
C67	24M	ピット	36	33	5	褐色粘質土				
C68	24M	ピット	24	20	7	褐色粘質土				
C69	24M	ピット	23	21	8	褐色粘質土				
C70	24M	ピット	70	57	24	褐色粘質土				
C71	22N	ピット	32	16	8	褐色粘質土				
C72	24M	ピット	24	18	5	褐色粘質土	< C65			
C73	24M	ピット	20	30	6	褐色粘質土				
C74	23L, 23M	ピット	30	28	16	褐色粘質土				
C75	23M	ピット	54	46	24	褐色粘質土				
C76	23M	ピット	26	25	19	褐色粘質土				
C77	23L, 23M	ピット	67	66	14	褐色粘質土				
C78	23M	ピット	46	45	24	褐色粘質土				
C79	23M	ピット	38	24	47	褐色粘質土				
C80	23M	ピット	22	20	10	褐色粘質土				
C81	23M	ピット	26	22	6	褐色粘質土				
C82	23M	ピット	20	18	9	褐色粘質土				
C83	24M	ピット	20	20	10	褐色粘質土				
C84	24M	ピット	46	22	46	褐色粘質土				
C85	24M	ピット	22	22	12	褐色粘質土				
C86	24M	ピット	48	45	20	褐色粘質土				
C87	24M	ピット	44	42	23	褐色粘質土			上部器 1, 古土系陶器 1	

第9表 造構計測表(3)

波段名	番号 測定場所	地 区	種 別	尺 寸 (cm)	測 定 所 在 地	運 搬 所 上 陸 所	切 り 合 い 関 係 物 名 切 ら れ る	主 た 道 物	圖 考
C88	24M	上坡	直輪	60	70	52	褐色色粉質土		
C89	24M	ピット		22	19	8	褐色色粉質土		
C90	23M	ピット		30	24	12	褐色色粉質土		
C91	23M	ピット		28	26	8	褐色色粉質土		
C92	23M	ピット		22	19	10	褐色色粉質土		
C93	23M	ピット		26	26	17	褐色色粉質土		
C94	22D	鐵化鐵礦		62	24	3	褐褐色色粉質土		
C95	23M	ピット		78	70	29	褐色色粉質土	上田器1	
C96	23M	ピット		26	23	11	褐色色粉質土		
C97	23M	ピット		37	34	6	褐色色粉質土		
C98	22M, 23M	ピット		24	22	8	褐色色粉質土		
C99	22M, 23M	ピット		32	25	24	褐色色粉質土		
C100	22M	ピット		26	19	6	褐色色粉質土		
C101	22M, 23M	ピット		28	26	14	褐色色粉質土		
C102	23M	ピット		48	46	16	褐色色粉質土		
C103	23M	ピット		32	29	18	褐色色粉質土		
C104	22M	ピット		28	25	12	褐色色粉質土		
C105	22M	ピット		39	30	18	褐色色粉質土		
C106	22M	ピット		24	32	14	褐色色粉質土	< C107	
C107	22M	ピット		46	36	14	褐色色粉質土	> C106	
C108	22M	ピット		30	22	7	褐色色粉質土		
C109	23M	ピット		35	48	10	褐色色粉質土		
C110	24M	ピット		33	29	12	褐色色粉質土		
C111	24M	ピット		34	22	9	褐色色粉質土		
C112	22M	ピット		46	40	58	褐色色粉質土・褐色色粉質土	> C113	
C113	22M	ピット		18	11	10	褐色色粉質土	< C112	
C114	22M	ピット		28	25	11	褐色色粉質土		
C115	SM2	21M	ピット	73	66	46	褐色色粉質土	上田器1, 古河系南呂4	柱根あり
C116	21M	ピット		33	28	14	褐色色粉質土		
C117	20M, 20D, 21M, 21D	ピット		52	48	16	豆鉢色粉質土		
C118	21D	ピット		32	26	8	褐色色粉質土		
C119	21D	ピット		24	21	10	褐色色粉質土		
C120	21D	上坡		80	56	36	褐色色粉質土	> C121, C122	
C121	21D	土壤		90	32	32	褐色色粉質土	< C120, > C122	十田器13
C122	21D	ピット		34	30	12	褐色色粉質土	< C120, C121	
C123	P9	21D	ピット	24	23	14	褐色色粉質土		特徴あり
C124	21D	ピット		26	24	9	褐色色粉質土		
C125	21D	ピット		16	12	8	褐色色粉質土		
C126	20D	ピット		22	20	8	褐色色粉質土		
C127	SM2	21D	ピット	48	42	24	褐色色粉質土・黑色色粉質土	土田器5, 口沢系南呂6	
C128	21D	ピット		42	34	9	褐色色粉質土	十田器1	
C129	21D	ピット		24	27	14	褐色色粉質土		
C130	21D	ピット		32	24	6	褐色色粉質土	< C131	古河系南呂1
C131	21D	ピット		39	28	22	褐色色粉質土	> C130	
C132	21D	ピット		24	24	16	褐色色粉質土		
C133	21D	ピット		26	22	24	褐色色粉質土		
C134	21D, 22D	ピット		40	28	32	褐色色粉質土		
C135	21D	ピット		18	16	20	褐色色粉質土	土田器1, フレイタ1	
C136	SM2	21M	ピット	84	78	46	褐色色粉質土・褐色色粉質土	土田器5, 口沢系南呂6	柱根あり
C137	21M	ピット		30	24	6	褐色色粉質土		
C138	22M	ピット		22	20	6	褐色色粉質土		
C139	22M	ピット		24	22	12	褐色色粉質土		
C140	22M	ピット		33	18	11	褐色色粉質土		
C141	ST3	22M	多穴状遺構	290	232	20	褐色色粉質土・褐色色粉質土	土田器26, 亀田器1, 古河系南呂3, 古河系南呂11, 古河系南呂14, 大塚2, 花山城遺跡1, 桃人陶器1, 行原石塚1, 猪石1, フレイタ7	柱根あり
C142	22M	ピット		35	22	16	褐色色粉質土		
C143	21M	ピット		30	24	11	褐色色粉質土		
C144	21M	ピット		34	30	8	褐色色粉質土		
C145	21M	ピット		33	26	12	褐色色粉質土		
C146	22M	ピット		34	17	8	褐色色粉質土		
C147	SM2	21M	ピット	68	58	34	褐色色粉質土・黑色色粉質土	土田器4, 古河系南呂3	特徴あり
C148	21M	ピット		44	32	12	褐色色粉質土		
C149	21M	ピット		23	18	4	褐色色粉質土		
C150	P9	21M	ピット	30	25	12	褐色色粉質土		柱根あり
C151	21M	ピット		34	18	13	褐色色粉質土		
C152	21M	ピット		32	26	8	褐色色粉質土	上田器2	
C153	21M	ピット		24	22	12	褐色色粉質土		
C154	21M	ピット		32	30	6	褐色色粉質土	< C155	
C155	21M	ピット		36	34	14	褐色色粉質土	> C154	
C156	21M	ピット		69	52	16	褐色色粉質土		
C157	21M	ピット		52	42	22	褐色色粉質土		
C158	21M, 22M	ピット		44	40	20	褐色色粉質土		
C159	21M	ピット		40	32	18	褐色色粉質土		

第10表 造構計測表(4)

測量名	測定部位 用範囲分	測定区	測定	基準 (cm)			造構理上 上部 - 下部	切り合い-開閉 切る>切られる	出土物	備考	
				高さ	幅幅	底さ					
C160	23N	ピット	20	16	2	黒褐色粘質土	> C162				
C161	23N	ピット	26	26	16	黒褐色粘質土	< C164			柱板あり	
C162	P5	ピット	44	40	16	黒褐色粘質土					
C163	23N	ピット	34	30	16	黒褐色粘質土					
C164	23N	ピット	27	22	20	黒褐色粘質土					
C165	22N	ピット	32	32	10	黒褐色粘質土	> C71				
C166	22N	ピット	39	28	8	黒褐色粘質土					
C167	P13	ピット	50	36	20	黒褐色粘質土			内壁系開削2		
C168	22N	ピット	26	29	8	黒褐色粘質土					
C169	22N	ピット	50	46	16	黒褐色粘質土					
C170	22N	ピット	34	34	16	黒褐色粘質土	< C235				
C171	22N, 23N	ピット	36	26	29	黒褐色粘質土					
C172	22N	ピット	24	22	18	黒褐色粘質土					
C173	23N	ピット	36	28	18	黒褐色粘質土					
C174	23N	ピット	24	22	26	黒褐色粘質土					
C175	23N	ピット	32	28	12	黒褐色粘質土					
C176	23N	ピット	32	30	14	黒褐色粘質土					
C177	23N	ピット	32	28	26	黒褐色粘質土			内壁系開削1		
C178	23N	ピット	34	28	20	黒褐色粘質土					
C179	23N	ピット	24	22	10	黒褐色粘質土					
C180	23N	ピット	28	22	6	黒褐色粘質土					
C181	23N, 23D	ピット	56	40	26	黒褐色粘質土	> C182				
C182	23N, 23D	ピット	50	34	6	黒褐色粘質土	< C181				
C183	23D	ピット	40	36	18	黒褐色粘質土	< C245, C285				
C184	23D	ピット	20	18	4	黒褐色粘質土					
C185	Pb	ピット	34	30	30	黒褐色粘質土	> C186			柱板あり	
C186	23D	ピット	36	30	30	黒褐色粘質土	< C185				
C187	23D	ピット	24	22	16	黒褐色粘質土					
C188	SII	23D	ピット	89	72	50	黒褐色粘質土	> C225		上開削1, 内壁系開削8, フレイク1	
C189	23D	ピット	22	29	7	黒褐色粘質土					
C190	23D	ピット	20	16	12	黒褐色粘質土					
C191	23N, 23D	ピット	34	30	30	黒褐色粘質土					
C192	P7	23D	ピット	60	42	22	黒褐色粘質土			柱板あり	
C193	23D	ピット	24	20	18	黒褐色粘質土					
C194	23D	ピット	18	16	8	黒褐色粘質土					
C195	24D	ピット	18	16	10	黒褐色粘質土					
C196	24D	ピット	22	22	18	黒褐色粘質土					
C197	23D, 24D	ピット	26	25	12	黒褐色粘質土					
C198	24D	ピット	28	28	16	黒褐色粘質土					
C199	24D	ピット	22	22	20	黒褐色粘質土					
C200	23D	ピット	24	20	6	黒褐色粘質土					
C201	23D	ピット	26	22	20	黒褐色粘質土					
C202	SII	23D	上坑	112	90	6	黒褐色粘質土		土場層2, 内壁系開削7, フレイク1		
C203	23D	ピット	52	44	30	黒褐色粘質土	> C218				
C204	23P	ピット	28	24	27	黒褐色粘質土					
C205	23P	ピット	52	22	26	黒褐色粘質土					
C206	23D	ピット	22	18	6	黒褐色粘質土					
C207	23D	ピット	38	34	17	黒褐色粘質土					
C208	SII	23D	ピット	64	63	38	黒褐色粘質土				
C209	23D	ピット	18	14	14	湖褐色粘質土					
C210	23D, 23P	上坑	96	52	45	黒褐色粘質土-1-茎葉粘質土					
C211	23D	ピット	20	16	14	黒褐色粘質土					
C212	24D	ピット	30	22	12	黒褐色粘質土					
C213	23D, 24D	ピット	54	34	28	黒褐色粘質土					
C214	23D	ピット	56	40	36	黒褐色粘質土	> C215				
C215	23D	ピット	49	30	28	黒褐色粘質土	< C214				
C216	23D, 23F, 24D, 24P	第六层柱脚	445	311	12	黒褐色粘質土-1-茎葉粘質土	< C230, C245, C249, C250, C256, C259, C261, C265, C266		上開削103, 案内部3, 白色 内壁系開削11, 打築石斧 1, フレイク1		
C217	23P	ピット	22	18	14	黒褐色粘質土	< C218				
C218	P14	23P	30	26	14	黒褐色粘質土	> C217		土場層2, 内壁系開削4		
C219	23D	ピット	26	24	10	黒褐色粘質土					
C220	23P	上坑	104	82	46	黒褐色粘質土			白塗系開削1		
C221	23D	ピット	39	38	14	黒褐色粘質土					
C222	SII	23D, 23D	ピット	70	56	68	黒褐色粘質土	> C228	七面器1, 瓶型器1, 内壁系 開削2		
C223	23N, 23D	ピット	48	46	28	黒褐色粘質土					
C224	ST4	21D, 23N, 23D	穿穴遺構	304	262	19	黒褐色粘質土-1-茎葉粘質土- 黒褐色粘質土	< C287, C288	上開削121, 壁面器1, 白色 内壁系開削303, 占據石 5, 大刀4, 打築石斧3, フ レイク16		
C225	ST5	22D, 23N, 23D	盤状遺構	468	465	34	黒褐色粘質土-1-盤状粘質土	< C288, C222, C286, C271, C277, C282, C283	土場器31, 壁面器6, 内壁2, 内壁系開削1, 占據石 1, 大刀1, 支持器器4, 瓶 人頭器1, 石斧1, 打築石 1, フレイク2		

第 11 表 遺構計測表(5)

遺構名	発掘書 通巻号	施 工	性 質	規 準(cm)			遺構地 上部→下部	切り合い関係 切る>切られる	出土遺物	備 考
				長軸	短軸	厚さ				
C226	280	ピット	24	18	16	黒褐色粘質土				
C227	280	ピット	26	20	14	黒褐色粘質土				
C228	248	ピット	30	28	6	黒褐色粘質土				
C229	220	ピット	26	24	14	黒褐色粘質土				
C230	228	ピット	32	24	8	黒褐色粘質土				
C231	228	ピット	38	30	8	黒褐色粘質土				
C232	228	ピット	22	18	5	黒褐色粘質土				
C233	228	ピット	20	18	7	黒褐色粘質土				
C234	228	ピット	38	25	13	黒褐色粘質土				
C235	228	ピット	32	26	12	黒褐色粘質土	> C170			
C236	228	ピット	34	30	11	黒褐色粘質土				
C237	228	ピット	25	22	5	黒褐色粘質土				
C238	220	ピット	55	44	34	黒褐色粘質土				
C239	220	ピット	57	35	37	黒褐色粘質土	< C238	白金系陶器 4		
C240	220	ピット	62	33	40	黒褐色粘質土	> C183	白金系陶器 2, フレイク I		
C241	220	ピット	60	34	16	黒褐色粘質土				
C242	238	ピット	51	43	18	黒褐色粘質土				
C243	238	ピット	36	32	8	黒褐色粘質土				
C244 SH1	280	ピット	90	43	34	黒褐色粘質土	> C12	白金系陶器 4		
C245	230, 238*	ピット	36	26	6	黒褐色粘質土	> C266	白金系陶器 2		
C246	240	ピット	62	42	4	黒褐色粘質土				
C247	240	ピット	52	22	4	黒褐色粘質土	< C248			
C248	240	ピット	42	40	22	黒褐色粘質土	> C247			
C249	240	ピット	28	20	8	黒褐色粘質土	< C250, > C216			
C250	240	ピット	30	26	34	黒褐色粘質土	> C16, C59	白金系陶器 4		
C251	230	ピット	32	28	33	黒褐色粘質土	> C282			
C252	230, 240	ピット	52	30	18	黒褐色粘質土		土器群 1, 白金系陶器 1		
C253	230, 260	ピット	34	23	8	黒褐色粘質土				
C254	230	ピット	32	20	18	黒褐色粘質土				
C255	240	ピット	39	25	16	黒褐色粘質土				
C256	230	ピット	29	16	16	黒褐色粘質土	> C216			
C257	230	ピット	50	26	16	にじ・黒褐色粘質土				
C258	230	ピット	46	22	2	黒褐色粘質土				
C259	230	ピット	19	12	8	黒褐色粘質土	> C216			
C260	230	ピット	39	30	6	黒褐色粘質土				
C261	230	ピット	50	40	5	黒褐色粘質土				
C262	230	ピット	29	28	34	黒褐色粘質土	< C264	白金系陶器 2, 古墳坪 I		
C263	230, 239*	ピット	48	48	18	黒褐色粘質土	> C264	土塊層 4		
C264	230	ピット	34	32	6	黒褐色粘質土・黒褐色透明白色粘質土 上部にじり	< C263			
C265	230, 239*	ピット	40	34	36	黒褐色粘質土	> C216			
C266 P15	239	ピット	48	26	32	黒褐色粘質土	> C216	白金系陶器 4		
C267	230	ピット	38	34	22	黒褐色粘質土				
C268 SH1	230	ピット	144	46	39	黒褐色粘質土→白色粘質土	> C225			
C269	230	溝状結構	49	46	46	黒褐色粘質土				
C270	230	ピット	40	34	28	黒褐色粘質土	> C271			
C271 SH1	230	ピット	88	74	42	黒褐色粘質土・黒色粘質土	< C270, > C225, C272			
C272	230	ピット	40	26	30	黒褐色粘質土	< C271			
C273	230	ピット	44	36	20	黒褐色粘質土				
C274	230	ピット	25	22	17	黒褐色粘質土	> C275			
C275	230	ピット	20	22	12	黒褐色粘質土	< C274			
C276	238, 290	ピット	28	26	32	黒褐色粘質土				
C277 SH1	230	ピット	89	60	30	黒褐色粘質土	< C276, > C225			
C278	230	ピット	24	24	16	黒褐色粘質土	> C277			
C279 P16	234, 230	ピット	29	26	22	黒褐色粘質土		築壙群 1, 白金系陶器 1		
C280	230, 230	ピット	32	26	7	黒褐色粘質土				
C281	230	ピット	34	20	18	黒褐色粘質土				
C282 SH1	220	ピット	85	84	37	黒褐色粘質土	< C281, > C235	白金系陶器 2, 古墳坪 I		
C283 SH1	220	ピット	82	70	49	黒褐色粘質土	> C235			
C284 P8	220	ピット	26	22	6	黒褐色粘質土				
C285	220	ピット	47	30	22	黒褐色粘質土		土器群 1		
C286	220	ピット	38	33	5	黒褐色粘質土				
C287 SH1	220	ピット	100	94	34	黒褐色粘質土	> C234	白金系陶器 4, 古墳坪陶器 I		
C288	220	ピット	23	22	20	黒褐色粘質土				
C289	220	ピット	32	32	19	黒褐色粘質土				
C290 SH1	220, 230	ピット	70	48	26	黒褐色粘質土	> C224	白金系陶器 1		
C291	220, 230,	ピット	40	39	30	黒褐色粘質土				
C292	220, 230	ピット	26	26	18	黒褐色粘質土		白金系陶器 1		
D1	180	ピット	32	30	17	黒褐色粘質土				
D2	180	ピット	54	49	30	黒褐色粘質土				
D3	180	ピット	32	30	8	黒褐色粘質土				
D4	200, 210	ピット	58	38	38	黒褐色粘質土・褐褐色粘質土				
D5	180	ピット	34	30	12	黒褐色粘質土		土器群 1		
D6	200	ピット	22	22	6	黒褐色粘質土				

第12表 道構計測表(6)

測定名	測定部位 測定地名	地 区	被 別	尺 稿 (cm)			道構尺寸 上部一下等	切り合ひ気体 切る>切られる	出土箇所	備 考
				左輪	右輪	溝さ				
D7	21K	ビット	64	90	22	黒褐色粘質土			土壤器2	
D8	21K	ビット	33	32	6	深褐色粘質土				
D9	21K	ビット	82	66	9	深褐色粘質土				
D10	21K	ビット	38	32	16	深褐色粘質土				
D11	71K	ビット	26	24	13	深褐色粘質土				
D12	20K, 20K	ビット	54	46	17	深褐色粘質土			土壤器1	
D13	71K	ビット	34	29	12	深褐色粘質土				
D14	20K	上坡	126	94	14	深褐色粘質土			土壤器#	
D15	21K, 22N	ビット	35	28	9	深褐色粘質土				
D16	22S	ビット	80	68	9	黑色粘質土				
D17	RM1	20K, 20K, 21S	手状試験機	620	192	90	泥炭質粘質土・黑色粘質土 ・深褐色粘質土→細凹狀質土			生物器4、内空1、白色海 藻付、手標#1、古道2、フ レイク#
E1	48K	ビット	20	16	5	深褐色粘質土				
E2	SK12	48K	北坡	96	92	19	深褐色粘質土			
E3	48K	ビット	29	19	11	深褐色粘質土				
E4	48K	ビット	34	31	6	深褐色粘質土				
E5	48K	ビット	36	36	18	黑色粘質土				
E6	48K	ビット	28	28	14	深褐色粘質土				
E7	48K	ビット	32	24	12	深褐色粘質土				
E8	48K	ビット	32	27	14	深褐色粘質土				
E9	48K	ビット	19	19	9	深褐色粘質土				
E10	48K	ビット	22	22	7	深褐色粘質土				
E11	48K, SK6	ビット	27	20	5	深褐色粘質土				
E12	P17	48K	ビット	24	18	6	深褐色粘質土			大型1
E13	P18	58P	ビット	32	21	22	深褐色粘質土			口鼻孔陶器2、金舟2
E14	58P	ビット	24	22	13	黑色粘質土				
E15	58P	ビット	26	24	13	深褐色粘質土				
E16	58P	ビット	28	43	9	深褐色粘質土	< E17			
E17	48P	ビット	66	54	14	深色粘質土	> E16			
E18	P19	48P	ビット	17	14	4	黑色粘質土			白堀頭陶器1
E19	48P	ビット	22	17	6	深色粘質土				
E20	48P	土壤	166	54	11	黑色粘質土	< E140			
E21	48P	ビット	32	31	17	深褐色粘質土			フレイク2	
E22	48P	ビット	28	22	16	黑色粘質土			フレイク5	
E23	58P	ビット	26	22	13	深褐色粘質土				
E24	58P	ビット	23	21	30	深褐色粘質土				
E25	58P	ビット	20	18	10	深褐色粘質土				
E26	58P	ビット	24	21	9	深褐色粘質土				
E27	58P	ビット	26	20	11	深褐色粘質土				
E28	58P	ビット	34	30	12	深褐色粘質土				
E29	58P	ビット	33	24	9	深褐色粘質土				
E30	58P	ビット	36	36	12	深褐色粘質土				
E31	58P	ビット	29	23	11	深褐色粘質土				
E32	58P	ビット	34	30	36	深褐色粘質土				
E33	58E	ビット	23	18	10	深褐色粘質土				
E34	58E	ビット	24	24	8	深色粘質土				
E35	58E	ビット	39	28	8	深色粘質土				
E36	58E	ビット	22	21	8	深褐色粘質土				
E37	58E	ビット	22	20	8	深褐色粘質土				
E38	58E	ビット	34	22	24	黑色粘質土				
E39	58E	ビット	26	34	13	深褐色粘質土				
E40	58E	ビット	24	22	24	黑色粘質土				
E41	58E	ビット	26	19	7	深褐色粘質土				
E42	58E	ビット	24	24	10	深褐色粘質土				
E43	58E	ビット	24	22	10	深褐色粘質土				
E44	58E, 68E	ビット	30	24	26	深褐色粘質土				
E45	58E	ビット	22	20	12	深褐色粘質土				
E46	58E	ビット	30	28	8	深褐色粘質土				
E47	58D, 68D	ビット	45	34	16	深褐色粘質土				
E48	58D	ビット	30	28	24	深褐色粘質土	> E100			
E49	58D	ビット	28	24	6	深褐色粘質土	> E100			
E50	58D	ビット	28	26	7	深褐色粘質土	> E100			
E51	58D	ビット	44	42	13	灰褐色粘質土				
E52	58D	ビット	44	38	14	灰褐色粘質土				
E53	58D	ビット	24	22	10	深褐色粘質土				
E54	58D	ビット	32	23	6	深褐色粘質土				
E55	58D	ビット	35	33	7	深褐色粘質土				
E56	58D, 58P	ビット	35	16	20	深褐色粘質土				
E57	58E	ビット	35	30	16	深褐色粘質土				
E58	48E, 58E	ビット	21	20	6	黑色粘質土	> E144			
E59	48D	ビット	34	16	9	深褐色粘質土				
E60	48D	ビット	40	40	6	黑色粘質土				
E61	48E	ビット	31	30	9	深褐色粘質土				
E62	48E	ビット	40	35	10	深褐色粘質土				
E63	48E	ビット	46	40	18	深褐色粘質土			フレイク1	

第13表 遺構計測表(7)

遺構名 並び番号	地 区	種 別	尺 厘 (cm)			遺構土 上等→下等	切り合い関係 切る>切られる	正土遺物	備 考	
			長軸	短軸	頂角					
E64	4BE	ピット	42	39	14	黒褐色粘質土				
E65	4BF	ピット	28	24	11	黒褐色粘質土				
E66	4BL	ピット	18	17	10	黒褐色粘質土				
E67	4BH	ピット	32	20	12	黒褐色粘質土				
E68	4BE	ピット	29	26	13	黒褐色粘質土				
E69	SK33	土坑	92	89	96	黒褐色粘質土	< E70, < E71			
E70	4BF	ピット	28	24	12	黒褐色粘質土	> E69			
E71	4BE	ピット	32	29	9	黒褐色粘質土	> E70			
E72	4BE	ピット	24	23	8	黒褐色粘質土				
E73	4BE	ピット	20	16	6	黒褐色粘質土				
E74	4BE	ピット	32	28	14	黒褐色粘質土				
E75	4BE	ピット	28	26	6	黒褐色粘質土				
E76	4BE	ピット	23	22	18	黒褐色粘質土				
E77	4BD	ピット	26	24	8	黒褐色粘質土				
E78	4BD	ピット	23	21	4	黒褐色粘質土				
E79	4BD	ピット	23	18	10	黒褐色粘質土				
E80	4BD	ピット	26	25	9	黒褐色粘質土				
E81	4BD	ピット	49	32	5	黒褐色粘質土				
E82	4BD	ピット	45	39	22	黒褐色粘質土				
E83	3BD, 4BD	土坑	139	45	89	黒褐色粘質土				
E84	4BD	ピット	30	27	6	黒褐色粘質土				
E85	4BD	土坑	92	46	30	黒褐色粘質土				
E86	4BD	ピット	21	19	8	黒褐色粘質土				
E87	3BD	ピット	31	26	11	灰褐色粘質土				
E88	4BE	ピット	26	24	13	黒褐色粘質土	> E82			
E89	4BD	ピット	28	25	18	黒褐色粘質土				
E90	5BD	ピット	30	28	14	灰褐色粘質土				
E91	4BD	ピット	33	29	10	灰褐色粘質土				
E92	5BD	ピット	57	34	6	灰褐色粘質土				
E93	5BD	ピット	15	14	8	黒褐色粘質土				
E94	5BE	ピット	30	24	10	黒褐色粘質土				
E95	5BE	ピット	24	20	6	黒褐色粘質土				
E96	5BD	ピット	28	25	7	黒褐色粘質土	> E90, E93			
E97	5BD	ピット	28	26	17	黒褐色粘質土	> E90			
E98	5BD	ピット	30	16	6	黒褐色粘質土	< E90, > E90			
E99	5BD	ピット	28	26	5	灰褐色粘質土				
E100	5BD, 6BD +埋立付中井	430	340	44	7	灰褐色粘質土, 黒褐色粘質土, 一灰褐色粘質土, 一色粘質土	< E48, E49, E50, E50, E57, E59, E645	縦北上部 34, 35(クレバ), 402, 404, 石器 11, 内右- 右隣 2, フレイク 46		
E100- S1	5BD, 6BD	壁穴付中井	340	300	8	灰褐色粘質土	< E56, E57, E58, E59, -S51, E145	縦文下部 2, フレイク 2		
E100- SF1	5FD	壁付付中井	248	179	44	灰褐色粘質土, 黑褐色粘質土, 一灰褐色粘質土, 一色粘質土	< E51, E59 > E100 - S31	縦文上部 22, サイドスクレイ バー 1, フレイク 1, 石器 10, 合右-右隣 2, フレイク 1		
E101	4BC, 4BD, 5BC, 5BD	壁邊付中井	360	356	45	灰褐色粘質土, 一灰褐色粘質 土, 一灰褐色粘質土	< E107	縦文下部 10, 台原 1, 石器 5, 内右-右隣 1, サイドスクレイ バー 2, 石器 1, 石器 17, 合左-右隣 4, 番平塗石 4, フレイク 1		
E101- SF2	4BD	壁邊付中井	162	78	43	灰褐色粘質土, 一灰褐色粘質 土, 一灰褐色粘質土	< E109 - SF4, E107	縦文下部 10, 台原 1, 石器 5, 内右-右隣 1, フレイク 10		
E101- SF3	4BD, 5BD	壁邊付中井	269	150	44	灰褐色粘質土, 一灰褐色粘質土 -灰褐色粘質土, L	< E109 - SF4	縦文下部 10, 台原 1, 石器 5, 内右-右隣 2, 台右-右隣 1, 番平塗石 3, フレイク 23		
E101- SF4	4BD	壁邊付中井	220	94	38	灰褐色粘質土, 一灰褐色粘質土 -灰褐色粘質土	< E109 - SF2 - SF3	縦文下部 10, フレイク 1		
E101- SF5	5BC, 5BD	壁邊付中井	226	90	28	灰褐色粘質土, 一灰褐色粘質 土		縦文下部 7, 石器 1, フレイ ク 1		
E102	5BE	地溝付中井	261	150	49	灰褐色粘質土, 黑褐色粘質土 -灰褐色粘質土	< E58	縦文上部 12, 13(クレバ), 1, サイドスクレイバー 1, 1, 石器 12, 番平塗石 1, 右 右 1, フレイク 46	吹き口側に右石あり	
E103	SK1	4BD	上坑	68	66	6	灰褐色粘質土			
E104	4BD	ピット	20	18	6	灰褐色粘質土				
E105	4BD	ピット	22	14	8	灰褐色粘質土				
E106	4BC, 4BD	ピット	34	28	8	灰褐色粘質土	> E10			
E107	4BD	ピット	30	28	6	灰褐色粘質土	< E109			
E108	4BD	ピット	34	30	12	灰褐色粘質土	> E101			
E109	4BD	ピット	78	41	6	灰褐色粘質土				
E109	4BC, 4BD	ピット	34	28	8	灰褐色粘質土	> E10			
E110	4BD	ピット	30	28	6	灰褐色粘質土	< E109			
E111	4BC, 5BC	ピット	34	30	4	灰褐色粘質土		縦文上部 1		
E112	SK2	土坑	48	40	16	灰褐色粘質土		透右		
E113	4BC, 5BC	ピット	50	34	25	灰褐色粘質土				
E114	5BC	ピット	39	30	8	灰褐色粘質土				
E115	5BC	ピット	46	36	7	灰褐色粘質土				
E116	5BC	ピット	20	18	2	にぼく灰褐色粘質土				
E117	5BC	ピット	20	18	10	にぼく灰褐色粘質土				
E118	5BC	ピット	24	18	3	にぼく灰褐色粘質土				
E119	5BC	ピット	22	20	16	にぼく灰褐色粘質土				
E120	SB2	5BA, 5BC	壁穴付中井	370	344	15	灰褐色粘質土, にぼく灰褐色 粘質土	骨石 2, 織器 1, レイク 32		

第14表 造構計測表(8)

造構名	報告書 記載略号	地 区	種 別	規 様 (cm)			造構地七 上端→下端	切り合い・開係 切る・切られる	出土遺物	備 考
				長幅	厚軸	深さ				
E121		SBC	ピット	36	30	21	灰褐色粘土質上			
E122		SBC, SBD	ピット	48	36	4	灰褐色粘土質上			
E123		SBC, SBD	ピット	34	30	6	灰褐色粘土質上			
E124		4BD	ピット	31	26	8	灰褐色粘土質上			
E125		4BD	ピット	30	26	6	灰褐色粘土質上			
E126		4BD	ピット	34	25	22	灰褐色粘土質上			
E127		4BD	ピット	37	22	8	二三・灰褐色粘土質上			
E128		4BD	ピット	27	26	7	灰褐色粘土質上			
E129		4BD	ピット	36	34	10	灰褐色粘土質上			
E130		4BD	ピット	24	26	8	灰褐色粘土質上			
E131		4BD	ピット	20	16	10	灰褐色粘土質上			
E132		3BD	ピット	20	20	12	灰褐色粘土質上			
E133		4BE	ピット	30	26	4	灰褐色粘土質上			
E134		3BE	ピット	50	26	5	灰褐色粘土質上			
E135		4BE	ピット	22	18	11	黄褐色粘土質上			
E136		4BE	ピット	30	24	4	褐色粘土質上			
E137		4BF	ピット	20	18	7	黄褐色粘土質上			
E138		4BF	ピット	30	26	12	灰褐色粘土質上			
E139		5BD	ピット	18	16	9	二三・灰褐色粘土質上			
E140		4BF	ピット	20	28	12	灰褐色粘土質上	> E20		
E141		4BE	ピット	27	25	18	灰褐色粘土質上			
E142	ST1	5BF, SBC	蛇穴状遺構	496	76	33	空洞状質上→褐色粘土質上→灰褐色粘土質上と褐 色粘土質の混合土	粘土上223		
E143		4BD	ピット	36	36	34	灰褐色粘土質上	< E145		
E144		4BD, 4BE, SBD, 5BR	坑道	180	79	14	灰褐色粘土質上	< E58		
E145	SK4	4BD	土坑	126	80	16	灰褐色粘土質上	> E143, > E100	透心土、台心・G層2	
E146		SBC	ピット	20	17	14	二三・灰褐色粘土質上			

第15表 出土土器觀察表(1)

品種名	学名	原産地	出 品(cm)	色 痘		備 考
				口径	筋数	
1 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-A、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-無方)
2 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-B、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-無方)
3 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-C、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-無方)
4 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-D、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
5 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-E、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
6 E100 01 瓜丈上品	甜柿		26.0	やや細	灰褐色	白 E100-F、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
7 E100 01 瓜丈上品	甜柿		24.0	やや細	灰褐色	白 E100-G、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
8 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-H、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
9 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-I、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
10 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-J、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
11 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-K、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
12 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	白 E100-L、内面黒斑化斑、外面糊状皮(板状-長方)
13 E100 02 瓜丈上品	甜柿	18.0		粗	褐色	良 E100-M、内面糊ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
14 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-N、内面糊ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
15 E100 01 瓜丈十番	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-O、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
16 E100 03 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-P、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
17 E100 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-Q、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
18 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-R、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
19 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-S、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
20 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-T、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
21 E100 03 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-U、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
22 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-V、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
23 E100 03 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-W、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
24 E100 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-X、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
25 E100 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-Y、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
26 E100 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-Z、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
27 E100 01 瓜丈十番	甜柿			やや細	灰褐色	良 E100-A、被木大23cm、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
28 E101 01 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-B、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
29 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-C、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
30 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-D、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
31 E101 01 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-E、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
32 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-F、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
33 E101 03 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-G、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
34 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-H、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
35 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-I、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
36 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-J、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
37 E101 03 瓜丈上品	甜柿	35.8		やや細	褐色	良 E101-K、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
38 E101 03 瓜丈上品	甜柿	35.8		やや細	褐色	良 E101-L、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
39 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	褐色	良 E101-M、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
40 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	褐色	良 E101-N、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
41 E101 01 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-O、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
42 E101 03 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-P、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
43 E101 01 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-Q、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
44 E101 02 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-R、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
45 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-S、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
46 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-T、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
47 E101 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-U、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
48 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-V、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
49 E101 03 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-W、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
50 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-X、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
51 E101 01 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-Y、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
52 E101 01 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-Z、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
53 E101 02 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E101-A、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
54 E101 03 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E101-B、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
55 E101 01 瓜丈上品	甜柿	17.8		やや細	灰褐色	良 E101-C、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
56 E102 02 瓜丈上品	甜柿		23.0	密	黑色	良 E102-D、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
57 E102 02 瓜丈上品	甜柿	23.0		やや細	灰褐色	良 E102-E、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
58 E102 01 瓜丈上品	甜柿		23.0	密	黑色	良 E102-F、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
59 E102 02 瓜丈上品	甜柿	36.0		やや細	灰褐色	良 E102-G、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
60 E102 02 瓜丈上品	甜柿	36.0		やや細	灰褐色	良 E102-H、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
61 E102 02 瓜丈上品	甜柿			やや細	灰褐色	良 E102-I、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
62 E102 02 瓜丈上品	甜柿			密	黑色	良 E102-J、内面黒ナラヒテ糊状皮(板状-長方)
63 E142 01 瓜丈七郎	桃	19.5		密	明赤褐色	良 E142-K、被木厚10mm、被黒闇半身半果、上層部分2/3が黒闇外皮に黒毛工具による刺穴、L層隠れ果のみ、外側は外黒化物付帯
64 E142 02 瓜丈七郎	桃			密	明赤褐色	良 外側白黒斑
65 E142 01 瓜丈七郎	桃	5.7		明赤褐色	桃	良 外側白黒斑
66 E142 01 瓜丈七郎	桃			密	赤褐色	良 赤褐色
67 E142 01 瓜丈七郎	桃			密	白色	良 最大12.5cm、被黒闇
68 E142 01 瓜丈七郎	桃			密	浅赤褐色	良 外黒化物ナラヒテ

第16表 出土土器観察表(2)

選別 番号	遺物名 種類	内 容	基盤名	法 面 (cm)	寸幅 厚	断面 径	鉢土	色 調		構成	備 考
								内	外		
69	C216 01	直筒器	环	13.6			白	灰白色	灰白色	良	高台系
70	C216 01	直筒器	环身				白	灰白色	灰白色	良	最大径 11.4cm、壁没度
71	C216 01	直筒器	台向型				白	灰白色	灰白色	良	最大径 20.1cm、壁没度
72	C216 01	直筒器					やや灰	にふくらむ灰色	にふくらむ灰色	良	最大径 20.4cm、外輪ハサツ調査
73	C216 01	直筒器	壳	19.0			やや灰	にふくらむ灰色	にふくらむ灰色	良	外輪ハサツ調査
74	C216 02	直筒器	壳				やや灰	にふくらむ灰色	にふくらむ灰色	良	外輪ハサツ調査
75	C216 02	直筒器	壳				白	灰白色	灰白色	良	内輪灰ナダ、外輪削り底
76	C216 02	直筒器	壳	25.3			白	灰白色	灰白色	良	
77	B28 03	口部直筒器	瓶	11.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
78	C141 01	内輪直筒器	瓶	21.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
79	C141 01	内輪直筒器	瓶	14.1			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
80	C141 01	内輪直筒器	瓶	13.9			白	灰白色	灰白色	良	内輪削り底あり
81	C141 01	内輪直筒器	瓶	4.4			白	灰白色	灰白色	良	外輪削り底
82	C141 01	内輪直筒器	瓶	11.5			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
83	C141 01	内輪直筒器	小瓶	8.8			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、底無を基準
84	C141 01	内輪直筒器	瓶	12.2			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、無輪を基準
85	C141 01	大瓶	瓶				白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、輪無を基準
86	C141 01	内輪直筒器	瓶				白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、縁口の半径は 8.5cm
87	C224 02	十字切	内輪直筒器	37.4			白	浅緑褐色	黑色	良	内輪削り底
88	C224 02	十字切	内輪直筒器				白	灰白色	黑色	良	最大径 22.3cm、外輪削り
89	C224 02	十字切	内輪直筒器	8.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
90	C224 02	十字切	内輪直筒器	8.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
91	C224 02	十字切	内輪直筒器	8.2			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
92	C224 02	十字切	内輪直筒器	8.4			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
93	C224 02	十字切	内輪直筒器	14.4			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
94	C224 02	十字切	内輪直筒器				白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、高台端部に斜削
95	C224 02	十字切	内輪直筒器				白	灰白色	灰白色	良	内輪削り底
96	C224 02	十字切	内輪直筒器	15.2			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
97	C224 02	十字切	内輪直筒器	15.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
98	C224 02	十字切	内輪直筒器	15.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
99	C224 02	十字切	内輪直筒器	15.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
100	C225 01	口部直筒器	瓶	30.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ
101	C225 01	口部直筒器	瓶	21.0			白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ後上方は削りハサツ
102	C225 01	口部直筒器	瓶	9.6	2.0	4.8	白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、底部丸切り底
103	C225 01	口部直筒器	瓶	7.7	1.2	3.3	白	灰白色	灰白色	良	外輪削りナダ、底部丸切り底
104	C225 01	口部直筒器	瓶				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダの後削り、底は外輪削り各切り底、外輪に墨書き
105	C225 01	口部直筒器	瓶	15.1			白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
106	C225 01	口部直筒器	瓶	11.5			白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
107	C225 01	口部直筒器	瓶				白	灰白色	浅灰色	良	外輪削りナダ、底部丸切り底
108	C225 01	口部直筒器	瓶	14.8	3.4	6.2	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ、底部丸切り底
109	C225 01	口部直筒器	瓶				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ、底部丸切り底
110	C225 01	口部直筒器	瓶	2.1	5.2	2.0	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ、前口部丸切り底、底無を基準
111	C225 01	口部直筒器	瓶	4.4	3.5	2.0	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ、前口部丸切り底
112	C225 01	口部直筒器	瓶	26.0			白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ、前口部丸切り底
113	C225 01	口部直筒器	瓶				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
114	C225 01	口部直筒器	瓶	9.0	1.9	5.6	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダの後削りナダ、底部外輪削り丸切り底
115	C244 02	口部直筒器	瓶				白	灰白色	灰白色	良	高台径 6.0m、内輪削りナダ
116	C252 02	口部直筒器	瓶				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ、底部丸切り底
117	C2 01	直筒器	更				白	灰白色	灰白色	良	底無削り底
118	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	底無削り底
119	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダの後削りナダ、外輪削り底
120	C8 01	凸唇	口付灰	8.4	1.6	4.7	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダの後削りナダ、外輪削りナダ底部削り丸切り底
121	C8 01	凸唇	口付灰	8.4	2.0	4.5	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダの後削りナダ、外輪削りナダ底部削り丸切り底
122	C8 01	凸唇	口付灰	15.4	5.6	7.6	白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
123	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 7.5m、内輪削りナダ
124	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 5.0m、内輪削りナダ
125	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 5.0m、内輪削りナダ
126	C8 01	凸唇	口付灰	13.2	5.2	5.3	白	灰白色	灰白色	良	高台径 5.0m、内輪削りナダ
127	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 5.0m、内輪削りナダ
128	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 5.0m、内輪削りナダ
129	C8 01	凸唇	口付灰	13.0	5.8	6.3	白	灰白色	灰白色	良	高台径 6.0m、内輪削りナダ
130	C8 01	凸唇	口付灰	14.2			白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
131	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
132	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
133	C8 01	凸唇	口付灰	14.7	5.5	6.8	白	灰白色	灰白色	良	高台径 7.5m、内輪削りナダ
134	D17 01	直筒器	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 7.5m、内輪削りナダ
135	D17 01	直筒器	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 7.5m、内輪削りナダ
136	D17 01	直筒器	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 7.5m、内輪削りナダ
137	D17 01	直筒器	口付灰	32.0			白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
138	D17 01	直筒器	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
139	D17 01	直筒器	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	内輪削りナダ
140	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 6.0m、内輪削りナダ
141	C8 01	凸唇	口付灰				白	灰白色	灰白色	良	高台径 6.0m、内輪削りナダ

第17表 出出土器觀察表(3)

遺物 番号	遺物 名	基 地	備 考	器 形 名	底 径 (cm)	厚 度 (cm)	動土 日付	色 調		地成	備 考
								内	外		
142	C64	01 古墳群	梯形 小壇	盆	10.4	3.1	5.6	やや灰	灰白色	良	内外面削輪ナダ、口縁部に研磨施
143	C65	01 古墳群	梯形 小壇	盆	—	—	14.6	白	灰白色	良	高台径 14.6cm、内部削輪ナダ
144	C167	02 古墳群	梯形 小壇	盆	8.4	2.6	4.6	白	灰白色	良	内外面削輪ナダ、底部外周墨書き「十」
145	C116	01 上野原	S-手盤	盆	16.4	—	—	やや灰	灰白色	良	A 前または 8 年
146	C216	01 千葉市	手盤	盆	13.9	—	—	白	灰白色	良	内外面削輪ナダ
147	C256	01 千葉市	手盤	盆	—	—	4.4	白	灰白色	良	高台径 4.4cm、内部削輪ナダ、底面底部に研磨施
148	C266	01 古墳群	手盤	盆	12.6	—	—	白	灰白色	良	内部削輪ナダ
149	C279	01 朝霞	手盤	盆	—	—	—	白	灰白色	良	研磨施
150	C779	01 古墳群	手盤	盆	12.4	3.3	4.7	白	灰白色	良	内外面削輪ナダ、軸孔あり切削。蓋面内面に研磨延長
151	B12	01 通路	擂钵	盆	—	—	9.8	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、外表面にハゲ剥り、覆面単位不規
152	B13	01 古墳群	擂钵	盆	—	—	7.3	白	灰白色	良	高台径 6.6cm、内部削輪ナダ、底面端部削出痕
153	A18	01 古墳群	擂钵	盆	—	—	7.0	白	灰白色	良	高台径 6.4cm、高台端部削出痕
154	B15	01 通路	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	2 本の横筋
155	24M	01 土盤部	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	最大 27.9cm
156	22S	01 土盤部	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	内面削輪ハゲ剥り、单位不明
157	20Q	01 土盤部	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	最大 12.0cm
158	21S	01 土盤部	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	外側削輪施、空型
159	23Q	01 土盤部	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、軸孔あり切削
160	21S	01 土盤部	擂钵	盆	—	—	—	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、軸孔あり切削
161	23Q	01 土盤部	擂钵	盆	9.3	1.7	4.5	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、軸孔あり切削
162	21S	01 古墳群	擂钵	盆	9.2	1.9	4.2	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、回転孔あり削除ナダ
163	23W	01 古墳群	擂钵	盆	—	—	8.5	白	灰白色	良	高台径 8.5cm、内部削輪ナダ、底面あちり痕
164	26A	02 古墳群	擂钵	盆	—	—	5.2	白	灰白色	良	高台径 5.2cm、内部削輪ナダ、底面あちり痕、底部外周墨書き「公」
165	23M	01 古墳群	擂钵	盆	—	—	6.7	白	灰白色	良	高台径 6.4cm、内部削輪ナダ、底面あちり痕
166	22S	01 古墳群	擂钵	盆	15.4	5.5	9.5	白	灰白色	良	高台径 5.2cm、内部削輪ナダ、底面あちり痕
167	24I	01 古墳群	擂钵	盆	13.7	4.0	5.6	白	灰白色	良	高台径 7.5cm、内部削輪ナダ、回転孔あり
168	19R	02 古墳群	擂钵	盆	12.4	3.0	4.6	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、回転孔あり切削
169	21Q	02 古墳群	擂钵	盆	12.4	2.9	5.7	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、回転孔あり切削
170	21S	01 古墳群	擂钵	盆	10.4	2.5	3.8	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、回転孔あり切削ナダ
171	20S	01 古墳群	手盤	盆	—	—	—	白	灰白色	良	最大 10.5cm、内面削輪施
172	21N	01 古墳群	手盤	盆	—	—	—	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、軸孔あり切削
173	22D	01 古墳群	手盤	盆	—	—	—	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、内面擦痕施
174	23N	01 古墳群	手盤	盆	—	—	—	白	灰白色	良	内面削輪ナダ、外周～内部の口縁まで擦痕を施す
175	26E	1 古墳群	脚形 骨盆	盆	11.5	—	—	白	灰白色	良	内外面削輪ナダ、軸孔あり
176	21S	01 大室	丸窓	盆	—	—	5.6	白	灰白色	良	高台径 4.4cm、ヘラ取り丸窓、内外面刮削を施す
177	20S	01 通路	井戸	盆	—	—	20.0	白	灰白色	良	内面削輪施
178	20S	01 通路	井戸	盆	—	—	20.1	白	灰白色	良	内面削輪施
179	22M	01 通路	丸窓	盆	—	—	4.0	白	オーリーブ褐色	良	オーリーブ褐色
180	22M	01 通路	丸窓	盆	—	—	5.4	やや白	明黄色	良	高台径 5.4cm、内外面刮削を施す
181	22M	01 通路	丸窓	盆	—	—	5.9	白	灰白色	良	高台径 5.3cm、内外面刮削を施す
182	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。軸孔あり 193 と同一個体
183	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。外底底面で 194 と同一個体
184	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪ナダオーリーブ褐色正丸、1 丸 1 里 3 里丸、193 と同一個体
185	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。軸孔あり 193 と同一個体
186	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。1 丸 1 里 3 里丸、193 と同一個体
187	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。軸孔あり 193 と同一個体
188	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。内面削輪施
189	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。底面下方指ナダ、1 丸 1 里 3 里丸、軸孔の外部に研磨
190	先生土器	高环	—	罐	—	—	—	白	明黄色	良	内面削輪方向向う 1 タリ。内面中底部指ナダ、脚部下方指ナダ、1 丸 1 里 3 里丸、軸孔の外部に研磨 1 本

第18表 出土石器計測表(1)

取り扱い番号	遺構名 地区名	層位	種 別	法 電				石 材	報告書番号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g 重)			
1343 E101	01	石錐		18.5	9.5	2.5	0.2	下島石	212	E101 - SF3
1469 E102	03	石錐		13.0	9.5	3.5	0.2	チャート	228	E102 - SF6
1494 E102	02	石錐	(24.5)	(16.5)	5.5	1.8	チャート	227	E102 - SF6	
2264 C225	01	石錐		31.5	15.0	4.0	1.9	サヌカイト	241	C225 - ST5
2350 228	II	石錐		27.0	(14.0)	5.5	1.3	チャート	242	包装物
1382 E101	01	腕形石器		20.0	15.5	11.5	4.1	チャート	229	E102 - SF6
1492 E101	01	腕形石器	(13.0)	(17.0)	6.0	1.4	チャート	213	E101 - SF3	
1318 E101	01	石錐		34.0	23.5	13.0	4.9	チャート	214	E101 - SF 外
1292 E100	01	サイドスクリーパー		54.0	32.5	13.0	19.8	チャート	205	E100 - SF1
1473 E102	03	サイドスクリーパー		68.0	29.5	15.5	28.1	チャート	230	E102 - SF6
1569 E101	01	サイドスクリーパー		28.0	16.5	6.5	2.7	チャート	216	E101 - SF 外
1688 E101	03	サイドスクリーパー		25.0	20.5	7.0	3.2	チャート	215	E101 - SF 5%
1283 E100	01	RF		45.5	27.5	17.0	19.1	チャート	206	E100 - SF1
1341 E100	03	RF		27.0	21.5	8.0	4.1	チャート	201	E100 - SB1
1329 E100	01	UF		50.0	36.0	9.0	13.9	流紋岩	207	E100 - SF1
1687 E101	03	石核		50.0	61.0	34.0	82.9	チャート	217	E101 - SF2
1298 E100	01	磨G A		146.5	91.0	42.5	802.0	讃岐流紋岩	208	E100 - SF1
1303 E100	01	磨石 A		146.5	87.5	43.5	843.0	讃岐流紋岩	202	E100 - SB1
1314 E101	01	磨石 A		170.0	93.0	42.0	929.0	砂岩	E101 - SF4	
1416 E101	02	磨石 A	(64.5)	48.1	9.8		22.6	讃岐流紋岩	E101 - SF4	
1418 E101	02	磨石 A		153.0	88.0	44.0	894.0	砂岩	220	E101 - SF4
1433 E102	02	磨石 A	(63.0)	(80.0)	40.5	279.2	安山岩	E102 - SF6		
1449 E102	02	磨石 A		113.5	65.0	49.5	515.0	讃岐流紋岩	233	E102 - SF6
1450 E102	02	磨石 A	(85.0)	(79.0)	39.5	358.9	安山岩	E102 - SF6		
1452 E102	02	磨石 A		132.0	93.0	44.0	747.0	安山岩	232	E102 - SF6
1456 E102	02	磨石 A	(107.0)	88.0	42.0	550.8	讃岐流紋岩	234	E102 - SF6	
1461 E102	02	磨石 A	(80.0)	(94.0)	47.5	530.9	讃岐流紋岩	E102 - SF6		
1510 E101	02	磨石 A	(62.0)	84.5	37.5	294.6	安山岩	222	E101 - SF3	
1542 E100	03	磨 G A		121.5	85.5	52.5	807.0	讃岐流紋岩	E100 - SF1	
1545 E101	01	磨 G A	(86.5)	90.0	55.0	539.8	讃岐流紋岩	223	E101 - SF4	
1596 E101	01	磨石 A		160.0	87.0	62.5	1,383.0	讃岐流紋岩	E101 - SF 外	
1668 E101	02	磨石 A		99.0	85.0	55.0	653.0	讃岐流紋岩	E101 - SF5	
1718 E101	02	磨石 A		124.0	81.5	51.5	823.0	安山岩	221	E101 - SF 外
1761 E120	01	磨石 A		73.0	69.0	46.0	325.5	安山岩	E120 - SB2	
1811 E120	01	磨 G A	(83.0)	97.5	38.0	474.6	安山岩	203	E120 - SB2	
1822 E145	02	磨石 A		114.0	81.0	35.5	423.4	讃岐流紋岩	E145 - SK4	
1829 E112	01	磨 G A		106.0	84.5	43.0	563.3	讃岐流紋岩	238	E112 - SK2
1830 E145	02	磨石 A		135.0	97.0	60.0	1,115.0	讃岐流紋岩	E145 - SK4	
1839 E102	03	磨 G A		123.0	88.0	61.5	923.0	讃岐流紋岩	E102 - SF6	
2352 E101	01	磨石 A		130.0	74.0	49.0	660.0	讃岐流紋岩	E101 - SF 5%	
1330 E100	01	磨石 B		112.0	105.5	46.5	856.0	安山岩	210	E100 - SF1
1390 E100	01	磨石 B	(62.0)	(79.0)	32.0	240.4	讃岐流紋岩	E100 - SF1		
1396 E100	01	磨石 B		134.0	92.0	38.0	728.0	讃岐流紋岩	E100 - SF1	
1444 E102	02	磨石 B		99.0	88.5	35.0	435.0	安山岩	236	E102 - SF6
1445 E102	02	磨石 B		78.0	51.0	46.0	271.8	讃岐流紋岩	E102 - SF6	
1453 E102	02	磨石 B		75.0	72.0	56.5	404.1	安山岩	E102 - SF6	
1454 E102	02	磨石 B		80.5	66.5	51.5	364.8	安山岩	235	E102 - SF6
1472 E102	03	磨石 B		101.6	86.1	30.0	422.6	讃岐流紋岩	E102 - SF6	
1525 E101	02	磨石 B		94.0	71.0	50.0	508.6	安山岩	E101 - SF3	
1532 E101	02	磨石 B		127.0	100.0	36.5	721.0	讃岐流紋岩	E101 - SF4	
1630 E100	03	磨石 B		111.0	103.4	56.5	948.0	安山岩	209	E100 - SF1
1635 E100	03	磨石 B		123.0	94.0	47.5	794.0	讃岐流紋岩	E100 - SF1	
1636 E100	03	磨石 B		108.0	96.0	39.5	616.0	讃岐流紋岩	E100 - SF1	
1648 E101	03	磨石 B		122.0	106.0	32.0	599.7	安山岩	E101 - SF5	
1679 E101	02	磨石 B		125.0	99.0	50.0	911.0	讃岐流紋岩	E101 - SF4	
1680 E101	03	磨石 B		84.5	68.0	43.0	359.9	安山岩	224	E101 - SF4

第19表 出土石器計測表(2)

取り上げ番号	遺構名	層位	種別	法 量				石 材	報告番号	備 考
				長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	質量 (g 重)			
1705	E101	02	磨石 B	89.5	74.0	74.0	635.0	濃飛流紋岩	225	E101 - SF 外
1709	E101	02	磨石 B	87.0	67.0	39.5	309.0	安山岩		E101 - SF4
1723	E101	02	磨石 B	107.0	96.0	40.0	625.0	安山岩		E101 - SF 外
1769	E100	01	磨石 B	110.0	80.0	55.0	665.0	濃飛流紋岩		E100 - SF1
1770	E100	01	磨石 B	111.0	95.0	39.5	624.0	濃飛流紋岩		E100 - SF1
1403	E100	01	台石・石皿	(137.0)	(242.0)	86.5	3,834.0	濃飛流紋岩	211	E100 - SF1
1422	E101	02	台石・石皿	(176.0)	(179.0)	88.0	3,399.0	濃飛流紋岩		E101 - SF3
1533	E101	02	台石・石皿	(169.0)	(174.0)	66.5	3,183.0	濃飛流紋岩		E101 - SF4
1631	E100	03	台石・石皿	(226.0)	(257.0)	88.0	6,900.0	濃飛流紋岩	211	E100 - SF1
1711	E101	02	台石・石皿	259.0	289.0	82.0	8,820.0	濃飛流紋岩	226	E101 - SF 外
1721	E101	02	台石・石皿	230.0	199.0	80.5	6,660.0	濃飛流紋岩		E101 - SF 外
1824	E145	02	台石・石皿	234.0	211.0	74.0	5,140.0	濃飛流紋岩		E145 - SK4
1828	E145	02	台石・石皿	225.0	215.0	63.0	4,610.0	濃飛流紋岩		E145 - SK4
1842	E102	03	台石・石皿	396.0	308.0	154.0	25,750.0	濃飛流紋岩	237	E102 - SP6
1775	E120	01	磨器	108.5	69.5	49.5	337.2	砂岩	204	E120 - SB2
1451	E102	02	扁平砥石	(107.5)	(68.0)	22.0	186.0	砂岩	231	E102 - SP6
1656	E101	03	扁平砥石	(62.0)	(50.0)	8.0	24.2	砂岩	218	E101 - SF3
1739	E101	03	扁平砥石	78.5	(51.0)	16.0	80.7	砂岩	219	E101 - SF 外
1361	E101	01	扁平砥石	(47.7)	(43.4)	11.6	27.5	砂岩		E101 - SF3
1507	E101	02	扁平砥石	(23.9)	27.7	9.0	12.7	砂岩		E101 - SF3
54	C4M	I	打製石斧	(88.5)	(33.0)	12.7	50.3	泥岩		包含層
81	C4M	II	打製石斧	(78.0)	44.0	16.5	76.6	泥岩	244	包含層
146	C141	01	打製石斧	(79.8)	(43.6)	11.8	66.7	泥岩		C141 - ST3
233	C141	01	打製石斧	(43.4)	(37.8)	9.7	21.5	泥岩		C141 - ST3
342	C141	01	打製石斧	(69.4)	(28.7)	11.6	28.7	泥岩		C141 - ST3
439	C225	II	打製石斧	98.5	42.5	12.5	62.0	泥岩	243	包含層
537	C224	01	打製石斧	(51.4)	(32.9)	15.2	29.8	泥岩		C224 - ST4
606	C224	01	打製石斧	(32.7)	(66.1)	10.7	18.5	泥岩		C224 - ST4
965	B2Q	III	打製石斧	(38.1)	54.6	16.9	24.2	泥岩		包含層
1072	B2R	01	打製石斧	(105.5)	44.0	16.0	96.2	泥岩	239	B2B - ST2
1230	C216	02	打製石斧	(51.9)	(57.0)	12.5	61.9	泥岩		C216 - SB4
2033	C225	01	打製石斧	(90.9)	(86.2)	19.5	174.2	泥岩		C225 - ST5
2168	C224	01	打製石斧	(54.0)	(46.2)	9.9	28.8	泥岩		C224 - ST4
161	C141	01	砾石	117.0	151.0	80.0	2323.0	砂岩	240	C141 - ST3
1549	B18	02	砾石	(25.1)	(35.2)	19.3	13.2	砂岩		B18 ピット
2323	B1R	II	砾石	(86.8)	(50.0)	17.1	86.5	砂岩		包含層
135	C23L	II	白玉	5.0	9.0	2.5	0.04	滑石		245 包含層

第20表 柱損計測表

番号	遺構名	法 量				例 様	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			
301	C287	35.2	11.5	9.2	9.2	ハンノキ堅木	
302	C290	18.5	12.5	7.0	7.0	ハンノキ堅木	
303	C115	51.7	12.6	12.3	12.3	ヒノキ	一部削痕あり
304	C147	24.7	11.3	5.2	5.2	ムクノキ	
305	C136	37.5	19.8	22.3	22.3	ハンノキ堅木	
306	B1	40.5	9.9	9.2	9.2	クリ	
307	B3	59.8	15.0	12.8	12.8	クリ	
308	C123	15.3	3.0	1.8	1.8	クリ	
309	C150	25.5	5.3	5.6	5.6	ヒノキ	
310	C185	12.8	6.1	5.0	5.0	クリ	
311	C192	18.6	10.4	5.6	5.6	クリ	
312	C162	10.0	4.0	1.8	1.8	クリ	
313	C384	7.0	4.0	1.8	1.8	ヒノキ	
試掘本1		29.5	20.5	20.2	20.2	クヌギ脂	厚い樹皮付き

図 版



1 富田清友遺跡周辺（国土地理院発行空中写真を転載）

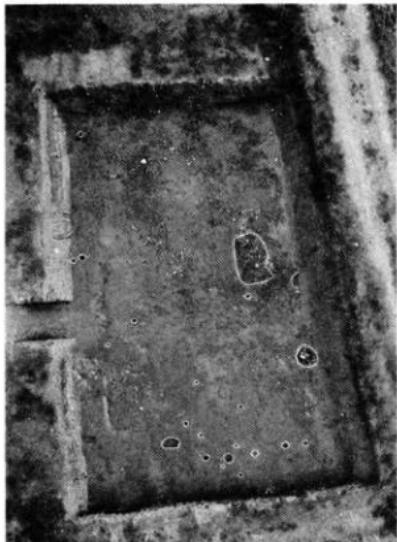
図版 2



2-1 調査区全景（東より）



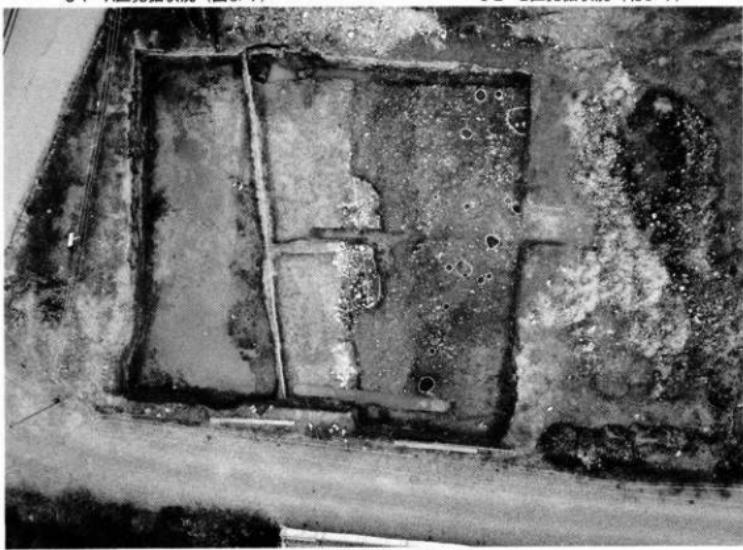
2-2 調査区全景（西より）



3-1 A区完損状況（西より）

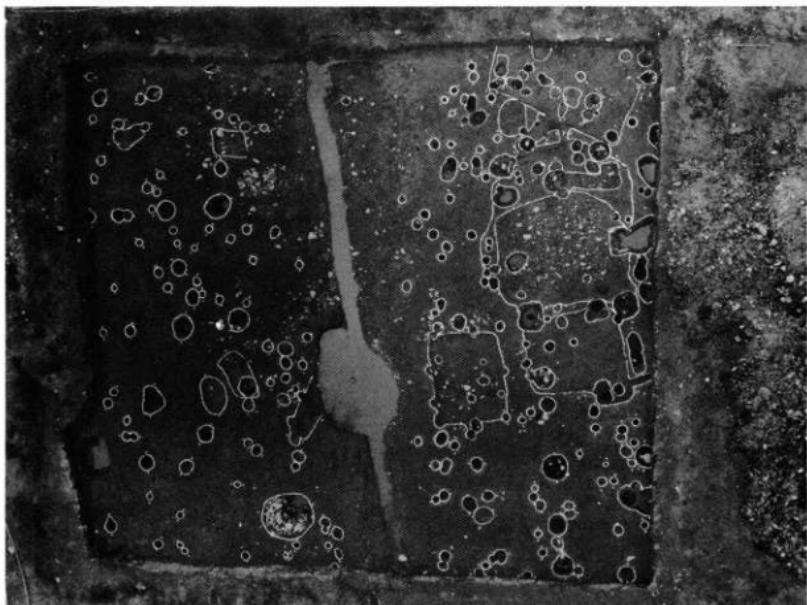


3-2 B区完損状況（北より）



3-3 D区完損状況（南より）

図版 4



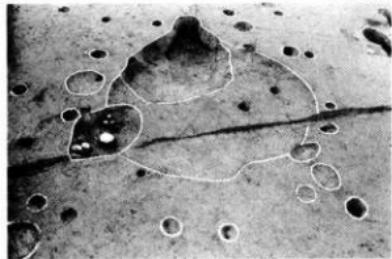
4-1 C区完掘状況（北より）



4-2 E区完掘状況（南より）



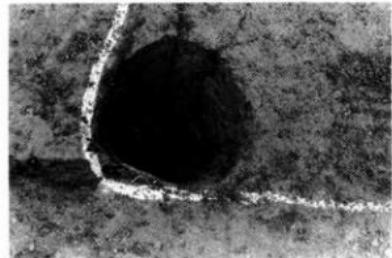
5-1 C区南西部完掘状況（東より）



5-2 E100完掘状況（東より）



5-3 E100土層断面東西ベルト



5-4 E143完掘状況（東より）

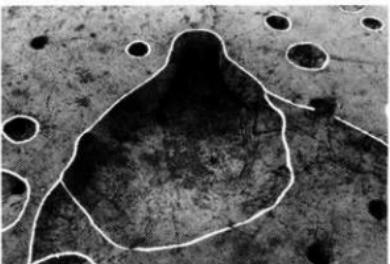


5-5 作業風景

図版 6



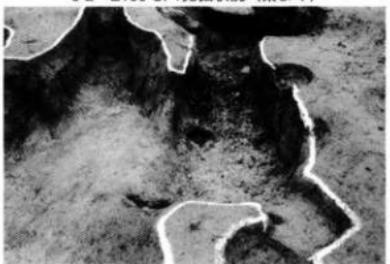
6-1 E120完掘状況（南より）



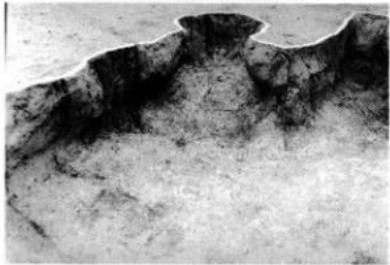
6-2 E100-SF1完掘状況（東より）



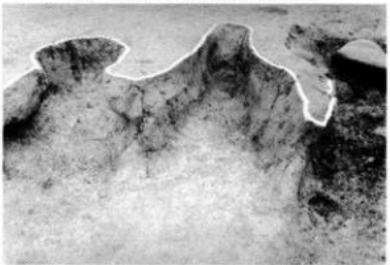
6-3 E101完掘状況（東より）



6-4 E101-SF2完掘状況（東より）



6-5 E101-SF3完掘状況（東より）



6-6 E101-SF4完掘状況（東より）



6-7 E101-SF5完掘状況（北より）



6-8 E101遺物出土状況



7-1 E102完掘状況（東より）



7-2 E102焚き口付近（東より）



7-3 E102煙道部（東より）



7-4 E102台石出土状況

図版 8



8-1 E102遺物出土状況（南より）



8-2 作業風景



8-3 E145検出状況（東より）



8-4 作業風景



8-5 E117断ち割り（西より）



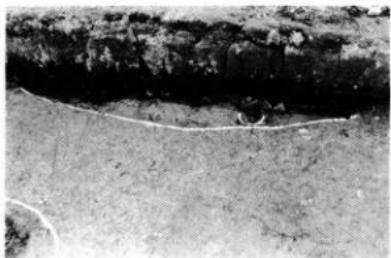
8-6 E119断ち割り（西より）



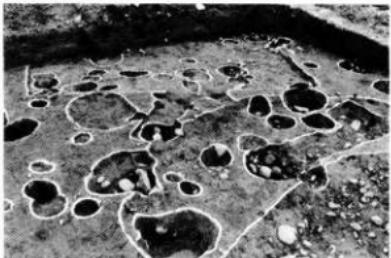
8-7 E142発掘状況（北より）



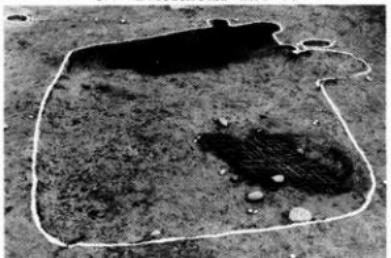
8-8 E142遺物出土状況



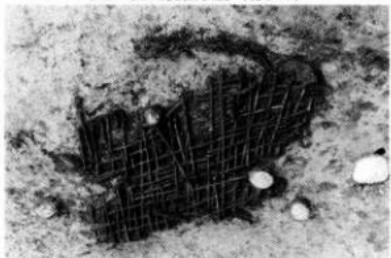
9-1 B10完掘状況（東より）



9-2 C216完掘状況（北より）



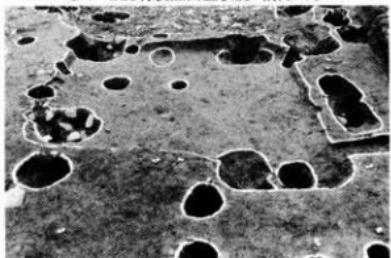
9-3 B28完掘状況（北より）



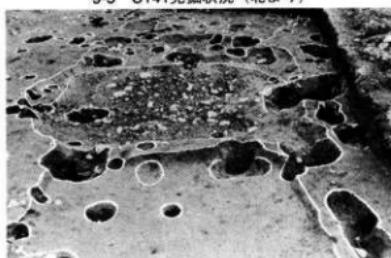
9-4 B28竹製品出土状況（東より）



9-5 C141完掘状況（北より）



9-6 C224完掘状況（北より）



9-7 C225完掘状況（北より）



9-8 C区北東部完掘状況（北より）

図版 10



10-1 C8検出状況（南より）



10-2 D17検出状況（南より）



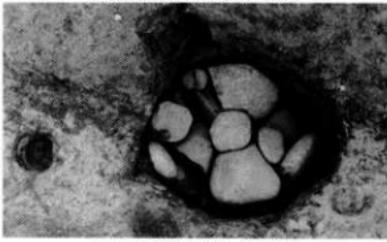
10-3 A20検出状況（北より）



10-4 A24発掘状況（西より）



10-6 C147柱根（東より）



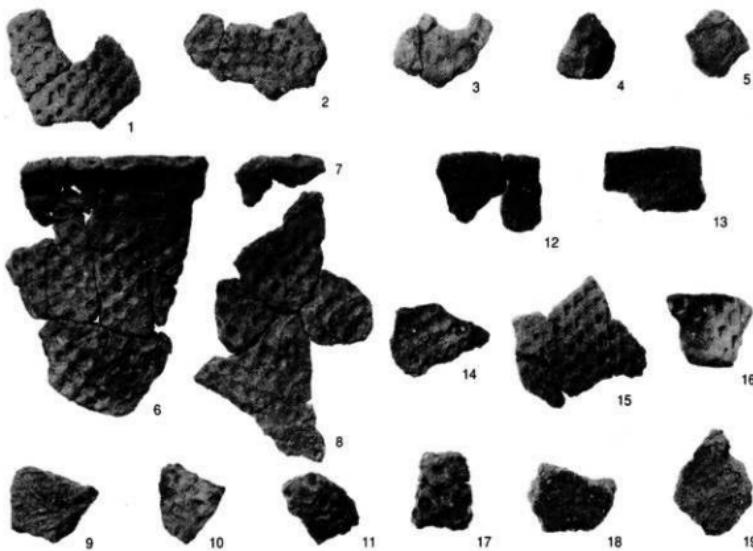
10-5 E69検出状況（北より）



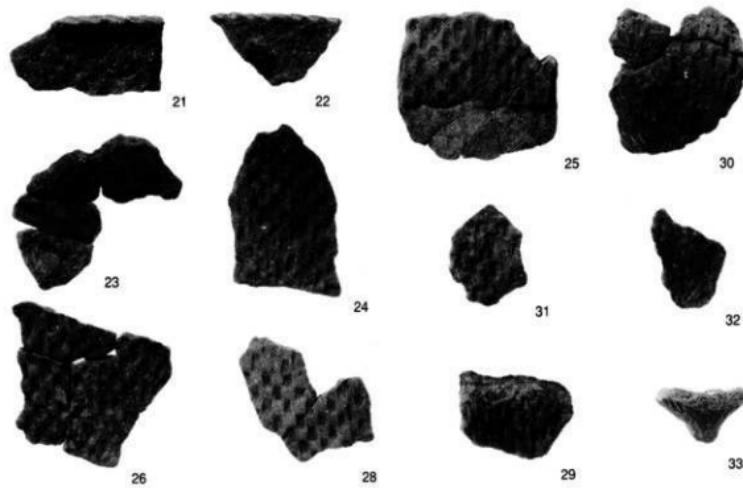
10-7 C115柱根（東より）



10-8 B3柱根（東より）

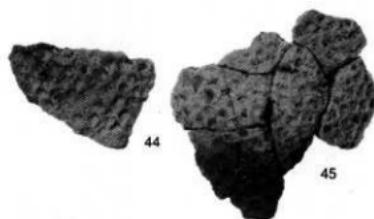
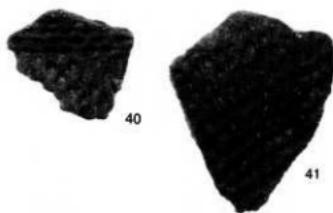
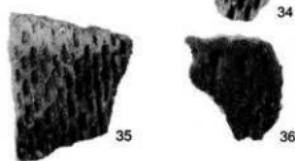
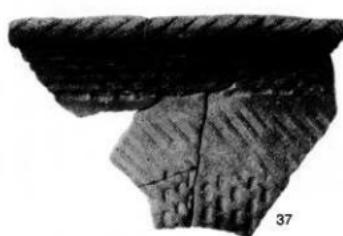
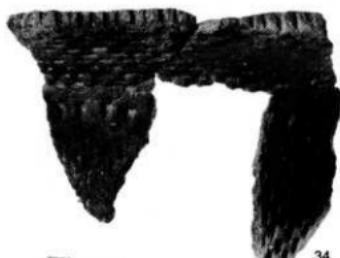


11-1 E100・E120出土縄文土器



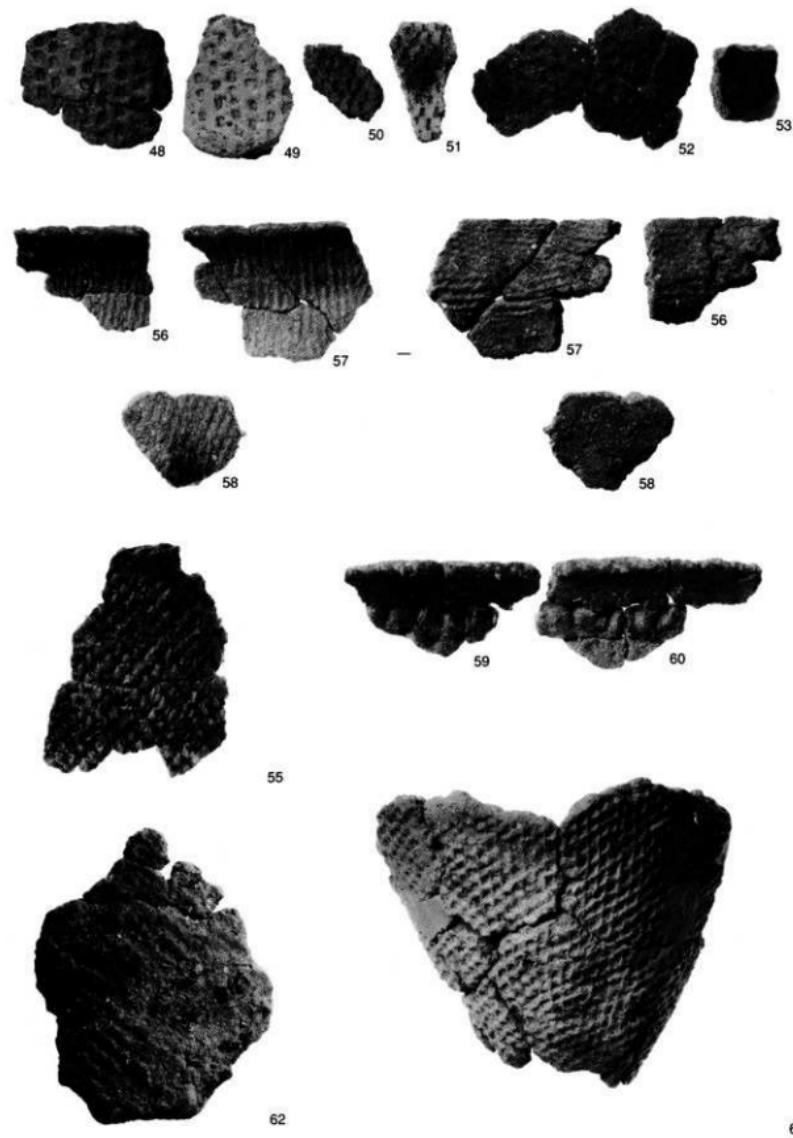
11-2 E101出土縄文土器 (1)

图版 12

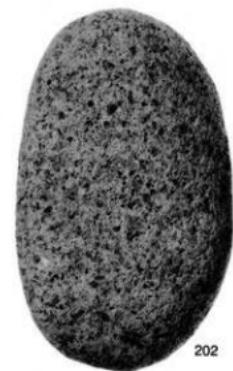


12 E101出土繩文土器 (2)

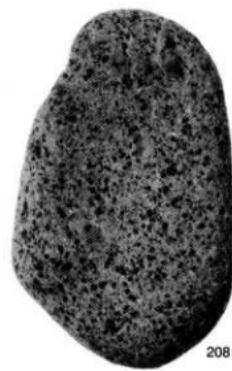
図版 13



13 E101出土繩文土器 (3)・E102出土繩文土器



202



208



220



221



222



223



232



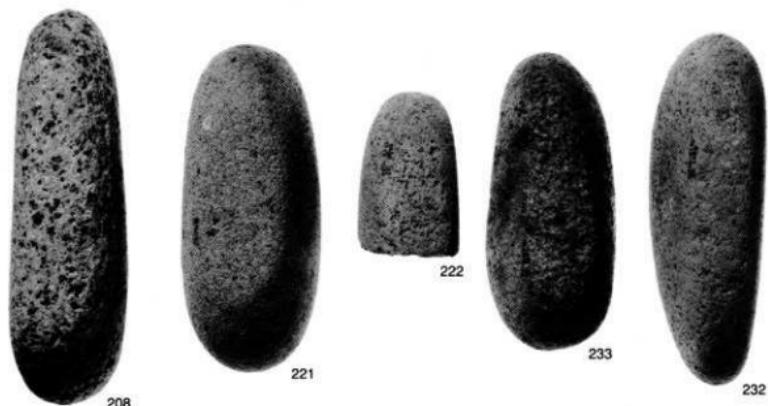
233



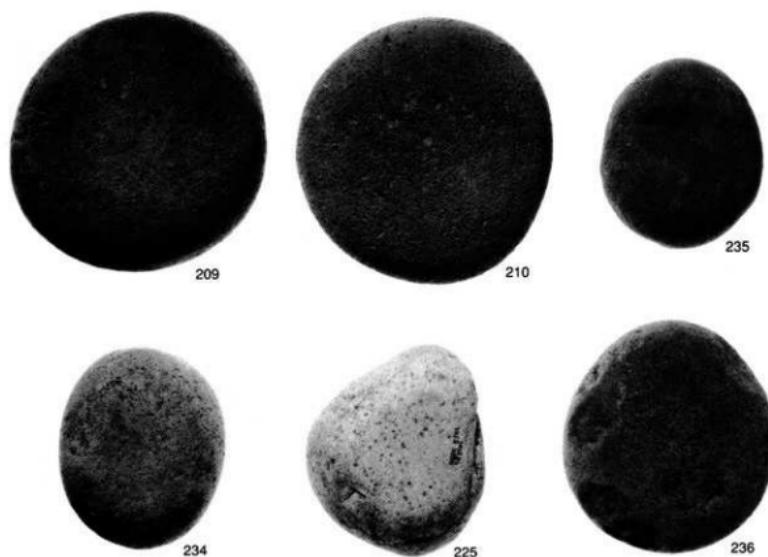
234



203



15-1 磨石A類

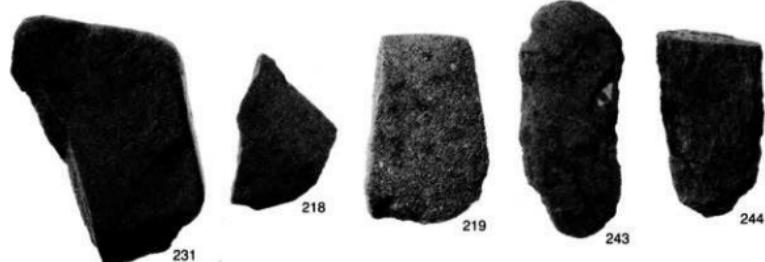


15-2 磨石B類

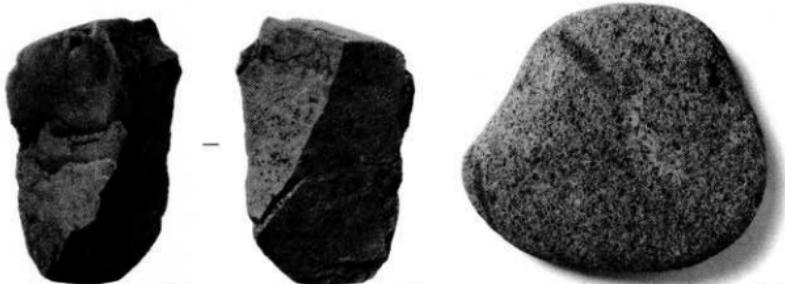
図版 16



16 剥片石器類・臼玉

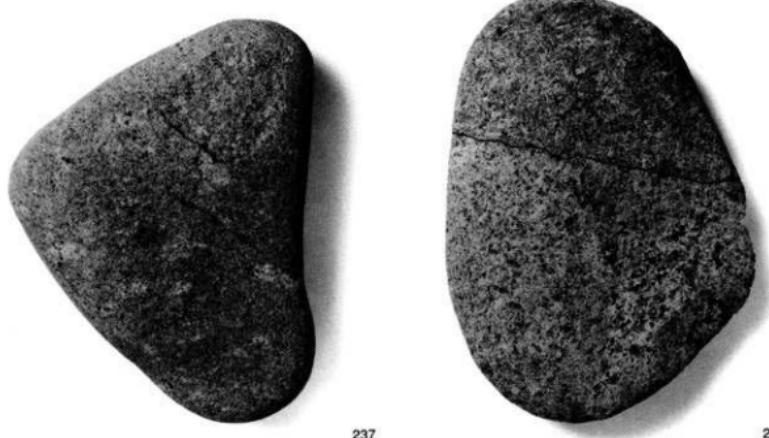


17-1 扁平砥石・打製石斧



17-2 碾器

17-3 E101出土台石



17-3 E101出土台石

17-4 E102出土台石

237

211

図版 18



119



120



160



63



75



130



71

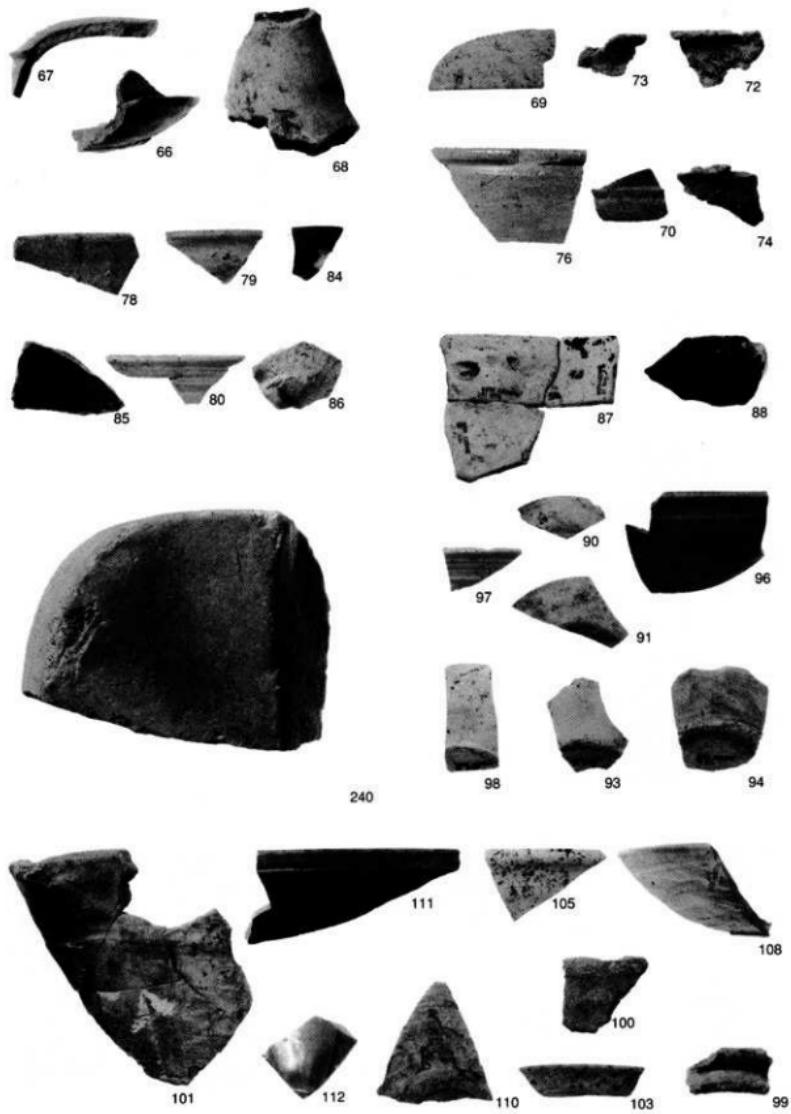


173



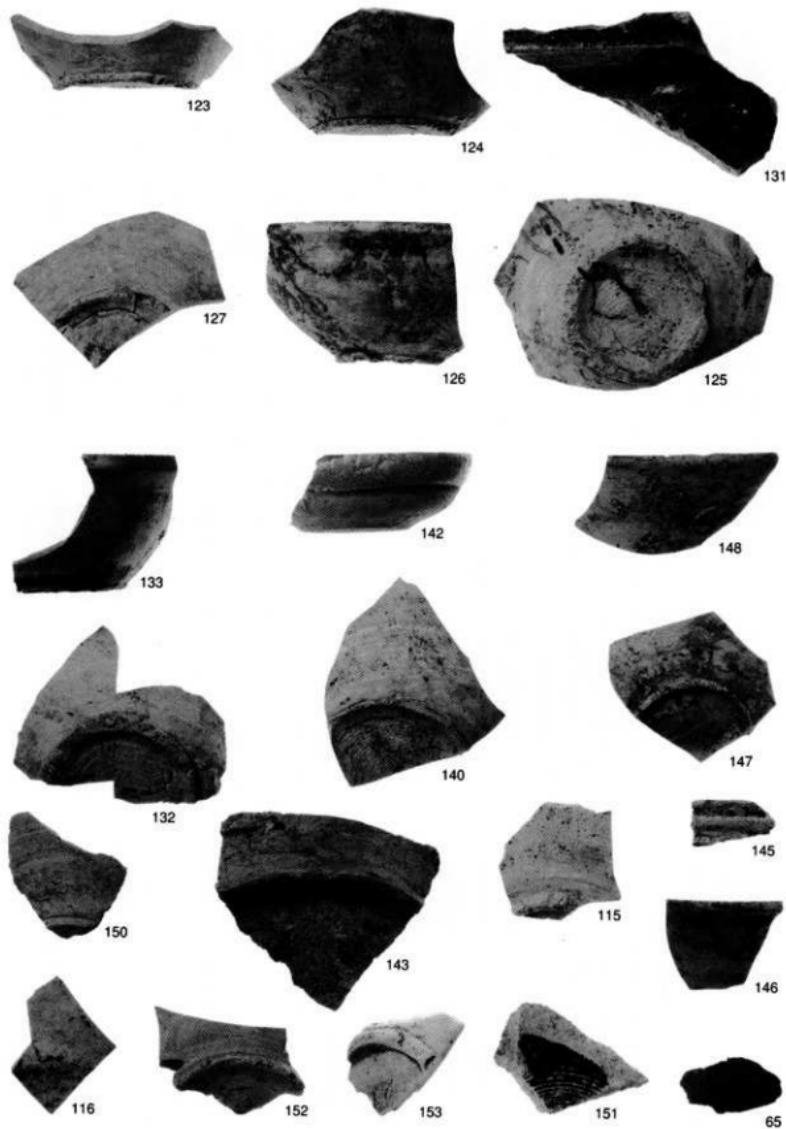
171

18 弥生時代以降の遺物 (1)

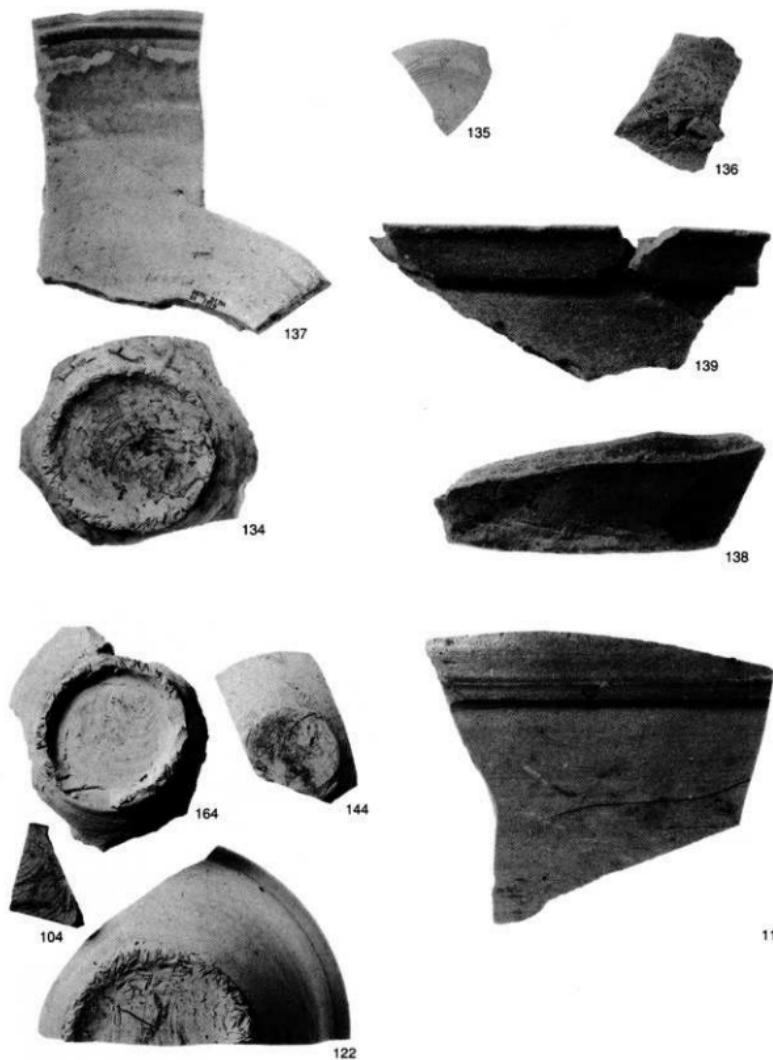


19 弥生時代以降の遺物 (2)

図版 20

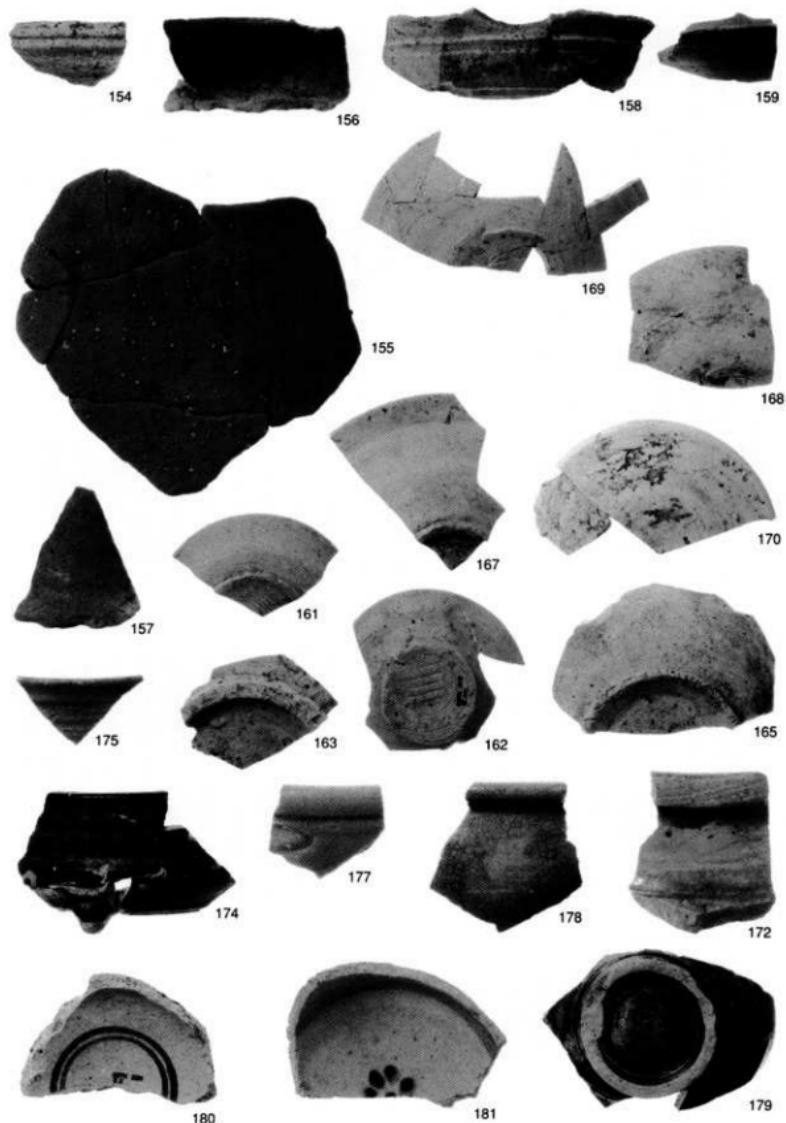


20 弥生時代以降の遺物 (3)

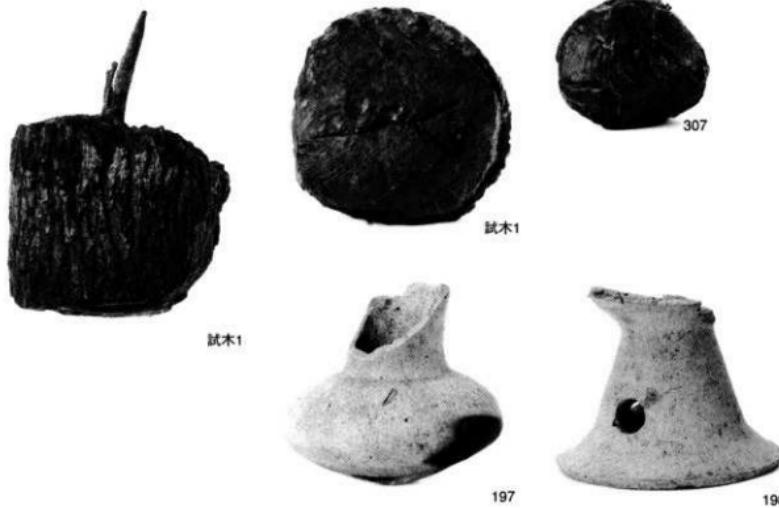
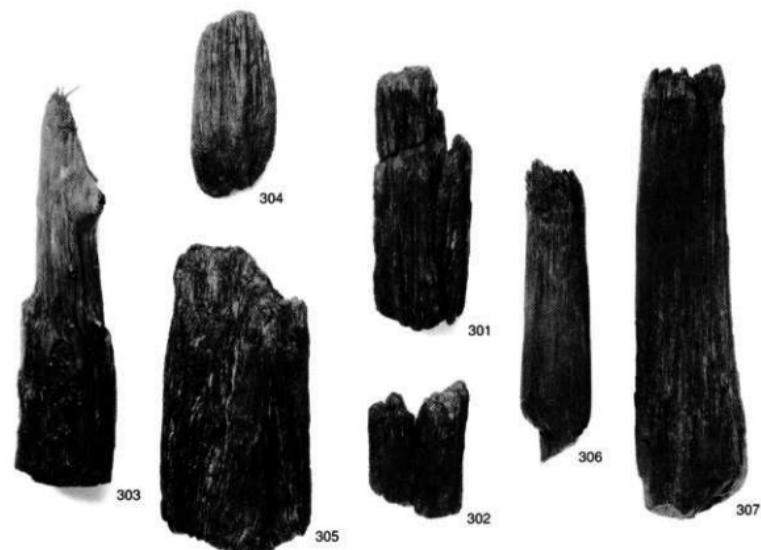


21 弥生時代以降の遺物 (4)

図版 22



22 弥生時代以降の遺物 (5)



23 ピット出土柱根・表面採集の遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	とみだきよともいせき						
書名	富田清友遺跡						
副書名	東海環状自動車道（関～美濃加茂）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書						
シリーズ番号	第72集						
編著者名	村瀬泰啓 松岡千年 山形秀樹						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058(237)8550						
発行年月日	西暦 2002年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
とみだきよとも 富田清友 遺跡	岐阜県美濃 加茂市下米 田町	21211	09261	35°04'11" 27°43"	20000704 ~ 2001122	1,480m ²	東海環状 自動車道 (関～美 濃加茂)建 設に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
富田清友 遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡	繩文土器(押型文) 磨石、扁平砥石、 礫器、石鎌、石錐	繩文早期の竪 穴住居跡2軒、 煙道付炉穴6基 を検出した。 そのうち1基は 煙道部の天井 も残る良好な 状態であった。		
		弥生	竪穴状遺構	弥生土器			
		古墳	竪穴住居跡	土師器 須恵器			
		中世	竪穴状遺構 掘立柱建物跡 井戸状遺構 盛土状遺構	白瓷系陶器 中世土師器皿 古瀬戸			

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第72集

富田清友遺跡

2002年3月25日

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター

岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社コームラ